広島市立大学審査学位論文

博士学位論文

近・現代の日本人の名前に関する言語学的研究

平成 27 年 9 月

広島市立大学大学院
国際学研究科　博士後期課程
国際学専攻
張　強

目次

序章.....1

0．1　研究の契機.....1

0．2　研究の材料と方法.....4

0．3　研究の意義および研究結果の応用.....7

第一章　先行研究のレビュー.....9

1．1　『日本全国苗字と名前おもしろBOOK』（1987）.....9

1．1．1　調査対象と方法.....9

1．1．2　調査結果と重要結論の紹介と評価.....10

1．1．3　まとめ.....17

1．2　「人名」（田原広史、2008）.....19

1．2．1　人名資料と考察方法について.....19

1．2．2　考察結果と重要結論の紹介と評価.....19

1．2．3　まとめ.....22

1．3　「女性名の文字が表す意味――短大生の名前にみる命名の心理――」（麻生健人、1992）..23

1．3．1　調査対象と方法.....23

1．3．2　考察結果と重要結論の紹介と評価.....24

1．3．3　まとめ.....30

1．4　「女性名を構成する音――短大生の名前にみる名前の型――」（麻生健人、1994）.....32

1．4．1　調査対象と方法.....32

1．4．2　考察結果と重要結論の紹介と評価.....32

1．4．3　まとめ……37
1．5　「近過去の女性名(その1)」（野元菊雄、1996）……38
1．5．1　調査対象と方法……38
1．5．2　考察結果と重要結論の紹介と評価……38
1．5．3　まとめ……42
1．6　「近過去の女性名(その3)」（野元菊雄、1998）……44
1．6．1　調査対象と方法……44
1．6．2　考察結果と重要結論の紹介と評価……44
1．6．3　まとめ……46
1．7　「人名の語頭音と語末音」（田籠博、2005a）……47
1．7．1　調査対象と方法……47
1．7．2　考察結果と重要結論の紹介と評価……47
1．7．3　まとめ……57
1．8　「人名の語構成」（田籠博、2005b）……58
1．8．1　調査対象と方法……58
1．8．2　考察結果と重要結論の紹介と評価……59
1．8．3　まとめ……63
1．9　ここまでの言語学視点の先行研究のまとめ……64
1．10　学際研究としての人名研究……65
1．10．1　「姓」「氏」「名字」「苗字」……66
1．10．2　近現代日本人名の構成について……73
第二章　研究資料の選定と研究用語の定義について……77

2．1　人名資料の選定……77
2．1．1　「読売年鑑」人名録の1968年版について……79
2．1．2　「読売年鑑」人名録の1987年版について……81
2．1．3　「読売年鑑」人名録の2007年版について……82
2．2　人名データベース……84
2．3　用語定義……88
2．3．1　「モーラ」……88
2．3．2　「名根」と「機能的名素」及び「モーラユニット」……88
2．3．3　「名値（めいち）」……90
2．3．4　「止め字」……91
第三章　女性名について……94
3．1　女性名の表記と読みの基礎データ……94
3．2　女性名の表記……98
3．2．1　女性名の表記の基本データ……100
3．2．2　部位別で見る女性名の表記の字種（漢字種）……103
3．2．3　時代別で見る女性名の表記の字種昭和前半と後半の比較……111
3．2．4　女性名特有の仮名名枠……122
3．2．5　女性名の表記のまとめ……126
3．3　女性名のモーラ……127
3．3．1　女性名のモーラ　基本データ……127
3．3．2　段別で見る女性名のモーラ……133
3．3．3　行別で見る女性名のモーラ……134

3．3．4　女性名のモーラのまとめ……136
第四章　男性名について……138
4．1　男性の名前の表記と読みの基礎データ……138
4．2　男性名の表記……142
4．2．1　男性名の表記の基本データ……142
4．2．2　部位別で見る男性名の漢字表記の字種……145
4．2．3　時代別で見る男性名の表記の字種昭和前半と後半の比較……154
4．2．4　男性名の表記のまとめ……165
4．3　男性名のモーラ……167
4．3．1　男性名のモーラ　基本データ……167
4．3．2　段別で見る男性名のモーラ……175
4．3．3　行別で見る男性名のモーラ……178
4．3．4　男性名のモーラのまとめ……180
終章……181
5．1　重要な考察結果……181
5．1．1　女性名の止め字について……181
5．1．2　人名におけるジェンダー（文化的・社会的な性差）……185
5．2　今後の課題……189
付録……191
人名資料編……203
参考文献……204
謝辞……213

序章

序章では、本研究を行おうとする契機と本研究の最終的に達成したい目的などを中心に説明する。

0．1　研究の契機

日本の人名に関する本研究の原点は外国人日本語学習者である筆者自身の体験にある。日本語人名の読み方の難しさとその面白さは筆者が自分自身の日本語学習経験で身を持って知ったが、周囲の他の日本語学習者もその難しさに困っている状況をも目にしてきた。通常、中国の大学日本語科の授業では大学の後半から日本の歴史、社会事情などの科目が設置されており、それまでの文法を中心としたテキストより人名を多く見られるようになる。次々に出てくる知らない日本人の名前をこれまで学んだ単語の読み方で読んでみても、ほとんど間違って先生に訂正されることは日本語学習者ならだれでも経験していたはずであろう。中国人日本語学習者に特有の間違いとも言われる最もありがちな間違い方は分からない漢字の部分をすべて音読みにする傾向で、これは筆者自身の経験でもあり、周囲のほとんどの日本語学習者も同じ傾向の間違いをしていた。その原因は次のように考えている。

①男性名のほぼ全部と女性名の約九割[1]が漢字だけで記され、漢語と和語を区別する重要な目印としての送り仮名が付されていないため、日本語学習歴の短い学習者にとって和語より漢語として認識されがちになる。この点においてはまだ検証を必要とするが、おそらく、初・中級の全日本語学習者に見られるのであろう。

②中国人日本語学習者の場合に限り、母語干渉の影響も考えられる。中国人日本語学習者にとって、人名に含まれる難しい・知らない漢字の訓読みが分からなくても、多くの場合、中国語における同音字[2]を媒介にその音読み

[1]本研究の統計結果による

[2]同音字とは、中国語において同じ発音を有し、書き方と意味の違う漢字を互いに同音字と呼ぶ。日本語に置き換えると、同音異義語に近いが、語彙単位ではなく、漢字単位となる。なお、場合によって、同

を推測できる[3]。例えば、「加藤嘉雄（かとうよしお）」という人名があるとしよう。この人名の中の「嘉」は常用漢字表に含まれず、一般的な日本語文書においても人名・地名など固有名詞の場合以外に出現することはほとんどない。従って日本国外の中級レベルの日本語学習者はこの「嘉」の訓読みを基本語彙として習得していないと想定される。一方、中国語母語話者なら中国語の「加（jiā）」と「嘉（jiā）」が同音字であることにすぐ気づくはずだろう。「加藤」という日本で上位十位くらいに多い名字の読み方をすでに知っているかもしれないし、例え名字としてその読み方を知らなくとも「加」は「学習漢字」[4]の配当では小学校 4 年で「加工」「参加」「加算」など使用頻度の高い単語に含まれ基礎的な語彙として習得済みだと考えられる。つまり中国語母語話者は「加＝か」と中国語の発音で「加（jiā）＝嘉（jiā）」から、容易に「嘉」（音読み）＝「か」だと推測できる[5]。当然ながらこの「嘉」を含めた人名をどうしても声を出して読む必要がある場合「加藤嘉雄（よしお）」の中の読み方の知らない「嘉」を「加」から推測できた「嘉（か）」で置き換え、「加藤嘉雄（かお）」と読むのはむしろ必然的な結果である。このような人名に含まれた訓読みすべき漢字を音読みとした間違いは恐らく漢字文化圏以外の国の日本語学習者に起きない。本稿の調査範囲を超えるが、韓国語話者の場合はどうなるかはたいへん興味深いところではあるが、まだそれに関する報告が見当たらない。

そもそも、人名は名詞の下位概念の一つである「固有名詞」に分類される。

音字は意味上の関連性が認められるケースも多数存在するが、意味は無関係のもある。

[3]現代中国語に 400 余りの音節しか有しないのに対し、数万の漢字が配分されている。同音異字のケースがおびただしい。一方、漢字漢語が導入された際、古代日本語には中国語に固有する声調を有しなかったり、閉音節が未発達したりする古代日本語で、その時代の中国語の漢字音を完璧に再現しようとしても到底不可能である。結果、中国語の音韻体系と比べて単純だった日本語の方が中国語原語以上の同音字を出してしまった。最初に日本に伝わった呉音の時代から漢音の時代、唐宋音の時代へと時代が変っていく内に中国大陸には幾つかの王朝が交代し、中国語自体の音韻体系も変わっていた。しかし全てそうであるとは言いきれないが全体的な流れでは、同音字は音韻体系が変化しても同音字のままであると考えている。上述した日本語の字音と中国語の歴史上の関係をみて容易に以下の結論を得た。中国語において同音の漢字が日本語においても音読みを同じくするのが一般的である。

[4]「教育漢字」とも、「学習漢字」は日本漢字能力検定協会の呼び方である。具体的には小学校学習指導要領の別表「学年別漢字配当表」を指す。

[5]2006 年に筆者が中国の大学の日本語科高学年生を対象として実施したアンケート調査の結果より。

人名を一つのかたまりとして全体視すれば一名詞にすぎない。とはいえ、その内部構造は普通名詞と比べて複雑であり文字数や拍数など語彙的特徴に差が大きい。その多くは複合語ないし文節的な特徴を呈している。しかも、普通の文の文法規則や文字の読み方にあてはまらない場合が多い。その複雑でかつ不規則性が原因で、日本語を学習する際にはアルファベット諸語を母語とする人々のみならず、同じく漢字を使う中国話者にとっても難関の一つである。人名の読み解きの正解率は日本語母語話者と外国人日本語学習者の間の差は正式な測定は行われていないが、少なくとも両者の日本語能力の差を下らないのであろう。実際筆者の過去中国の大学日本語科の 2 年次生と 3 年次生を対象としたアンケート調査の結果においてその差はより大きなものであった。同じ日本語母語話者の場合でも、人名を正しく読む能力に差がある。経験上学生時代では大差がなくとも社会人になってから、職種により開きが現れ、特に教師や役所などで戸籍担当者、保険会社関係者など人名を扱うチャンスの多い仕事に就く人ほど人名に強いのではないかと考えているが、実証には至っていない。理由はやはり見聞きした人名実例の数量にあると考えられる。この実際の経験による習得過程は人間の第一言語の習得過程と一致する。そもそも人名は固有名詞で、名詞の一種、つまり語彙である。母語話者の間に存在する言語力（国語）の差のように「強い」人は強いが、「弱い」といっても相対的な意味の「弱い」で、難しくない人名なら大体判読でき、中級レベルの外国人日本語学習者のような取り違えはしないはずであろう。

上述のように日本語母語話者と外国人学習者の人名を正しく読む能力に関する正式な報告はまだないが、六川（2011、2012）は日本人名に対する性別判断の能力に関して実例アンケート調査を実施、報告している。結果、日本人のほぼ全問正解したのに対し、外国人[6]の方の正解率は 80%に留まっている。筆者のいう日本滞在歴のない中級学習者なら正解率は更に低下すると推測される。

母語話者にとって文法学習を必要とせず自然習得できるが、外国語を学習する場合、文法の勉強は不可欠となる。同じく日本語母語話者・日本滞在暦の長い外国人は日本語環境において日常的に接触する具体的な個々の人名を通して、

[6]平均日本滞在歴 4～5 年で、内に 2 年以上日本語学校で学習したので日本滞在歴の長い上級学習者だと分類される。

それを覚えることにより自然と経験を積んで人名に対する感覚を身につけていくことができるのに対し、自国で日本語を学習する人にとって人名が多く含まれた日本語環境に恵まれていないため、文法規則や単語の説明のような抽象的なルールによる学習方法がなければ人名を正しく読む・覚える能力を向上させる方法はない。日本人名に関して多くの研究がなされてきたが言語学的な見地に立脚し表記・音韻・性差・時代差など複数の視点を取り入れ、かつ実例人名データベースにより実証的に､総合的にアプローチするものはまだ見られない。従って、本研究は初めての試みとして、日本人名を取り上げて言語学的な特徴や法則性等の解明に努める。それにより日本人名の実態がより明らかになるだけではなく、日本語教育において日本人名の習得や教育にも益し、命名の科学的な研究や中日両国人名の対照研究への応用にも寄与しうることとなるであろう。

つまり上述の日本語母語話者と外国人日本語学習者の間の日本語環境の差を補うために、日本語の教授が行われるよう、日本の人名に関しても教授或いは学習するための情報を整理し、書面を作成する必要がある。その前段階において本研究ではまず日本人名に関する以下の問題を明らかにしたい。

(1)男女名それぞれの表記の実態調査。

①人名に使用された漢字・仮名の字種（符号を含む）の使用傾向と分布

②上記（1）の①の通時的変化

(2)男女名それぞれの読み方の実態調査

①50 音図の「段」から見る人名の読み方を表すモーラの使用傾向と分布

②50 音図の「行」から見る人名の読み方を表すモーラの使用傾向と分布

(3)上記（1）と（2）の考察結果を用いて、男女名の比較をも試みたい

0．2　研究の材料と方法

近現代日本人の実例人名資料をエクセルでデータベース化し、それを利用して人名の表記と読み方の語彙としての特徴と両者の対応関係を統計的に調査・分析、人名に存在する種々の顕在的言語現象とそれをもたらした内在的関連性を解明することが本研究の目的である。前述のように抽象的で文法ルールのよ

うな特徴や規則が高度にまとめられた人名に関する法則をえることが筆者の最終研究目的であるが、今回のデータベースによる調査は、その第一歩に位置づけられる。

人名というものは、その国の言語・民族・文化に密接していて、どの社会においても常に人々の関心を惹く。例えば英語では、anthroponomastics[7]（人名研究）と呼ばれ toponomastics（地名の研究）と合わせて onomastics（固有名詞研究）という学問分野をなす（言語学大辞典　六巻　述語編より）。中国においても昔から「人名学」は正式に学問の一分野として認められていた。日本でも、古く平安時代から「色葉字類抄」のような古辞書に人名に関する項目・記述が見られる。現在日本では人名判断や赤ちゃんの名付けハンドブックから学術研究書まで人名に関する書籍も数多く刊行されているが研究専門書の中でも、文化的要素を中心としたものが殆どであり、人名が言語現象の一つでもあることに注目したものが極めて少なかった。筆者が調べた結果、実例に基づく近・現代日本人の名前の言語学的特徴に関する表記及び読みの全面的な調査報告はまだ行われていない。従って近・現代の日本の人名を統計的に考察するには、自ら人名資料を選定しデータベース化する必要がある。もちろん言語学視点を取り入れた先行研究は全くないというわけではないが数少ない先行研究の中では人名資料の用例数、考察項目や研究手法などすべての条件を満たしたものはなかった。

例えば、吉岡英二（1998、「女子の名前における"姓・名"の拍数 ：2 拍の姓でのバイアス」）はある女子短期大学の 1997 年度在籍学生 2,809 人の名簿をまた田籠博（2005、「人名の語頭音と語末音」「人名の語構造」）はある国立大学の 2002 年度在籍学生男性 3,475 人・女性 2,063 人の登録情報を原資料として研究している。その考察の項目や結論については後ほど先行研究レビューの部分で詳しく検討するが問題なのはこのような人名データ資料で作られた人名データベースによる考察自体とそこから引き出された考察結果は筆者自身の研究目的と合致せず、そのまま利用できない。その理由については以下の点が挙げられる。

---

[7]イタリア語綴りらしい

これらの人名資料は元の研究目的を達成するに問題はないと思われるが、より多くの考察項目へと調査範囲を広めることはその資料の性格上の制限を受け、容易ではない。まず年代幅の制限が著しい。短大なら基本は 2 年大学なら 4 年、大学院が設置されている大学でも、博士後期課程を数えても 9 年程度の幅の年代しかカバーできない。しかし大学院生数は学部生に比べて減少する傾向は顕著となる割に、留学生の割合が急増する現象は一般的である。つまりデータのバランスを考えれば、旧帝大規模ほどの大学でない限り、大学生の名簿を原資料としてとある年度に一回限り収録する場合、その人名データが有効的にカバーできる年代は 2 年間から 6 年前後だと考えるのが妥当であろう。多くの先行研究の中でも指摘されており本稿でも後述するが、人名には流行性の要素から影響を受けやすく、一部の一過性の出来事の影響でその前後の年に限って漢字や読みが爆発に増加するケースがよく観察される[8]ため、意図的にその年か年代の人名特徴を調査しようとするのでもない限り、これらの研究が適用出来る年代範囲は限定的で共時論的な研究に属する。従って日本人名の共通特徴を目指した本研究と比較することはできるが、日本人全体一般の特徴として踏襲、或いは代替とすることはできない。加えて地域性の制限も顕著である。東京大学は全国の高校生が目指して志願する大学のトップに違いないがこの東京大学でさえ、地元東京都の合格者数は他府道県と比べて格段に高く全国平均の三倍だという[9]。つまり一箇所の大学の学生名簿を日本全体の人名研究の材料にするのは明らかに不都合な点が存在する。そもそも、このような人名データの取得方法は大学関係者が在籍する大学に対しその身分を利用して実現したものである。名簿の取得は研究という目的で被害が出る恐れはないが、学生の立場にすれば、大学に届け出た情報は本来の使途とは別の目的に利用されたこととなったに違いない。プライバシー意識が日々高まる昨今、責任を問われるリスクを背負ってまで個人の研究者に協力する大学当局はないと思われる。

また、先行研究の中に「日本全国苗字と名前おもしろ BOOK」（第一生命広報部編、1987）という人名情報を豊富に有する生命保険会社が主導した調査報

---

[8]例えば、改元した直後の数年間新しい年号に含まれた漢字やオリンピックで金メダルを獲得したスポーツ選手の名前や活躍中の芸能人などがそうである

[9]「東大合格者数［2013 年第一位東京都］」<http://todo-ran.com/t/kiji/12088>20130828

告もあった。存続時期が長く契約者数の多い保険会社の人名データは量質とも申し分はないが、その調査報告の内容は人名を「苗字」と「名前」に二分して、主に年度別、地域別などの区分で上位情報といった統計結果を示す程度にとどまるものであった。即ち一般大衆の関心をもつ内容という方向性が強く、調査の重点は言語学的な面に置かれているわけではなかった。

このように現存の先行研究及び調査報告の中には量、質、内容すべての面において日本人の名前の言語学的特徴の解明という目的を達成したと思われるものはなく、そのまま踏襲して利用できる人名資料も存在しない。従って当の研究目的を達成するには自ら人名資料を選定し、分析に適した形にデータベース化する必要があり、結果「読売年鑑」の別冊人名録を原人名資料に選定した。その詳細については第 2 章にて説明する。

0．3　研究の意義および研究結果の応用

本研究の分析調査の結果は、外国人日本語学習者のための人名学習方法を考案するには不可欠である。殆どの場合人名は日本人にとって一人一人の人間を意味し、その人に関する全ての情報を引き出すキーワードとして理解されよう。それを耳にした際、その人の顔やその人に関する情報が思い浮かぶ。一方、外国人日本語学習者にとって、その人より、まず言葉として捉え、一つの単語として認識される。このような違いに注目し、研究目的を達成するにはまず日本人の名前の言語的構造・特徴を把握し、それを踏まえて、習得方法を考えなければならない。それは日本人の人名に関する情報としても、有益な補充になる。

1993 年に「悪魔ちゃん命名騒動」という事件があった。生まれてきた子供に「悪魔」と命名しようとする親側と受理を拒否した役所側との争いであった。常用漢字範囲内での名付けである以上、役所側の気もちは察するが、明白な根拠はないと思われる。なぜなら歴史から見れば、マイナスイメージを持った命名行為は世界中広範囲に存在していたからである[10]。もし、この研究で明らかとなった人名の言語学規則と照合し、この「悪魔」という名前が日本人の名前

[10] 例えば、豊臣秀吉が秀頼に「捨」という幼名をつけたり、韓国の元大統領盧泰愚の名もそうである

として言語学的に不自然という結果が出たら、ある程度の説服力がつくのではないかと思う（勿論、不自然さがない可能性も十分あるが）。もちろん新たに親となる人たちがこの研究の結果を参考すれば、役所側を困らせる戸籍届け出も減るのであろう。

また、今老齢化と少子化で労働力不足に悩まされている日本にとってこれからは今まで厳しくしてきた移民政策も調整せざるを得ない状況に直面するのであろう。外国人の帰化数が増加すれば、戸籍登録の場では改名もまた問題になることは想像に難しくない。この時何かの科学的根拠を持った方が「日本人らしい名前を作ろう」という旨を説明するのに便利だと思われる。一方、日本社会に順調に溶け込もうとする帰化側の外国人にも改名する際、いかに日本人らしき名前を作るかの参考にもなる。

更に進行時的な用途であるが、大量の人名データを扱う業務分野では、例えば、保険会社、電話会社や戸籍管理の役所部門など顧客名簿を作成する必要のある分野では、もっと人名入力に特化した入力ソフトの需要があるに違いない。前述のように、人名の構成は複雑で、普通の文と語彙との構成と異なり、それをスムーズに入力することを可能にする独自の法則が必要である。この研究の結果がそのようなソフトの開発の参考にもなりうると考えている。

第一章　先行研究のレビュー

この章では、まず本稿と同じく「実例人名データベースを利用した」と「言語学的視点に基づく」の二点の条件を満たした先行研究の紹介と整理を行う。それを通じて言語学視点に基づく実例人名データベースによる人名研究の全体像と現在の到達点を把握する。そしてそれを踏まえて、本研究の考察方向と内容をセッティングしたい。

先行研究の整理は基本的に各論文をそれぞれ独立した節に要約する。同じ研究者による継続的な研究も各論文の発表時期に沿って単独で紹介するが記述上、原文の要約を基本とし、筆者の考えや認識と食い違いのある箇所にだけコメントを加えるものの、それ以外は原作者の観点や研究結果の要約紹介となる。従って専門用語や表現もできるだけ原文を尊重し踏襲するので、他の章との用語が不統一となることを断っておかねばならない。

なお、先行研究を整理した後、本研究において重要不可欠と思われる民俗学・歴史学をはじめとする旧来の諸文化視点の既存情報をもまとめて示すようにした。

1．1　『日本全国苗字と名前おもしろ BOOK』（1987）

当書は第一生命広報部が自社[11]顧客データを基に統計・編纂した人名に関する調査報告である。本全体の重点は「ランキング」に置かれていて、本研究の考察目的と完全に一致していないものの、他に例のない膨大な実例数を有するデータベースを利用した統計研究という点に鑑みて先行研究として紹介すべきだと判断した。

1．1．1　調査対象と方法

統計に使われたのは第一生命の 1986 年 3 月 31 日までの契約者 11,098,833 名のデータをサンプルとした超大型人名データベースである。この点において得た統計結果は精確さが高く、後で紹介する他の個人的なデータベースと比べて、地域性由来の偏りも最小限にとどまった利点がある。なお「コンピュータ

[11]第一生命保険株式会社の前身。

処理のため、いずれもカタカナ表記となっている（p.15）」との断りがあった。何を指すかは具体例を示されなかったが、恐らく下記名前のランキングなどで、読み方はすべて片仮名で記すように統一されたことを指すと推測出来る。この処理方法の問題点に関しては 1.1.3 で改めて指摘したい。

1．1．2　調査結果と重要結論の紹介と評価

まず、提示されたのは表 1-1[12]の「全国の苗字ベスト 20」、表 1-2 の「男性名前ベスト 50」と表 1-3 の「女性名前ベスト 50」である。

順位	苗字	1,000 人につき
1	佐藤	15.83 人
2	鈴木	13.32
3	高橋	11.32
4	田中	10.61
5	渡辺	10.07
6	伊藤・伊東	9.50
7	中村	8.64
8	山本	8.56
9	小林	8.12
10	斎藤	7.99
11	加藤	7.20
12	吉田	6.70
13	山田	6.61
14	佐々木	5.90
15	松本	5.27
16	山口	5.19

[12]表は原文からの引用で、構文上の都合により、本稿における表の番号付けは筆者によるものである。なお、以降第１章の表について特に断りのない場合、この注釈に準ずる。

順位	苗字	1,000 人につき
17	木村	4.76
18	井上	4.70
19	阿部・安部	4.64
20	林	4.25

表 1-1　全国の苗字ベスト 20

表 1-1 は他の機関や個人の同類報告[13]と比べ大差が見られず、上位の苗字は殆どランクインし、順位の微差しか観察できない。ただし、ここで、一つ指摘しておきたいのは、順位 6 番の「伊藤・伊東」のペアである。確かに読み方を同じくする苗字は同じルーツを持って、さかのぼれば同じ先祖にたどり着くことが多い。しかしすべてのケースにこの法則が当てはまるに限らない。この「伊藤」と「伊東」はその反対事例である。「伊藤」は伊勢に進出した秀郷流藤原氏でこれに対し、「伊東」は工藤流藤原氏が伊豆の伊東荘を領有したことに起源した苗字である。秀郷流藤原氏が公卿系統の藤原氏にルーツを持つかどうかはともかく、両者はたとえ同じく藤原氏の流れを汲むとしても、嫡流と分家の兄弟同士の関係にあらず、同じ読みをしたのは全くの偶然に過ぎない。これは同じ家系で分家することにより発生した同音異字の苗字の間柄とは根本的に違うので、表 1-1 の性格に鑑みて、合算することは適切ではない。

なお、19 番の「阿部」「安部」のペアにも疑問が残る。もし読みを「あべ」とすれば「阿倍」[14]「安倍」と記して、現在は少数派になったが、蘇我氏・物部氏などに並ぶ古代から続く「本家」もカウントするべきであろう。このランキングは読みでカウントされていたのであれば、このような問題が生じるが、同じ表記が理由で無選別にカウントすれば、また、別の不都合（同字異音）が生じる。調べたところ、「安部」「安倍」の表記には、「あべ」だけでなく、「あんべ」「あんばい」などの読み方も存在する。

---

[13]佐久間（1972）など。

[14]「阿倍」氏は「稲荷山古墳出土鉄剣銘」に登場する「大彦」を上祖とする皇別の中央古代豪族で、政治の頂点に立ったことはないものの、歴史に名を残した人物は少なくはない。「阿倍仲麻呂」や、「安倍」と改称した後の「安倍晴明」が特に有名である。

要するに、表記か読みが同一ということだけを指標とせず、同源である確かな証明ができなければ、同一苗字としてカウントする統計方法は厳密さに欠け表 1-1 の 6 番と 19 番のような扱い方で同表の他の苗字との統計規則にズレが見えたことが最大の問題点である。そもそも、表 1-1 のカウント基準は表記か読みかでさえ不明白である。

表 1-2 は男性の名前の「読み」によるランキングで、表記の漢字の字種は無視されて統計されたと思われる。

順位	名前	千人につき
1	ヒロシ	21.58 人
2	タカシ	13.08
3	アキラ	11.97
4	カズオ	11.68
5	トシオ	11.11
6	ヨシオ	10.56
7	ケンジ	9.21
8	ヒデオ	9.11
9	マサオ	8.88
10	タケシ	8.5
11	ミノル	8.42
12	キヨシ	8.38
13	コウイチ	7.77
14	ユキオ	7.72
15	コウジ	7.64
16	シゲル	7.27
17	タダシ	7.06
18	ミツオ	6.75

順位	名前	千人につき
26	ススム	5.38 人
27	ノボル	5.36
28	オサム	5.35
29	シンイチ	5.30
30	アキオ	5.09
31	マサユキ	5.08
32	マサル	5.04
33	シゲル	5.01
34	ユタカ	4.97
35	フミオ	4.86
36	ショウジ	4.85
37	イサム	4.77
38	ヨシアキ	4.71
39	タカオ	4.66
40	ユウジ	4.60
41	ヨシヒロ	4.55
42	タケオ	4.44
43	ヒトシ	4.40

順位	名前	千人につき
19	ヒロユキ	6.58
20	ヤスオ	5.77
21	マコト	5.76
22	イサオ	5.75
23	マサヒロ	5.7
24	ケンイチ	5.53
25	ツトム	5.39

順位	名前	千人につき
44	カツミ	4.33
45	サトシ	4.11
46	ショウイチ	4.02
47	マサミ	3.98
48	マサアキ	3.95
49	ノブオ	3.92
50	テツオ	3.89

表　1-2　男性名前ベスト 50

当書の編集者の指摘によると、

> 興味深いのはベスト十位までの名前がいずれもカナ三文字であること、また、そのうち半分が名前の末尾に「オ」が付くことである。（p.18）

この結果について、筆者のこれまでの調査結果「男性名は 3 モーラと 4 モーラの比率には大差ない」を覆すように受け取れる。しかし単純に数学的に潜在的に可能なバリエーションの種類を考えると、4 モーラの男性名の方が桁違いに多い。裏を返せば、同じプールの中で上記二種類の男性名の比率が同じだとすれば、3 モーラの方がより少数の名前に集中しやすいとも考えられるので、結果的にランキングにおいて、最上位を多く占めたのは寧ろ必然である。しかし、恐らくランキングの幅を広めば広めるほど、4 モーラの男性名のランクイン数が増えてゆき、最終的に互角となるはずであろう。なお、この表が提示した結果はもう一つの現代の男子の名付け事情を示唆したとも受け取れる。現代に入って、男性名のモーラ数は減少の傾向にある。歴史人物の実名（名乗り）は基本的に 2 文字 4 モーラであった。もちろん、書物資料に名を残した人物の殆どは武士を中心とした知識層であり、一般百姓の名前に関してはあまり注目されず、報告が乏しい状態である。本稿で使用する人名データベースは明治時代の

データを豊富に取り揃えたと言えないが、大概な傾向が見られよう。これらの推測は後の本論の考察で検証してみたい。またこの表について、編者からもう一つの指摘があった。

> 一位の「ヒロシ」は、最も長い期間安定して上位の座にあった。特に大正十一年から昭和四十三年の間に生まれた人の中では、ほとんどすべての年代で第一位の座を占めている。例外は、年号にちなんで付けられたと推測される「ショウジ」（昭和二年）、「ショウゾウ」（昭和三年）がトップになった二年間だけである。（p.18）

この記述は社会要因が人名ランキングに影響を及ぼした実例の一つを提示したにとどまったが、当書の第三部分の「名前でたどる 80 年史」では様々な社会要因が人々の名付け事情にもたらした影響が伺える。例えば、男性名の「マサオ」は明治末期からベスト 5 にランクインし、大正に入ってきては元年からトップをキープしていた（ちなみに、大正元年の女性名のトップは「マサコ」であった）。しかし、大正 5 年に突然それまでベスト 5 に無縁だった「タツオ」にトップの座を奪われた。これは、この年が「辰の年」であったからに違いない。当書のランキング統計はカタカナによる「読み」を基準としているので、すべての「マサ」は「正」に限らない。男性名の「マサ」は大正以前では、恐らく「政」「昌」「雅」「正」など様々な漢字が使用されていて、大正に入ると、「正」の字に集中するようになったと考えられる（当書の提供された情報では検証できないので、あくまで推測に過ぎない）。このように、上記のような様々な偶発的な社会要因が時に、一定の時間あるいは空間に限って、名づけ事情を大きく左右することもある。本稿のこれからの考察において、これらの作用をも考慮に入れ、統計で得たデータがどこまで普遍性を持つかを見極める必要があるだろう。

順位	名前	千人につき

順位	名前	千人につき

順位	名前	千人につき	順位	名前	千人につき
1	ケイコ	22.59 人	26	エイコ	8.70 人
2	ヨウコ	18.43	27	チエコ	8.67
3	ヨシコ	18.15	28	ユキコ	8.65
4	ヒロコ	18.00	29	ヒサコ	8.02
5	カズコ	16.26	30	ミヨコ	7.80
6	ミチコ	14.81	31	ユミコ	7.80
7	マサコ	14.70	32	ノブコ	7.79
8	サチコ	13.56	33	マユミ	7.74
9	トシコ	13.17	34	ヒロミ	7.61
10	ノリコ	13.00	35	エツコ	7.32
11	キョウコ	11.37	36	スミコ	6.92
12	フミコ	11.15	37	ヨシエ	6.82
13	ジュンコ	11.02	38	クミコ	6.77
14	トモコ	10.70	39	アケミ	6.25
15	アキコ	10.17	40	ヒデコ	6.06
16	セツコ	9.92	41	アツコ	6.03
17	ミツコ	9.64	42	トミコ	5.84
18	レイコ	9.61	43	アヤコ	5.76
19	ユウコ	9.57	44	カズエ	5.72
20	エミコ	9.22	45	テルコ	5.70
21	ヤスコ	9.15	46	ミユキ	5.39
22	タカコ	9.02	47	カヨコ	5.38
23	キミコ	9.00	48	マリコ	5.10
24	キヨコ	8.85	49	シゲコ	4.97
25	ミエコ	8.80	50	シズコ	4.89

表 1-3　女性名前ベスト 50

大正と昭和前半の女性名の特徴と言えば、やはり「コ」の就くのが圧倒的に多かったことにある。表 1-3 は特に、その傾向を強く反映していた。ベスト 50 の内、1 位から 32 位まで「コ」が連続し、全体的に 50 の 44 が「コ」で終わる名前に占められた。編集者がもう一つの重要な傾向を指摘した。

> 「キョウコ」「ジュンコ」といった拗音を含んだ名前を除けば、すべてカナ三文字の名前が並んでいるのも特徴といえる。（p.18）

しかし、筆者はこの記述に違和感を覚えた。これらの名前も拗音が含まれたか否かと関係なく、音韻学的観点の特徴からすれば他の訓読みや長音と同じ 3 モーラの名前である。当書の編集者が仮名の個数にこだわりすぎた故に、このような表現が生じたのであろう。しかし確かに 3 モーラの女性名が圧倒的に多いことも事実である。当書の第三部分の「名前でたどる 80 年史」によると明治時代の末まで、まだ 2 モーラの女性名が上位を独占していた。しかし、大正時代に入ると、「コ」が付く女性名の台頭とともに、女性名のモーラ数も急増していた。そして、

> 昭和五五年からは、「コ」がつかず、しかも二文字の名前が上位を占めるようになった。八〇年代（昭和五五年以降）は、つまり「マイ、エミ、ユカ」など「コ抜け二文字」の名前が目立つ時代と言うことができる。（p.22）

と女性名のモーラ数の変化はまた「コ」が入るか否かに大いに関係しているような記述が見られる。そこで、女性名のモーラ数の増加は「コ」が付くことに由来するかという仮説が立てられよう。その検証はランキングだけを手がかりにしても結論に辿りつけないため本論にてデータベースの統計データに基いて行うこととする。

女性名前ベスト 50 の内 44 は「コ」がついていたが、残りの六つは以下の通り、「マユミ、ヒロミ、ヨシエ、アケミ、カズエ、ミユキ」だった。これらの名前を通常の考え方により語末音で分類すれば、「ミ」で終る「マユミ、ヒロミ、アケミ」と「エ」で終る「ヨシエ、カズエ」と「キ」で終る「ミユキ」の

3 種類になる。「マユミ」「ヒロミ」「アケミ」この三者の語学的構造が同一とは考えにくく、単に語末音が「ミ」だという共通点に尽きる。しかしこの六つの名前を形態論的な、すなわち語の構造の観点を取り入れながら、語末音を「コ」で置き換えられるかによって分類すれば「ヨシエ、カズエ」と「マユミ、アケミ、ミユキ」の二つのグループに分けられ、「ヒロミ」はどちらにもなれるすこし変わった存在となる。「ヨシエ、カズエ」は「エ」を「コ」に置き換えれば、同じ表の中ですぐ見つけられる。つまり「〇〇コ」の変種だと考えられる。「マユミ、ミユキ」はその読みからすぐ「真弓」「美雪」のような一般語彙が連想でき「真由美」「美由紀」など表記が若干変わったとしても表記の「個性」を求めた故だと考えられる。「アケミ」は女性名としてはどうも変則的だと思われる。表記として「明美」とも「明海」[15]がとも散見できるが、そもそも、この名前は男性名[16]としも苗字としても存在し、女性名に使われるのは現代になってからのことである。「ヒロミ」について表記に絡んでも二通りの解説ができる。例えば表記が「広美」の場合、「ミ」を「コ」に置き換えれば、極普通の「広子」にもなれるがこれは男性名の「ヒロム」の女性名バージョン「ヒロミ」としても捉えられる。類似した例は男性名と女性名の間に存在する同じ語彙素に異なる語形のような関係－名づけて「動-名[17]の対」の関係－が本研究のデータベースで、ある程度確認できている。人名は「表記」と「読み」という表裏の二面性を持ち、一方を抜いて議論しても全体像をつかむことが難しいため詳しい検証は本論で実例に基づいて行いたい。

1．1．3　まとめ

前書は大衆の関心度の高い各種人名ランキングを中心に編集されたもので膨大なサンプル数に恵まれ、その統計結果の精度はいうまでもなく他の全ての人名研究より高い。この点において後の人名研究のデータの検証基準値とされよう。しかしながら当書が提示してくれた情報の殆どは個々の人名を全体視した

---

[15]「明海」をベースに女性らしくアレンジした結果「明美」が作られたと考えているが、検証のしようがない。

[16]幕末の歌人橘曙覧（たちばなあけみ）、は男性である。

[17]人名人名データベースの構築において観察できた一つの現象。かおる、みのるのような動詞形の男性名にかおり、みのりのような対応する名詞形の女性名が存在している。

ランキング形式で漢字や仮名単位までに細分されてはいないため厳密にいうと、言語学的な視点を採り入れたとは言い難い。一方、前述のように筆者が欲する情報は人名の表記と読みの構造及び対応関係の徹底的な解明であり、当書の編纂目的と本論文の研究方向の不一致は明らかである。この調査目的の不一致で、当書の各種ランキング情報を本研究において簡単に利用しかねる。

例えば、ランキング上位の名前というのはそれが世に溢れていることも意味するので外国人でも、すぐそれらの名前を見聞きして覚えられる。しかし、外国人日本語学習者に必要な日本人の名前の全体像がそこにはない。また、1.1.1で言及したカタカナ化する方針に関しても当書の編集目的においてさほど問題視する必要はないが、男性名はともかく女性名の場合、「漢字名」「漢字かな交じり名」「仮名名」の区別が全く付かなくなるのでそれに関する使用状況や傾向性の考察も当然不可能だ。なお、これもまた本来の考察目的の違いから生じたもので表記と読みという本来人名の表と裏という密接な関係にあったはずの両者が別々に取り扱われてしまった。同じ漢字でも違う読み方をし、同じ読み方でも違う漢字で書く。日本の人名の難しさはまさにそこにこそある。当書のランキング中心の情報提供ではこのような違いは殆ど反映させられなかった。

1．2　「人名」（田原広史、2008）

田原（2008）[18]は「人の名前の変遷は言語変化を観察する材料として（p.40）」考え、人名の流行を通時的に考察したものである。

1．2．1　人名資料と考察方法について

田原（2008）の分析に使用された人名データベースは東京のある病院の 1984 年度来院分のカルテの名字が「あ行」から「た行」までの患者名（下の名前）で、男性 1,358 人と女性 1,489 人から構成される。

出生年の構成については 1900 年生まれから 1909 年生まれをグループ 1 とし、以降 10 年ごとを 1 グループに、計 9 グループに分けた。但し、グループ 9 は 1980 年生まれから 1984 年生まれの 5 年間のもので 1 グループには 100 人～250 人程度が含まれる。

1．2．2　考察結果と重要結論の紹介と評価

田原（2008）は筆者の収集した先行研究の中でそれまでの研究では取り扱わなかった文字数と拍数[19]の対応関係に注目し、特にデータベースを利用し統計的な考察する点において先駆的であった。

1．2．2．1　字数と拍数

男性名の字数と拍数は 2 字 4 拍（一郎、和之など）と 2 字 3 拍（秋雄、篤司など）と 1 字 3 拍（仁、修など）の合計が 90%以上を占めた。女性名は 2 字 3 拍（淑子、和恵など）と 3 字 3 拍（恵美子、ゆき恵、ひとみなど）と 2 字 2 拍（利恵、ゆきなど）の合計が 95%以上に達し日常的な直感ほどバリエーションに富んでいなかったと著者が感想をも述べた。なお、字数と拍数の組み合わせ

---

[18]田原（2008）は本来 1991 年に『日本語学』通常号に掲載された論文ではあるが、CiNii で検索した際、ヒットしなかったため、最初は見つからなかった。筆者が入手したのは『「日本語学」特集テーマ別ファイル意味 2（命名/言語感覚）』に収録されたもので、内容は掲載当初のままだと思われる。論文作成されたのは 1991 年以前だと思われるが実際に参考している資料の出版年は 2008 年であるため、以降田原（2008）と称す。

[19]本論文の本論部分の用語「モーラ」と同義である。

の各バリエーションの割合のイメージとして、100％横積み上げ棒グラフで呈示されたが具体的なパーセンテージは記されていなかったため、本稿では再現しがたく省略することとした[20]。

1．2．2．2　字数と拍数と年齢差

ここでも男女別それぞれ 100％積み上げ折れ線グラフが呈示されている（省略）。横軸は生年別グループで縦軸は各文字数×拍数のパーセンテージである。

男性グラフの特徴で特に注目すべきは 2 字 3 拍と 2 字 4 拍の変化である。両方共上昇と低下を繰り返し波状の推移が見られるが、他の折れ線はほぼ横ばいだったためこの両者の波頭と谷は入れ替わる形で変動していた。グループ 8、グループ 9 の段階では 2 字 4 拍の優勢が拡大する一方の構図を呈していた。つまり 2 字 4 拍は「高―低―高」、2 字 3 拍は「低―高―低」との変動を呈している。

女性の場合 2 字 2 拍の変化が特に目立った。20 世紀初頭の 70％くらいの「王座」から下落し一時 5％未満まで低下したが、終戦を境目に盛り返して 30％まで回復した。一方 2 字 3 拍は他のタイプが横ばい傾向だったため、2 字 2 拍と相反の変動を呈した。但し、最初の 2 字 2 拍名は 2 仮名無漢字タイプで戦後台頭した 2 字 2 拍漢字名と表記の面において、異なる点に注意を払う必要がある。

1．2．2．3　女性名の表記上の変化

明治から昭和にかけて女性名の表記は激変し漢字名は 20％から 90％に膨らむ一方仮名を含んだ他のタイプは当然衰退していた。平仮名名と片仮名名の折れ線はほぼ同じ足取りをとっていたが平仮名の方は現在でも 5％強の勢力を保っているのに対し、片仮名名は漢字仮名交じり名とともにほぼ消滅状態である。なお、漢字仮名交じり名は名付けの新旧交代の中間生成物として「一時的に生まれたもの（p.45）」だと著者は述べている。

[20]以降のグラフも具体的な数値はなかったので、全て省略した。

1．2．2．4　添字

田原（2008）で使用されていた「添字」という呼び方はまだ固定化しておらず専門用語ではない。勿論、国語辞書などに示された項目にも当てはまらない。田原（2008）も独自の定義を決めることなく、ただ「名前の語尾につく『子』や『郎』のような部分」と例示したのみである。この用語及び指す人名の部分について筆者が本論にて改めて取り上げて論ずる予定であるため、田原（2008）の要約に限りこの用語を踏襲する。定義自体がはっきりとされていなかった原因は著者自身が述べたように、

> 名前には切れ目が感じられないもの（はる、みどり、など）と一つ以上の切れ目が感じられるもの（あや・こ、ゆき・え、きよ・み、まさ・とし、しょう・いち・ろう、など）がある。しかしどちらとも言い難いものも多い（ひと〈・〉し、しず〈・〉か、ゆき、など）。表記によって判別できるとも考えられるが（「等」は前者「由香』は後者）「宏」と「宏司」のようなものもあり必ずしも表記で判断できない。

よって、その分類と定義にまだ成案がなく、便宜上の呼び方をとったのではなかろうか。

男性の添字は種類が多く、使用例 20 人以上のが 18 種類[21]あった。一番多かった「お（雄、男、夫、生、郎）」はこの論文が作成された年代に近づくにつれ激減し、1980 年代に至ってはすでに一桁に萎縮している。「お」の衰退とともに、男性名の添字は多様化し 1.2.2.1 の取り上げた 2 字 3 拍の名前の減少も実はこれが原因だと田原が考えている。

女性の添字は男性と比べて種類が少なく上位五位だけでカバー率が 80%に達していた。男性の場合と似て代表格の「こ」の折れ線グラフを見る 1940 年代をピークに、きれいな山型をしている。「こ」の減少もまた 1.2.2.1 で述べた 2 字 3 拍減・2 字 2 拍増が原因だと原著者も考えている。

---

[21]文中の例示を見る限り、「子」「郎」が上げられたが、この18種類に「ゆき、あき、ひろ、るなど」も数えられているので著者が言う「添字」はどうも、単なる人名の語尾に位置する字を指すと思われる。

1．2．3　まとめ

実例のデータベースを使用した人名研究は以前からあった。女性名に関する研究は寿岳章子（1958）が 1950 年代にすでに行っており、男女両方を取り扱った論文も数年前唐牛誠（1986）が発表されている。しかしそれらの論文のほとんどは人名の最後の文字によるパターン化を目指したもので、旧来の文化的視点の名前の意味による分類方法[22]と比べて人名の内部構成に注目することで人名の語学的構造の問題の解明に近づきつつあったものの、まだ人名を語彙と見做して言語学的視点によるアプローチとは言いがたい。一方、田原（2008）は本稿の作成にあたって収集できた資料の中で実例人名データベースを使用し、名前の文字数と拍数の関係に注目した最初の報告である。添字についての研究は従来の手法を踏襲したと思われ、分析結果の他、視点やアプローチ方法の面では啓発的な情報を提供してくれなかったがサンプル人名の生年の期間も本稿とほぼ同じであって特に文字数と拍数の期間内の通時的変動についての調査は斬新だった。

しかし、田原（2008）はまだ個々の人名を一つの全体として扱い、人名を更に細分し表記の字種及びモーラの種類分布など細部に考察を進めなかった。そのそれぞれの配列の特徴や両者の組み合わせ規則についても言うまでもなく、言及しなかった。これらの田原（2008）の未考察内容は本研究において実施してみたい。

[22]渡刀三男（1958）など。

1．3　「女性名の文字が表す意味――短大生の名前にみる命名の心理――」（麻生健人、1992）

麻生（1992）は近現代の女性名の表記の急速な漢字化に着目し、「名前に用いられる漢字個々の意味、またそれが組み合わせされてできた名前自体が表す意味は命名者によってどのように意識されてきたのか」を解明するため女性名の表記の変化に関する考察を行った。

1．3．1　調査対象と方法

調査に使用された資料は松山東雲短期大学の学生名簿及び同窓会名簿を中心に、短大の附属幼稚園の名簿を加えたとされその内訳は下記の表 1-4 の通りである。

生まれた時期	卒業した時期	卒業した学校	人数
明治初期～ 明治中期	明治25年3月～明治 45年3月	旧制高等女学校	269
1940年4月～ 41年3月	昭和36年3月	カレッジ家庭科	41
		カレッジ栄養学院	40
	昭和34年3月	松山東雲高校	134
		小計	215
1950年4月～ 51年3月	昭和46年3月	松山東雲短期大学	797
1960年4月～ 61年3月	昭和56年3月	同上	688
1970年4月～ 71年3月	平成3年3月	同上	858
1984年4月～ 89年3月	（一部在籍中）	松山東雲短期大学附属幼稚園	149
合計			2,976

表 1-4　調査対象者のうちわけ

対象人数の少なさや地域性の偏りなどの問題点を自ら認識しており、その不足を補うために他の研究者や研究機関の研究･調査結果を参考したという。なお、麻生氏は名前の由来についてアンケート調査も行われた。

1．3．2　考察結果と重要結論の紹介と評価

旧来の先行研究を回顧した上、麻生は自らの研究を「当稿では，語学的立場から女性の名前を分析することが目的である」と位置づけた。

1．3．2．1　名前のランキング

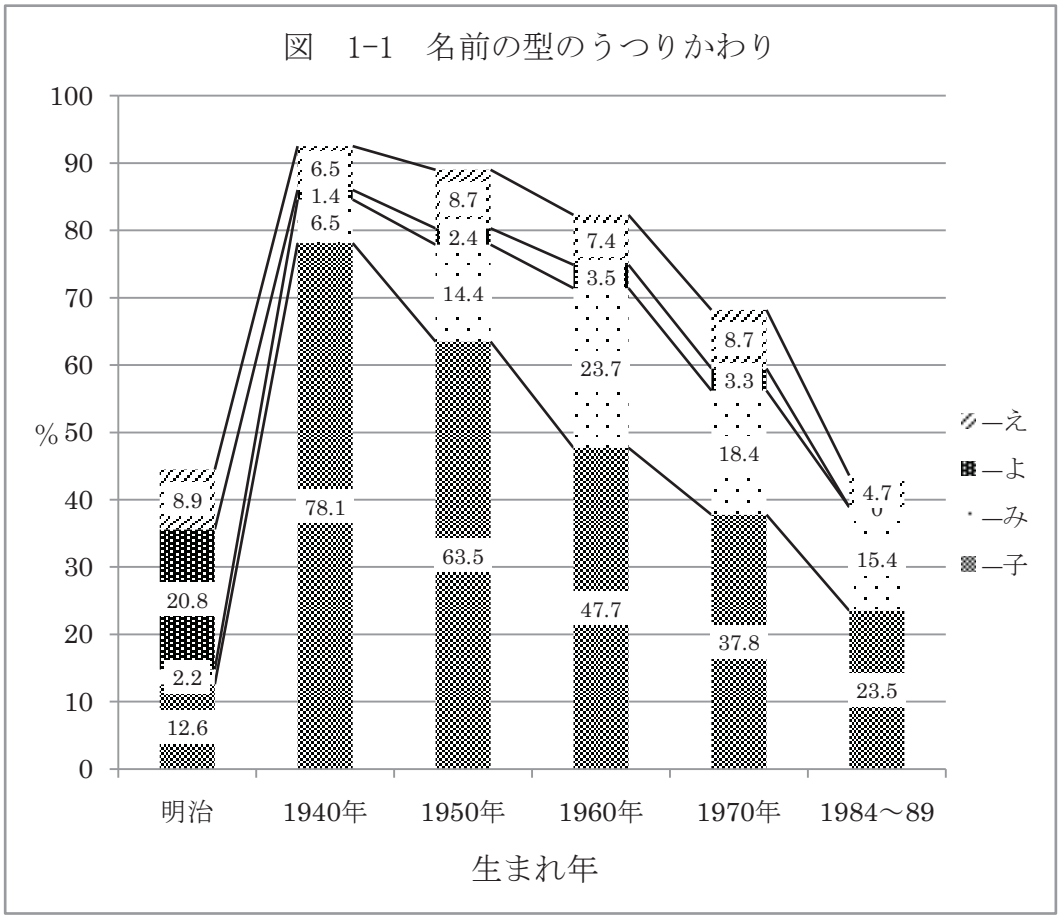
麻生はまず各年の女性名の上位 5 位表を作成したが、サンプル数が少ないため「一方で、明治時代の士族・平民の女性は中世的な 2 音節 2 字名が一般的だった」という結論を述べたがその他の分析はしなかった。しかしこの文言の用語に筆者は少々違和感を覚えた。「2 音節」という表現は「2 モーラ」に置き換えた方が正確だと考えているのである。

確かにその時代の女性名の音節数とモーラ数が一致するのがまだ基本であったため「音節」でも統計の結果にもたらす影響は軽微なものであろう。ただ「2 字名」という表現の方は注釈が必要なのではないか。本稿に転載しなかったが、原文の表を確認した結果、明治時代のトップファイブは全て仮名名であった。つまりここの「2 字」は仮名を含めた表記の個数を指すなら、特に問題にならないが原文の文面では文字特に漢字だと誤解される恐れが残る。

1．3．2．2　女性名の型

続いて、女性名の型について論じてゆこう。麻生が女性名の末尾の音に注目して寿岳章子（1979）の「―美」「―代」「―恵・江・枝」三分類を踏襲し、「―子」型に加えてこの四つの音で終る女性名のパーセンテージを元にグラフを作成した。この四種類の合計パーセンテージは明治時代では半数未満の割合だったが 1940 年の 92.5%をピークにその後連続減に転じ昭和の末期にいたっ

ては明治時代の水準に戻っていた。詳細は図 1-1[23]が示すとおりである（p.54）。



麻生（pp.52-53）は吉田澄夫（「名前とその文字」文化庁国語シリーズ『漢字』教育出版、1974）が唱える「女子の名前には女子専用の語幹がある」という説を取り入れ一部の用例も紹介し、昭和の名前はこれらの語幹に「子・美・恵・枝・江」などが付けられたことでできたものだと論じ、下記に幾つかの重要結論を提示した。

その一：同じ語尾を持つ名前でも音節数[24]（モーラ数）の違いにより、完結するものかそうでないものかに分けられる。つまり 2 音節の名前に「語尾」を加えることができるものが多く、3 音節の名前に「語尾」を加えられないのが

[23]原文のグラフを出来るだけ忠実に再現するよう努めたが、紙面や作成ソフトなどの影響で、外見は若干差がある。

[24]これは前述のように著者が使用する言い方であるが、厳密的にはモーラというべきである。この節にかぎり、著者のこの言い方を踏襲する。

一般的である。

その二：「子」型は「美・恵・代」型と比べほぼ全ての 2 音節の名前に加えられるのに対し「美・恵・代」の場合では違和感を覚えるケースが多い。従って「子」型は「美・恵・代」より柔軟性、汎用性が高い。一方、語尾にしか出現せず、語頭語中に現れない一面を持ち、表意性に乏しく、性差を示す役割以外の機能を有しない。

その三：「語幹」と「語尾」に違う役割分担を持ち、前者は命名者が名前に込めた思いを担い後者は主に性差、すなわち女性であることを示す。とはいえ、「恵」「美」のような語尾には「恵まれる」や「美しい」といった意味合いが込められたはずであろうと、この役割分担は絶対的なものでもないと自ら認識している。

その四：「和恵」と「和江」のような同音異字の名前について、まず「かずえ」という音が元となり、漢字の区別がそのバリエーションとして下位に位置づけるべきである。

上記のまとめについて、それぞれ理に適っている部分があると認めながらも、筆者は全面的に賛同することを控えなければならない。それはまさに麻生が「その三」において場合によって自己矛盾とでも受け取られる記述で示しているように、人名を考える際、その特徴を見出したとしても、どうしても何らかの例外に悩ませる。水も漏らさぬ理論で導き出した結論を得ることは不可能に近い。人名の複雑さを改めて認識させられた。恐らくより完成度の高い結論を得るためには分析そのものの再細分化が必須であろう。

1．3．2．3　女性名の字種

まず、明治時代の女性名の漢字名、平仮名名、片仮名名の統計表が提示された。簡単にまとめると片仮名名はほとんど全ての年度において有勢で、漢字名は少数あって平仮名名は殆ど皆無であった。ただ、明治末期になって、漢字名が増えとうとう片仮名名を凌ぐ勢いを得た。

続いて 1940 年、1950 年、1960 年、1970 年の女性名の漢字使用数順位表が

提示された[25]。ただし「子」は除外されたおり、除外する理由は示されていない。また、原文では言及されていないが、仮名もカウントされていなかったようである。各年[26]の表を分析すると幾つかの特徴がわかったのでそれを以下のように要約した。

その一：1950 年以降の各表の異なり字数は 200 字前後で大きな変化が見られない。麻生は「字種が増えそして大きく入れ替わる」という予想で調査に臨んだが、結果上位 10 位の漢字のカバー率は 50 年 42%、60 年 45%、70 年 49%で特定の漢字に集中する傾向にあった。

その二：春・夏、花・草、雪・朝のような具体的な事物を表す漢字は、美・恵・秀・徳など抽象的な意味を表す方より使用頻度が低い。また、同じ抽象的な意味を表す漢字であっても、価値観を押し付けるような秀・徳よりもそうでない美・恵の方が使用頻度も高い。

その三：名前は一般の熟語と異なり、全ての漢字が必ずしも具体的な意味を持つ必要はない。名前の中にしっかりと表意性の強い漢字が一つあれば十分で、全ての漢字が具体的な意味を持つとかえって重たく感じさせる。これは女性名と男性名の大きな相違点である。つまり、女性名は意味の中核をなす漢字と女性名であることを示す文字や響きを整えるための文字の組み合わせで出来たことが多く、意味の中核を負う漢字は命名者の思いが込められているので個人差が大きく、ばらつきの傾向にあるという。一方、そうでない部分について麻生は論じなかったが、筆者は時代の流行や響きの共通感覚は個人差が反映されにくく、汎用的で繁用になるのではと考えている。

1．3．2．4　文字とその音

麻生が 1.3.2.3 で言及した各年の字種表を調べた結果、全ての表において上位 10 種類の漢字は 1 音節の読み方が可能であったことがわかった。麻生は、名前は複数の文字の組み合わせでありこれら 1 音節の漢字は組み合わせに適するため、高使用頻度につながったという結果になったと推測している。しかし

[25]紙面の関係で転載はしなかった。
[26]1940 年のサンプル数はその他の年のと比べて、著しく少なかったので、同列で論じないと著者が断っている。

この推測についてその因果関係の必然性の立証がなされていなかった。筆者はこの結果をもたらした要因は別にあると考えており、本論にて論じる予定である。ここまで見てきた様々な名付けの特徴を麻生自身は以下のようにまとめている。

> 命名者には、一定範囲内から文字を選び(ここでこの範囲を規定するものは常用漢字や人名漢字といった外的な力ではなく長年にわたって構築された我々の意識の中にある。常識的な文字であるという判断基準である)伝統的にある名前の型を意識しながら文字の組み合わせに独自性を求めるという名付けの姿勢が見えてくる。

以下、図 1-2（p.59）の示すように麻生が文字数 1～3 字と音節数 2～3 音節との組み合わせにこの「型」を求めてみた。

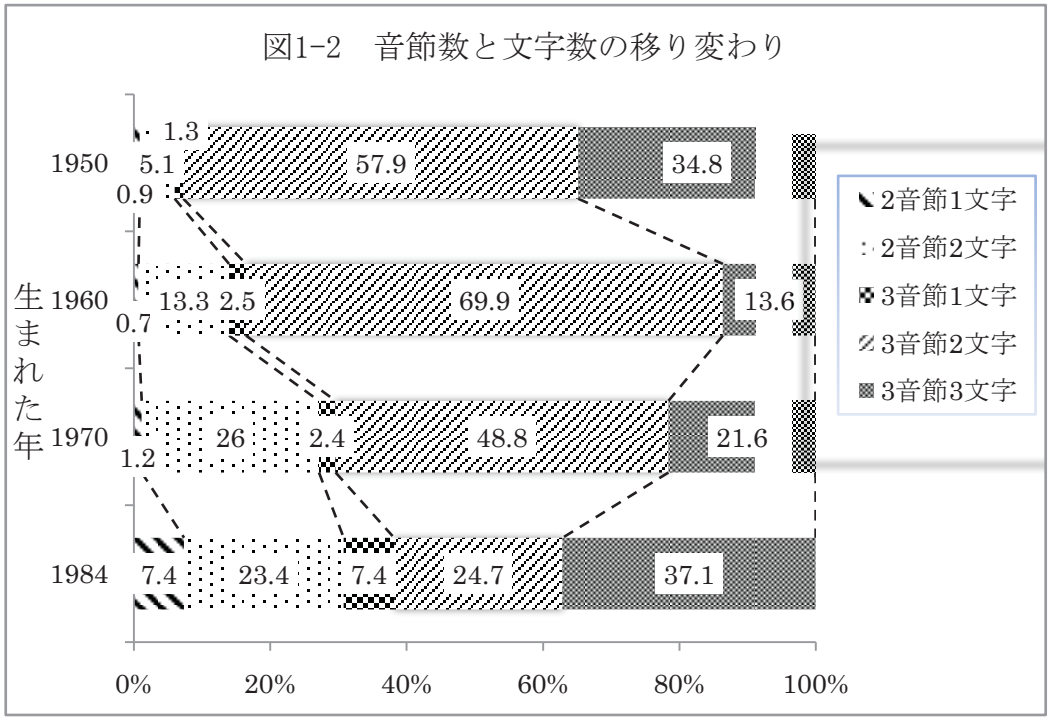


図 1-2 によればまず 2 音節の名前が増加の傾向にあり、これは従来名前の語幹の部分が独立したためで、更にその裏付けは図 2-1 に合わせて考えると、「―

子、―み・よ・え」型の割合が約半減していることからだ、と麻生が考えていたらしい。2 音節の名前が増加していることは確かだが、筆者はここで麻生が考えていた理由に疑問を抱いた。例えば 2 音節の名前が増加したとは言え、その主力となっているのは 2 音節 2 文字の名前であることは一目瞭然であろう。上の説明の通りであれば 3 音節 3 文字の一番目と二番目の音節が独立したという結果になるが、3 音節 3 文字の名前の比率は 1960 年から寧ろ同じく増加の傾向にあって実際 3 音節 2 文字の名前の一人負けであった。この分析は一見麻生自身の結論を覆すかのように見受けるが氏の続いての見解を見ると、その全てを否定することも妥当ではない。

図 1-2 によると音節数と文字数とが一致する方向で動いていて、即ち 1 文字対 1 音節化しているという。確かに 2 音節 2 文字と 3 音節 3 文字の名前が増加している（しかし、2 音節 1 文字と 3 音節 1 文字の名前も同様に増加しているのでこれだけで完全なる証拠とは言いがたいと思われる）。これを実現するために、麻生は二つの方法を考えた。

一、従来名前に用いられなかった 1 音節の文字を取り入れる
二、今まで 2 音節で読んでいた文字が 1 音節の読みも持ち合わせる場合、1 音節の方に移行する

例えば、「紀」は「のり」ばかりでなく「き」とも読むし、「知」は「とも」でなく「ち」と読む。実際漢字が訓読みから音読みに移行される場合が多いと麻生も指摘している。先の 2 音節の名前の増加分の出所についてここの内容に合わせて考えると、3 音節 2 文字の名前の 1 文字目（2 音節）が独立した後、2 音節 2 文字に分割された可能性は十分考えられよう。

1．3．2．5　最近の名付けの傾向とその工夫

この節の内容は最新名前即ち幼稚園児の資料に関するものである。生年が 1984 年～1989 年の 149 人を対象としていた。

まず、同音の名前については 70 名に達し、47%という割合だった。しかし同音同字は最大でも 2 名までの上、合計 12 名しかいなかった。つまり同音で

あっても文字の使用は多様化していると麻生は指摘しており。

次に字種について 1970 年以前のデータと照合した結果、人名用漢字として新たに認められた文字を除けば、新たに 8 文字の使用例が確認された。よって、使用字種の拡大は顕著でないという。

つづいて、麻生は新しい名付けの工夫を麻生が以下のように分類した。

① しい読み方と組み合わせの工夫で、斬新さを追求する。例えば亜結（あゆ）、美都（みと)など
② 用頻度の大会文字を頻度の低い文字に置き換える。真理子→真梨子、百合→有里など
③ 従来の型の 2 音節の名前の語尾を 3 音節の名前に利用する。みな・かな→玲奈（れいな）また、これに準じて「―か」→麻梨香（まりか）
④ 古風な名前への回帰。明治に用例のあった「〇〇の」（フサノ、トシノ）のような語尾を現代感の文字や音節でアレンジする。綾乃、雪乃

最後に名前の由来についてのアンケートに関する内容であったが、ここでは省くこととした。

1．3．3　まとめ

麻生健人（1992）はデータベースによる人名の言語学的な考察の方向性を多く提示し幾多の結論・仮説も紹介され、筆者にとっても大いに参考となったが筆者自身の仮説や考察結果と相容れない内容も存在しており、それについては本論にて検証する予定である。

なお、麻生が唱えた女性名の「型」という発想とこの「型」が時代を超えて強制ではないにもかかわらず、全ての時代の命名事情に影響を及ぼした点には筆者も同感するところが多い。命名という行為は、時に法令の制限を受けるが、基本的に命名者個人の意思による自由行為である。もちろん自由とはいえ少なくとも、命名者自身が「人間の名前」だと思う範囲内の「限定的な自由」である。しかし「人間の名前」だと思われるかどうかの判断基準は人によって様々で少数派から見た多数派は「個性に欠けたもの」も、多数派から見た少数派は

「素敵或いは変なもの」もそれぞれ自己基準によるもので、本質的に変わらず、いずれもまだ麻生が唱える「型」の内にある。しかし極少数の命名者が斬新さを求めすぎた結果、この「型」から完全に逸脱してしまえば「珍名奇名」と見なされかねない事態となる。つまりこの「型」を把握した上で、その範囲内で命名行為を行使することは何にも増して重要なのである。しかしこの論文におけるこの「型」についての説明は十分とは言えないためその仔細な様態を明白にさせることが本稿の重要な目的だと考えている。

最後に、麻生は女性の名前について以下のようにまとめている。

> 女性名で最も重視されてきたことは、まず女性であることが名前によってわかることである。次の段階で他の人物との区別という役割が認められる。つまりまず男性から区別されることが最も大きな役割なのである。結果的に男性も女性から区別されることになるが、歴史的にみて名前は公的には男性専用だったのである。従って後輩としての分を守り女性名は男性の名を常に意識しながらその領域に踏み込まないように自己規制してきたのである。

確かに、日本の男性名と女性名の性差は比較的に顕著であり殆どの場合、名前で性別を判断できる。しかし麻生（1992）の調査はデータベースに基づく統計・分析であり、本論からこの結論に結びつくような論述過程が見当たらない。故にこのまとめの内容には唐突さを禁じ得なかった。男女の名前の性差の存在は実感できるが、本論のような研究論文ならその性差を言語学的に解明した上、提示して欲しいところではなかろうか。こう考えて筆者はこの言語学的視点に基づく男女の名前の性差の解明を本論において試みたいと考えた次第である。

1．4　「女性名を構成する音――短大生の名前にみる名前の型――」（麻生健人、1994）

1．4．1　調査対象と方法

この論文は 1.2 で紹介した麻生(1992)の継続研究である。調査に使用された資料はほぼ同じではあるが、内訳の中の附属幼稚園の名簿の生年の範囲は 1984 年 4 月～1991 年 3 月に広げられ、人数は 149 名から 167 名に増えた。他の項目は表 1-4 のままであった。

麻生は、前回の調査で強く認識した女性名に存在している「型」についてそれを決めるのは表意性が徐々に薄れていく漢字の方ではなく、響き即ち音の方ではないかと考えている。従って、今回、音声面における調査で、この「型」に対する命名者の持つ意識を明らかにしようとした。

1．4．2　考察結果と重要結論の紹介と評価

この研究はあくまでも女性の名付けの命名心理の解明のためのものであり、従って本格的な音声学や音韻論的な展開はなく、分析はローマ字表記の区別レベルに留まるものと限定されている。

1．4．2．1　女性名と音節[27]

まず、麻生が自身の先の論文(1.2)の結論、「女性名は 2 音節を原則とする女性名専用の語幹とそれを類型化する語尾に分けることができ(語幹は単独で名前を構成できる)語尾は『―子』系と『―み』『―よ』『―え』系の二つの流れが歴史的に認められる」を繰り返し、更に

> 「―み・よ・え」系は語幹に付いていたものが語幹に取り込まれ 2 音節名の語尾としても用いられている（ちよ、みえ、かよなど）。

と述べた（筆者はこの記述に疑問を抱いているが、本論の関連部分で改めて

[27]この 3.4 節においても、原著者の用語を踏襲して、「音節」を使用する。

提起することとする）。

麻生はまず明治生まれから 1984～91 年生まれの各年分の 1 音節目から 3 音節目の音節ごとの音節を構成する母音と子音をそれぞれ横縦軸に統計表と同表によるグラフを作成した。表 1-5 はその一例で表とグラフは多すぎて転載を省くこととした。

	母	k	s	t	n	h	m	y	r	w	g	z	d	j	b	ky	sy	ty	nn	計
a	9	13	7	10	5	13	17	8	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0		83
i	7	14	22	6	0	10	12		2		0	1			0					74
u	4	2	6	15	0	15	0	8	0		0	0		3	0	0	0	0		53
e	4	3	3	7	0	0	0		0		0	0	0		0					17
o	0	4	2	17	2	0	3	12	0		0	0	0	0	0	0	0	1		41
合計	24	36	40	55	7	38	32	28	3	0	0	1	0	3	0	0	0	1	0	268

表 1-5　音節を構成する母音と子音（明治生まれ、1 音節目）

i　1 音節目については以下の特徴が見られたという。

①明治生まれはピークの出方が他の年と大きくずれている。
②①に対し、1940 年以降は使用する漢字音に引かれ、名前の音が決定された形跡がある。
③無声のさまたげ音「k、s、t」は全般に好まれる傾向だが減少傾向にある。
④母音は「a、e、i」のみしか語頭に立たない。
⑤鼻音「m、n」は全体を通じ、m の用例数の多さが目立つ。
⑥半母音「y」は時代を経るにつれ yo から yu への変化が見られる。
⑦有声音は名前では殆ど用いられていない。
⑧j（半母音ではない）の用例は jun という名前にのみ見られる。

ⅱ　2 音節目について使用された音節の種類が増加したことが特徴で、濁音の使用もみられたという。全体的な変化としては明治生まれがピークで、1940 年はいったん減少し、1960 年は回復を見せたが以降また減少に転じた。最後の減少は 2 音節名の増加により 2 音節目が語尾となることで、「型」が意識された結果だと麻生は主張している。

この他、e 段音の使用が少なく、その有無で音節数の増減にも影響を与えた、と麻生は考えていた。また母音の使用は多く見られたが a の使用は希である。

ⅲ　3 音節目について明治時代の 3 例（かおるこ、すてぎく、みちのう）を除けば、全て語尾である。原文のグラフでは「―子、―み・よ・え」の系統がはっきり確認できた。

1．4．2．2　音節と子音

麻生が音節ごとの子音の数をまとめて、時代別にグラフ（転載を省く）を作成した所、1940 年、1950 年、1960 年のグラフの山と谷の形が酷似していることから「女性名の子音は,時代に関わらず固定され,音節ごとの組み合わせまで変化がほとんどなかったことになる。子音においては,好みの音の順列組み合わせによって命名されるのではなくその並びについてまで明確な『型』の意識があったことの現れ」という結論を述べた。グラフの棒の高さは各音節の合計であるため、類似は偶発的だった可能性もあるのではないかと思われるが、各子音のグラフの棒の中の各音節の内訳まで類似性が確認されたため、麻生のいう「型」は別としてこの年代の女性名に子音の面において、確かに規則性が存在したと考えられる。

1．4．2．3　音節と母音

子音の調査に模して母音に対しても、同様な調査が行われた。結果は子音のと同じであったが年代別のグラフの類似性は母音の方が 1940 年から 1970 年にかけて観察できた点において子音のとズレがあった。これについては麻生が意図的に言及を避けたと思われる。

1．4．2．4　母音の並びの型

日本語の音節の特徴として母音が主位に立ち、子音が従位に立ち、母音の並びが音節の並びの骨格を形成する。従って前述の「型」をより明白にするため、麻生は以下、女性名における母音の並び方について考察している。2 音節名と 3 音節名に分けて組み合わせの一覧表を前と同じく時代別に作成されていたので転載は省くこととした。表 1-6 がその一例である。

1音節	2音節	a	i	u	e	o	
a	a	0	1	0	4	14	19
	i	0	0	0	0	6	6
	u	1	0	0	5	13	19
	e	0	0	0	0	2	2
	o	0	0	1	0	1	2
		1	1	1	9	36	48
i	a	0	0	2	0	5	7
	i	0	0	0	1	6	7
	u	1	0	0	5	2	8
	e	0	0	3	0	3	6
	o	0	2	0	0	3	5
		1	2	5	6	19	33
u	a	1	0	0	0	7	8
	i	0	0	0	3	8	11
	u	0	0	0	2	2	4
	e	0	1	0	0	7	8
	o	0	0	0	0	0	0
		1	1	0	5	24	31
e	a	0	0	0	0	0	0
	i	0	0	0	0	2	2
	u	0	0	0	0	2	2
	e	0	0	0	0	0	0
	o	0	0	0	0	0	0
	n		1				1
		0	1	0	0	4	5
o	a	0	0	0	1	0	1
	i	0	0	0	7	5	12
	u	0	1	0	0	1	2

	e	0	0	0	0	0	0
	o	0	1	0	0	5	6
		0	2	0	8	11	21
		3	7	6	28	94	138

表 1-6　母音の並びの型（明治生まれ）

各表の比較を通して見ると幾つかの特徴がみられた。

まず、網掛けの部分に注目すると年代が近いものには共通性があることが分かった。そこで全ての年代を通じて用例のない組み合わせとあった組み合わせを別の表で示すと、これはそれぞれ麻生が主張する「型」にはまったものと外れたものだと考られよう。

特に 3 音節名の場合、1 音節目と 2 音節目「e—a」「e—e」「e—o」の組み合わせではいかなる後続の 3 音節目も存在しない。女性名の音の組み合わせの絶対空白の存在が確認された。そして 3 音節目は「a、i、u、e、o」の内、唯一後続可能な音が存在する組み合わせは「u—o」「o—e」の二組である。続いて麻生がこれらを母音三角形の中の移動として考察した結果、「調音点の移動が少ない組み合わせであることがわかり」この観点で見ると 1 音節目と 2 音節目の組み合わせは「a、i、u」によるものが圧倒的に多い。さらに 2 音節目と 3 音節目の組み合わせは同母音の繰り返しを避ける傾向が見られると述べている。

一方、全ての時代に用例があった組み合わせは同じく母音三角形で見ると、まず 1 音節目から 2 音節目への移動は予想通り頂点（a、i、u）間のものが多かったものの、同母音の反復も多くみられた。また 2 音節目から 3 音節目への移動の場合「i、e、o」のいずれに向かうもので「o」に限り反復が見られる。麻生はこの結果が「型」の意識の作用の証拠だと強調している。

2 音節名についても「a、i、u」の母音が好まれた傾向が見られたという。しかしこの結論は麻生自身が 1.4.2.1 の ii において示した考えの間に齟齬が生じているのである。麻生は 1.4.2.1 の ii では「2 音節名の増加により 2 音節目が語尾となることで『型』の意識が強まり」と音節数の時代による増減について論じているが、2 音節の名前は典型的な「型」を持つ 3 音節の名前が「型」を保

ったまま音節を一つ落としてできたものだと論じている。具体的に言うと、3音節の名前は「語尾」を落としてしまうと「型」が崩れるので1音節目か2音節目の何れかを落としていたはずである。結果、「型」にはまった2音節の名前は3音節の名前の「1音節目+語尾」か「2音節目+語尾」のどちらかで構成されたはずであろう。一方、この節での結論は2音節の名前の母音の使用状況は3音節の名前の1音節目と2音節目の使用状況に似ているとなっている。ようするに、1.4.2.1のⅱの結論が正しければ、2音節の名前の母音の使用状況は、3音節の名前の「1音節目と2音節目」ではなく、「2音節目と3音節目」のと類似性を持つはずだったのではなかろうか。筆者は麻生のこの「型」の理論を全否定するつもりはないが氏の認識・定義に不備があったことは明らかで本論で女性名の「型」について改めて検討する必要がある。

最後に麻生は「音を際だたせようという意識が女性名の型を決定する一つの要因になっているのではないかという考察の方向をここに示しておきたい」と、まとめている。

1．4．3　まとめ

麻生は前節1.2と本節に分けて女性名に表記と音の両面からアプローチした。女性名に「型」の存在を強く唱えた一方、この「型」に関する細分化は行き届かない部分があり「―子」型はその他の女性名と比べ異質的だった点について、気づいていなかったと思われる。よって分離して個別に考察すべき異なる種類の女性名を同じ土台の上で論じてしまったことで、その考察結果の精度を損なった。またデータベースのサンプル数や質も恵まれたとは言えないが筆者の先行研究捜索作業の現時点の結果において、同じくデータベースを用いた研究手法の先行研究の中では氏の論文が最初のものであった。氏は模索しながら、考察の項目を考案したに違いない。後続の同手法の論文の参考手本としてはやはり評価すべきである。

1．5　「近過去の女性名(その 1)」（野元菊雄、1996）

本節では野元（1996）の女性名についての系列研究の初めての論文をを紹介したい。

1．5．1　調査対象と方法

人名データベースを構成する人名資料は野元が自身の友人から取得したある生命保険会社の名簿で、女性名につき県名、生年月日、漢字名、読み仮名からなる一覧表である。調査対象は合計 142,516 人、生年は大正 6 年から平成 4 年までで、考察にあたって凡そ、5 年毎一つのグループ[28]とし、「カ＝片仮名名」「ひ＝平仮名名」「漢＝漢字名」などで表記を区分し更に混合型の「カ+漢」「ひ+子」などの組み合わせを設けている。

1．5．2　考察結果と重要結論の紹介と評価

これだけのサンプル数のデータベースによる女性名の調査は以前類を見ず、「子」の付く名前、字種、字数、音節数などの基礎データは他の調査より精密度が高かったと考えられる。

1．5．2．1　「子」のつく名前

このタイプの女性名は「雅子」皇太子妃と「美智子」皇后[29]の名前が代表的なものである。両者の消長変化については折れ線グラフを見ると「雅子」型は S16―を「美智子」型は S25―をピークに、それぞれ「山型」と「丘型」を成していた。

1．5．2．2　字種

字種については、延べ片仮名 7,884 字、平仮名 29,931 字、漢字 281,197 字で、それぞれの比率は 2.5%、9.4%、88.1%で一人平均 2.24 字を使用したという。漢字名は大正時代既に半数強を占め、その後は上昇し続けて 90%に達してからは横ばいに推移している。

---

[28]大正はT、昭和はS、平成はH で表している。例えばS40 はS40 年～S44 年分のデータを意味する。
[29]以降敬称略。

仮名名については、戦前片仮名名が平仮名名より優勢だが、漢字名の増加で共に減少してゆきつい終戦後に逆転が発生した。平成に入り平仮名名はなお10%弱の割合を有しているのに対し、片仮名名は 0.5%未満程度しか残っておらず、仮名名では初めは 2 音節の方が 3 音節より多かったが、S11―に逆転し、報告の時点まで続いていた。

1．5．2．3　漢字の名前

まず 1 文字の漢字名についてだが、初めは 2 音節のほうが多かったものの S11―に逆転し、S45―にピークに達した以降差が縮小しつつある。これについて野元は再逆転の見通しが強いと考えている。

次に 2 文字の漢字名についてだが「子」が付かない 2 文字名は 3 音節の方が多かったものの S30―に差が最大に達した。以降 2 音節が増加しつつ、S55―に逆転となったが平成以降はまた 3 音節が巻き返している。

なお、「紀(き)子」のような「子」を含む漢字 2 字で 2 音節のタイプの女性名は 125 例あった。S11―に初めて現れ、S21―1 例、S30―1 例と続き、S35―からは用例数が多くなってくる。S35 は 11 例、S40 は 6 例、S45 は 14 例、S50 は 4 例、S55 は 5 例、S60 は 9 例、H―は 73 例あった。旧来の「子」型の衰退する中この新「子」型は当面存在感を強めてくるのであろう。

最後、3 文字の漢字名について最初は「子」の付く 2 漢字名が 3 漢字の方より優勢だったが、S16 を最大差とし、以降差が縮小しつつある傾向にある。

1．5．2．4　平均音節数と平均文字数

両者ともに S25―の 2.98 音節と 2.35 字をピークに以降減少する傾向にあり全データ平均では、2.84 音節と 2.24 字である。

1．5．2．5　希少タイプの名前

（1）4 音節以上の片仮名名

最初の例は S11―のバルバラの後、暫く出なくなったが、S25―からまた見られるようになった。一部の例、ロージー、ポンパン、フラウアー、テレシーターなど。何れも日本人の名前より、外国人の名前の片仮名による書き換えだ

と思われるが、資料の性格上、確認しかねることとなっている。

（2）「ひ+子」の 4 音節の名前

S35―の「ひかり子」と H―の「あんず子」。このタイプの女性名に関して、野元は何の分析も行っていないが、後に本論にて改めて筆者の考えを述べることとする。

（3）漢字 1 文字の名前

S6―の蛾（ガ）、S30―の瑛（エ）、S60―の茜（シ）の 3 例。野元は資料のミスではないかと考えたが、提供者の意見に沿って資料至上主義の立場を取った。何れも日本の人名だと考えにくい 1 音節なものだったからか、この 3 例の名前に関して野元が至極違和感を抱いたのも無理は無い。野元がとりわけ茜は資料のミスだと強く疑ったのは、その読みが音訓ともに存在しないからに違いない。

しかし、中国人の筆者にとって、この 3 例を見た瞬間、思わず彼女たちは中国人であろうと考えた。まず 1 音節の名前は日本人の名前にしてあまりにも短かったので、もはや他人と区別するという人名の基本機能も果たしにくくなってしまっている。一方、中国人の名前は 1 字 1 音節名がまず半数も占め、日本語で音読みすると本来の「四声」[30]が消滅して音節だけ残り、結果として 1 音節の名前が現れても不思議でない。しかもこの三つの漢字の内、特に「蛾」と「瑛」は中国人の名前における出現率は日本の場合より遥かに高いと思う。「瑛」は 1981 年に新たに「人名漢字」追加された漢字で、資料当時では人名に使えない漢字であった[31]。なによりも「茜」の読みである。音読みにしても「せん」しかない。万葉仮名の用法でも「せ」になり、「し」にはならない。一方、「茜」は中国語では、「西」と同じ発音[32]で、IPA 表記とすれば日本語の「し」と同じ[ɕí]となり、実際の発音も近い。因みに、中国人の英語初心者は英文字の「C」

[30] トーン、声調とも言い、日本語のアクセントと違って、中国語では音節とセットとなり、意味区別において不可欠な要件である。

[31] 勿論当用漢字による制限がある前に名付けられた名前である可能性も存在するが、論理的に考えるとその可能性が低い。

[32]「多音字」で、別の発音も有する。

をこの字の音で発することが多い。つまり、この「茜（し）」は日本語より、中国語の音読みだと考えた方がよほど合理的であろう。

もう一種類は 1 文字 4 音節の名前、S50―の「寿（ことぶき）」、H―の「輝（かがやき）」などである。

（4）漢字 2 文字の名前

ここで特筆されるべきは漢字 2 文字 4 音節の女性名である。具体的に見ていくと皆「漢字+子」のパターンで S6―から現れはじめたが「紀子」型同様、H―では爆発的な増加が見られる。例：桜子 22、薫子 18、緑子 3、忍子 1、葵子 1。実際に多かったのは桜子と薫子でつまりこの種の名前のバリエーションは限られていると言えよう。時代差では薫子が最初多かったが、だんだん桜子に追い越された。

（5）漢字 3 文字の名前

2 音節の名前は S55―に「木綿衣（ユイ）」があった。これは「木綿（ゆう）」から漢字と初めの読みを取って付けられたと考えられ由来さえわかれば、理解できる。

4 音節の名前は S2―に「延千代（ノブチヨ）」、S21―に「寿美栄（スミエイ）」、S25―に「政穂美（マサホミ）」、S40―に「博千代（ヒロチヨ）」、S45―に「寿美礼（スミレイ）」と「五月女（サオトメ）」、H―に「椰朱美（ヤスミン）」がある。女性名は上の「薫子」型以外基本的に 3 モーラまでという認識があった。ここにあげられた名前は個人的に野元が入手したリストの元データのミスだと考えざるをえない。「延千代」と「博千代」は単純に性別のミスだと。「寿美栄（スミエイ）」と「政穂美（マサホミ）」と「寿美礼（スミレイ）」は入力ミスだと考えられる。2 モーラの漢字の読みの最初の仮名だけを取る万葉仮名的な用法は女性名には頻繁に使われるが、パソコンに入力す際にはそのままではほとんど出てこないので、読みの全部を入力するしかない。しかもデータベースソフト[33]では入力した漢字の読みを自動的に別の列に入力

[33]例えば、Excel など。

する便利な機能がある。大量のデータを続いて入力し、ついうっかりして個別例の訂正を忘れた経験は他の人にもあるだろう。「寿美栄（スミエ）」「政穂美（マホミ）」「寿美礼（スミレ）」なら、極普通の女性名となる。「椰朱美（ヤスミン）」に関して、野元が外国名の漢字表記だと推測しているが、筆者は外国人なら、「やすみん」ではなく、「ジャスミン」のままのではと考えている語頭の濁音を故意に外すことが日本語の語感を有する人の証だと考えられる。「やすみ」が考えられないので、「じゃすみん」に因んで付けられた名前だと考える方が妥当であろう。使用された三つの漢字について、以下のように考えている。「ジャスミン」には「耶悉茗」という当て字があり、「悉」は 2004 年追加された人名用漢字なので当時使えなかった。「茗」は現在でも使えず当然代替が必要だった。「耶」は 1976 年に追加された字で、既に使い古した感じがするのに対し「椰」は 1990 年新たに追加された字で、推測だが恐らく名づけた年ではないかと思われる。そこで、その新鮮さが理由で置き換えたと考えられよう。残念なことに以上の内容はあくまで筆者の推測の域を出ず、実際に検証する術がない。

5 音節の名前も挙げられたが明らかに男性名だったらしく、野元は紹介するのをやめている。このことが上の 4 音節の方にも性別ミスがあったと推測した理由でもあった。

（6）漢字 3 字で「子」で終る名前

前節で野元による幾つかの表記と読みの関連性が通常のと異なる名前を紹介したが、前述のように単なるデータ入力ミスの可能性もあり、例えそうでないとしても個別例に過ぎず個性的な名前の一言に尽きるので、その紹介を省くこととした。また相当の量の仮名漢字混在型の名前が列挙されたがその転載もしないこととする。

1．5．3　まとめ

野元（1996 など）は女性名だけ取り扱った調査であるが、サンプル数に恵まれ、中小規模の人名データベースでは取れにくい 2 文字 2 モーラの「漢字+子」

をはじめ分析に耐える量の少数派の名前を収録したことで、その分析ができ、貴重な情報を提供してくれた。一方、資料の性格上外国人或いはハーフの名前の除外が回避できなかったことは難点で、また本稿では取り扱わないが、地域分布の面での考察も今までに無かった報告ではないかと考えられる。

1．6　「近過去の女性名(その 3)」（野元菊雄、1998）

本節では野元の女性名についての系列研究の最後の論文を紹介する。系列として「その 2」も発表されているが発表先のテーマに合わせるため、地域差に焦点を当てた考察であった。本稿との関連性が希薄なのでその紹介は割愛することとした。

1．6．1　調査対象と方法

全データの扱い(作業)が難しいが理由で、この「その 3」の調査に使用された資料は 1.5 の原資料から五分の一の量を抽出して作成したものとなった。

1．6．2　考察結果と重要結論の紹介と評価

今回の考察内容は「―コ」で終る女性名に絞られている。「―コ」と書いたのは「子」に限らず他の表記のものも含まれたからである。

1．6．2．1　音読みと訓読み

「子」の前の漢字が音読みか訓読みかについての調査である。野元は「現代漢語例解辞典」（林大監修、1992 年、小学館）を音訓の判断基準としており、音読みとなっている字を「音」とし「音」となっていない字を「訓」としたという。この分類法では辞典に音読みと記されず特別な音をした字は「訓」に分類される。従って「今日(きょう)子」なら「訓訓子」となる。しかし少々気になるのは音読みが 2 音節の字の万葉仮名的用法を使った名前の分類である。例えば、「有希(ゆき)子」の場合、「有」に「ゆう」という音読みがあり万葉仮名的用法では「ゆ」と読むことができるものの、辞典に「有」の音読みに「ゆ」を載せるはずがない。野元の説明ではこのようなケースを言及していなかったが、何れに分類されても違和感を覚えるのであろう。

下記表 1-7 は「子」が付く 2 文字と 3 文字の女性名の音訓を生年階層で統計した結果を示すものである。

	2字	3字

	音子	訓子	全体での%	音音子	音訓子	訓音子	訓訓子	全体での%
T	17.78	82.20	27.27	40.00	6.67	6.67	46.66	9.09
S2-	18.95	81.05	39.09	43.33	23.33	6.67	26.67	12.35
S6-	25.94	74.06	44.51	50.60	22.89	8.44	18.07	15.46
S11-	30.35	69.65	49.57	46.46	25.20	8.66	19.68	15.66
S16-	27.17	72.83	52.94	55.55	19.19	7.58	17.68	14.91
S21-	35.09	64.91	47.08	54.31	14.75	14.03	16.91	17.66
S25-	41.16	58.84	47.41	56.23	17.68	14.20	11.81	17.53
S30-	41.70	58.30	42.62	58.78	18.88	13.30	9.04	18.21
S35-	40.25	59.75	34.34	63.58	15.45	13.68	7.29	16.05
S40-	39.08	60.92	36.13	66.07	14.43	13.11	6.39	14.25
S45-	41.38	58.62	26.61	65.98	16.07	12.48	5.47	14.28
S50-	45.12	54.88	22.96	66.80	11.07	17.62	4.51	14.78
S55-	41.33	58.67	17.52	65.62	13.02	17.19	4.17	12.41
S60-	40.74	59.26	9.93	69.81	8.49	12.27	9.43	7.79
H	45.06	54.94	5.97	59.91	14.74	15.67	9.68	5.12
合計	38.11	61.89	29.5	61.14	15.88	13.38	9.50	13.47

表 1-7　「子」が付く女性名の生年階層別音訓別比率

漢字 2 字の「訓子」タイプは最初 80%前後を占めていたが、漸減の傾向にあり、平成になると 55%まで減っていた。漢字 3 字の場合「音音子」は右肩上がりして 70%まで増えたが平成に入るといったん頭打ちとなった。「訓訓子」はずっと減り続いたが昭和末期から若干の回復が確認でき、他の二種類は 10%～20%の区間中で緩い起伏を繰り返している。

1．6．2．2　「良子」「幸子」の読み方について

「良子」の読み方は音読みと訓読みに別れた典型的な例であろう。統計の結果、「りょうこ」38 例対「よしこ」42 例であって大差は見られなかった。もう一種類の訓読み「ながこ」も 5 例あったが他の一過性の要因の作用によるも

のだと思われる。

「幸子」についてはその音読みの「こうこ」が極端に少なかったため、音訓の対立より同じ訓読みの「さちこ」と「ゆきこ」の対立が目立つ。「さちこ」の 203 例に対し「ゆきこ」は 43 例、「こうこ」3 例しかなかった。

なお、この二つの名前の読み方について統計で分かった実際の傾向が何れも野元自身の予想に反した結果となっていた。また生年階層と地域差視点の比較もなされたが顕著な規則が観察できなかったそうだ。

1．6．2．3　その他の「―コ」について

読み方が「こ」で終わるが「子」と書かない用例の紹介である。例、2 音節 2 字では「香好」（かこ）、「里湖」（りこ）、「真幸」（まこ）、「亜紀」（あこ[34]）。3 音節 1 字では「都・京」（みやこ）。3 音節 2 字では「静香」（しずこ）「陵誇」（りょうこ）など、他には「江、功、古、亨、庫、花、光、姫」などの字も「こ」と読ませたという。3 音節 3 字では、佐智呼」（さちこ）、「美奈川」（みなこ）などあった。

生年階層と地域分布の考察の結果も、同じく顕著な傾向が見当たらなかったという。

1．6．3　まとめ

野元（1998）は「コ」で終わる女性名だけに焦点を与えて考察を進めたが、本章では人名の表記と読みの対応関係において最も難しくかつ重要な問題点―同じ表記に対して複数の読み方が存在可能（音読みと訓読みの対立、または訓読みと訓読み同士の対立）であるという点に言及した。最後に繰り返して述べるが、野元の一連の報告の貢献はその膨大なデータ数にある。統計などの作業はそれだけに困難だったと思われるが提示してくれた報告内容は他に見られないものが多かった。

---

[34]呉音か。

1．7　「人名の語頭音と語末音」（田籠博、2005a）

田籠（2005a[35]）は名前の音、即ち読みに関する考察である。特に語頭と語末の音を中心としている。

1．7．1　調査対象と方法

研究に使われた人名資料は2002年度ある国立大学の在籍生の「氏名の読み」「性別」「日本人か留学生かの区分」の3項目の抽出データである。推定年齢18～24才で出生年（名付けの時期）は1980年前後だと考えられる。

原データから留学生を除いて男性3475、女性2063人（延べ語数）、同じ読み方をする名前を整理した結果、男性名736、女性名379（異なり語数）を得られた。　以下は人名を「語」と見なし「語長」「語頭音」「語尾音」について考察した結果のまとめである。

1．7．2　考察結果と重要結論の紹介と評価

この研究報告については著者自身が本文の冒頭に述べたように、「一般には漢字表記に関心が向けられ、音としての性質が問われることは稀である。…（中略）…人名の音の配列に何らかの傾向性が存するとすればそれを人名という言語環境における日本語の音の性質の現れの一つと解することができるのではないだろうか」。今まで殆ど注目されていなかった人名の一側面を新しい角度からアプローチすることに意義があったので、以下、その内容を詳しく紹介したい。

1．7．2．1　語長

まず、著者は「語長」について「音韻論的単位の『拍(モーラ)』によって数えた長さ」と定義した。例えばタロウは3拍、リョウ・ヘイは2拍となり、全体的な集計結果は表1-8に示した通りである。

	2拍	3拍	4拍	5拍	6拍

[35]次の節に紹介するの先行研究は同一作者によるもので、発表年も同じであり、区別するため、これを田籠博（2005a）と称する。

男性	26	254	421	22	13
女性	81	298	0	0	0

表 1-8　男女別語長分類（異なり語数）

この表について、著者は最大拍数の違いの他、男性名の語長は 4 拍、女性名は 3 拍が基本語長だと断定したものの、この結論には既に疑問を抱いている。まず、この表は異なり語数ではなく、延べ語数で集計すべきだったのではなかろうか。そして 3 拍の名前の重複率は理論上 4 拍のより高いため、その誤差をますます増大させた可能性が大きい。筆者自身以前の調査でも 3 拍男性名は 4 拍のより少ないものの、両者の用例数に僅差しかなかった。

1．7．2．1．1　男性名 5・6 拍語の特徴

6 拍の男性名の語学的構造は至って単純で、2 拍の前部要素に 4 拍目から 6 拍目の「イチロウ」か「サブロウ」が続いて構成される。5 拍の男性名は数種類に分かれたがさほど複雑でもない。大別して、1 拍目の前部要素にプラス「イチロウ」の「1 +4 タイプ」と 2 拍の前部要素にプラス「タロウ」「ジロウ」「シロウ」「ノスケ」の「2+3 タイプ」の二種類にまとめられる。この語構成の特徴の他、音的にも特徴が認められ、6 拍のすべてと 70%強の 5 拍の男性名の前部要素の 2 拍目が「イ、ウ、ン」に集中している。

1．7．2．1．2　男性名 2 拍語の特徴

2 拍の男性名の 2 拍目にも音的特徴があり、「イ、ウ、オ、ク、ル、ン」に限られるという。これは 2 拍の女性名の 2 拍目の「全母音と五十音図全行にわたる」と比べれば非常に対照的な結果だと考えられよう。

1．7．2．2　語頭音の分布

著者が五十音図にならい、男性と女性の語頭音分類表を作成した。

ア	28	138	イ	14	27	ウ	1	1	エ	9	18	オ	1	4

カ	47	160	キ	13	18	ク	10	14	ケ	25	232	コ	19	147
ガ	1	2	ギ			グ			ゲ	4	9	ゴ	2	8
サ	6	59	シ	28	156	ス	5	10	セ	9	24	ソ	6	12
ザ			ジ	2	5	ズ			ゼ			ゾ		
タ	77	416	チ	4	6	ツ	9	43	テ	15	49	ト	41	151
ダ	8	78							デ			ド	1	1
ナ	20	99	ニ			ヌ			ネ			ノ	34	75
ハ	6	17	ヒ	48	312	フ	11	17	ヘ			ホ	3	3
バ			ビ			ブ	1	1	ベ			ボ		
マ	37	287	ミ	27	51	ム	5	6	メ			モ	13	24
ヤ	17	74				ユ	27	251				ヨ	29	182
ラ	1	1	リ	4	4	ル			レ	4	4	ロ		
ワ	1	10												
キャ						キュ	2	2				キョ	3	6
ギャ						ギュ						ギョ		
シャ						シュ	16	71				ショ	10	43
ジャ						ジュ	9	41				ジョ	3	5
チャ						チュ						チョ	1	1
ニャ						ニュ						ニョ		
ヒャ						ヒュ						ヒョ	1	1
ビャ						ビュ						ビョ		
ミャ						ミュ						ミョ		
リャ						リュ	8	22				リョ	10	66

表 1-9　男性名の語頭音分類表（異なり語数と延べ語数）

ア	253	36	イ	23	7	ウ	1	1	エ	85	12	オ		
カ	102	20	キ	15	8	ク	26	4	ケ	46	1	コ	5	3
ガ			ギ	1	1	グ			ゲ			ゴ		

サ	130	25	シ	20	9	ス	8	7	セ	6	3	ソ	1	1
ザ			ジ			ズ			ゼ			ゾ		
タ	26	11	チ	76	17	ツ	2	2	テ	3	2	ト	78	9
ダ									デ			ド		
ナ	99	16	ニ	1	1	ヌ			ネ			ノ	27	7
ハ	22	7	ヒ	95	12	フ	20	6	ヘ			ホ	1	1
バ			ビ			ブ			ベ			ボ		
マ	196	33	ミ	190	44	ム	2	1	メ	26	2	モ	10	5
ヤ	21	4				ユ	215	26				ヨ	74	7
ラ			リ	55	11	ル	6	2	レ	17	5	ロ		
ワ	4	3												
キャ						キュ						キョ	46	1
ギャ						ギュ						ギョ		
シャ						シュ						ショ		
ジャ						ジュ	16	3				ジョ		
チャ						チュ						チョ		
ニャ						ニュ						ニョ		
ヒャ						ヒュ						ヒョ		
ビャ						ビュ						ビョ		
ミャ						ミュ						ミョ		
リャ						リュ						リョ	2	2

表1-10　性名の語頭音分類表（異なり語数と延べ語数）

原文の表を表 1-9[36]、表 1-10 で再現したが、拗音は原文では同じ子音を持つ直音の右側に記されたが書式の都合で表の下部に移動した。なお破線の左は延べ語数、右は異なり語数となっている。

以下、1.7.2.2.1 から 1.7.2.2.6 まで表 1-9、表 1-10 に基いて行われた考察の結果であり、考察は基本的に異なり語数と延べ語数両方で行われていた。

[36]書式の関係で、イウエ段のデータを省略して示した。

1．7．2．2．1　頻度による検討

著者は異なり語数と延べ語数、そして男女の区分でそれぞれ上位五位と上位十位のトータル比率を統計として示した。

異なり語数ベースでは男性の場合、10 位は 58%、5 位は 34%、女性の場合、10 位は 63%、5 位は 43%、延べ語数ベースでは男性の場合 10 位は 66%、5 位は 43%、女性の場合 10 位は 70%、5 位は 48%であった。すなわち、男性より女性の方が上位の拍に集中ｓ、異なり語数より延べ語数の方が上位の拍に集中している。

1．7．2．2．2　行別の集計

男性は「タ」「カ」「マ」行に、女性は「マ」「ア」「サ」行に集中しており、性差が際立つ。全体として「ラ」行音と「濁音」が下位にあり特に女性の場合「ガ」行の「ぎ」しかなかった。

1．7．2．2．3　五十音図各行別の検討

このセクションでは行ごとに仔細な分析を行い 2 拍目とそれ以降の拍との組み合わせも合わせて考慮したが、紹介は字数制限の関係でここで割愛することとした。

1．7．2．2．4　母音別の検討

母音別の集計結果は下記表 1-11 の示す通りである。

男性	異なり語数	ア段	249 (12)	オ段	149 (10)	イ段	140 (8)	ウ段	69 (8)	エ段	66 (6)
	延べ語数	ア段	1341	オ段	607	イ段	579	ウ段	343	エ段	336
女性	異なり語数	ア段	155 (9)	イ段	110 (9)	ウ段	49 (8)	オ段	33 (7)	エ段	25 (6)
	延べ語数	ア	852	イ	476	ウ	280	オ	196	エ	187

		段		段		段		段		段	

表1-11 語頭拍の母音別集計

男女による「オ」段の違いが目立つ一方、「ア」段最多「エ」段最少の共通点も見られる。順に詳しく見ていくと、

①「ア」段は男女とも語例が多いものの、後続の拍との組み合わせをも確認すると女性より男性の方が少数のパターンに集中する傾向にあった。

②「イ」段は特に指摘すべきことはない。

③「う」段は「ユ」を除けば、語頭に立ちにくい性質のようである。

④「エ」段は「ケ」以外用例数が少なかった。しかも全く用例のない拍が多数ある。

⑤「オ」段は男女差が激しく、男性の語例は多い一方で、女性の語例は少ない上で少数の拍に集中する傾向が見られる。

1．7．2．2．5　拗音について

人名の語頭音において拗音は直音と違う様態を呈している。まず「キャ」「シャ」など「ア」段に相当する語例が全く見当たらない。次に2拍目との組み合わせを見ると男女ともごく少数の例外を除けば「～ウ」「～ン」のパターンに当てはまる（詰まるところ、和語がなく基本的に漢語である）。この性質もまた、「ア」段の語例がないことの理由になりうる。つまり「きゃう」「きゃん」は日本語的ではないと考えれば説明がつく。続いて男性は「ウ」段と「オ」段、用例がほとんどペアで揃うのに対し、女性は「ウ」段に「ジュ」があるのみで、「オ」段に多かった。そして男女共に空白の行がある。

1．7．2．2．6　濁音語について

男性の場合、語頭に立つ濁音の拍は 7 種類 18 語あった。2 拍目と合わせてみると「ガク」と「ジロウ」の 2 例を除けば、皆「ゴウ、ドウ」、「ゲン、ジン」、「ダイ」のように「ウ」「ン」「イ」といった特定の拍が続く音構造を呈している。女性の場合も男性のと同様で、最初の字は訓読みではなく音読みを使用したことが明白な原因である。「ガク」も同じ理由で説明できる。著者が「ジロウ」と女性の例外「ジュリ」について音の性質ではなく語構成の面から説明すべきだと述べたが「ジロウ」はやはり漢字音を使用していたし、「ジュリ」は西洋人名に模した（或いは音訳）名前で、上に挙げた諸「漢語」名とルーツを異にするが和語即ち「訓読み」ではない点において通じたと思われる。

さて、田籠（2005a ）が作成された契機となる「ジュン」「ジュンコ」については著者が結論を見送ったが、今のところ、筆者が「ジュン」は漢字音であり、和語が基本の伝統的な女性名とはそもそも系統が違うため音の構成規則が異なるのも不思議でないと一旦結論づけてもよいと考えている。勿論、これで問題解決したとはいえないが、この問題を解くには田籠博（2005a ）の言語学的視点だけでは明らかに不十分であり人名の歴史に関する情報がその鍵となるのであろう。従ってこの問題について、本論にて改めて取り上げて検討したいため本節での展開説明は差し控えたい。

1．7．2．3　人名の語末音の分布

語末音の分布に関しては男女共通して拗音が語末に現れなかったため、ここでは割愛している。男性名について 2 拍、5 拍、6 拍の場合既に上述したが 2 拍は母音か撥音が多い。5 拍、6 拍は「ロウ」「スケ」のような特定の後部要素に限られ当然語末音は「ウ」「ケ」に決まっている。従ってこの節の考察対象は 3・4 拍の男性名と 2・3 拍の女性名に絞られた。

異なり語数ベースの統計結果は下記表 1-12、表 1-13 が示す通りである。

	3拍	4拍		3拍	4拍		3拍	4拍		3拍	4拍		3拍	4拍
ア			イ	2	20	ウ	5	2	エ			オ	25	4
カ	5	15	キ	27	46	ク	4	5	ケ	0	16	コ	0	21

ガ	1	0	ギ			グ	0	8	ゲ	0	4	ゴ	11	0
サ	3	31	シ	30	22	ス	0	7	セ			ソ		
ザ			ジ	28	0	ズ	0	12	ゼ			ゾ		
タ	17	0	チ	3	23	ツ	1	13	テ			ト	22	15
ダ									デ	0	8	ド		
ナ			ニ	0	2	ヌ			ネ	0	1	ノ		
ハ			ヒ	1	0	フ			ヘ			ホ	1	0
バ			ビ			ブ	2	16	ベ			ボ		
マ	3	0	ミ	6	20	ム	9	0	メ	2	0	モ	0	2
ヤ	21	0				ユ						ヨ	0	1
ラ	2	0	リ	1	35	ル	18	14	レ			ロ	1	31
ワ														
ン	0	4												

表1-12　男性の語末音分類表（3拍／4拍）

	2拍	3拍		2拍	3拍		2拍	3拍		2拍	3拍		2拍	3拍
ア	1	2	イ	4	3	ウ	2	0	エ	5	38	オ	4	0
カ	5	28	キ	5	10	ク	1	0	ケ			コ	1	92
ガ	0	1	ギ			グ			ゲ			ゴ		
サ	3	6	シ			ス			セ	0	2	ソ		
ザ			ジ			ズ	1	1	ゼ			ゾ		
タ			チ	1	0	ツ	0	2	テ			ト	0	5
ダ									デ			ド		
ナ	8	9	ニ			ヌ			ネ	0	1	ノ	1	5
ハ			ヒ			フ			ヘ			ホ	6	4
バ			ビ			ブ	0	1	ベ			ボ		
マ	3	1	ミ	13	44	ム	0	2	メ	1	0	モ	2	0
ヤ	3	0				ユ	1	0				ヨ	2	20

ラ	1	1	リ	6	11	ル	0	7	レ			ロ	0	2
ワ	1	0												
ン	1	0												

表 1-13 女性の語末音分類表(2 拍／3 拍)

この二つの表についても、表 1-8 と同様、異なり語数ではなく、延べ語数で統計すべきだったと筆者も考えているが、残念ながら原文で提示されたのは上記の二表だけであった。

1．7．2．3．1　全体的傾向

男性の上位十一位までの合計は 403、女性の上位十位までは 316、割合に換算すると 60%、83%となる。上位五位まで男性 232（34%）、女性 248（65%）で語末音でも男性より女性のほうが特定の拍に集中する傾向が伺え、性差の存在も明らかである。

1．7．2．3．2　行別の検討

著者がほぼすべての音を逐一に検討していたが紙面の都合もあり詳しい内容の紹介は一旦省略し語頭音と合わせ、本論の考察結果との比較の時に必要に応じて取り上げることとした。

1．7．2．3．3　母音別の検討

日本語において動詞はウ段で、形容詞はイのように語末の音に規則性が見られる。この節はこのような規則性は人名にあるか否かについての考察である。

母音別の集計で多い順は男性「イ、ウ、オ、ア、エ」、女性「オ、イ、ア、エ、ウ」となり、性差が認められる。しかし内訳を詳しく見ると、女性に「オ」段が多かったのは「コ」の用例数が圧倒的に多かったためだと分かる。「ヨ」を除けば他の「オ」段の語末用例が多いとは言いがたい。つまり順番は客観的なものだが、鵜呑みしてはならないようである。五段の何段が好まれるより、ある具体的な音が好まれたことで集計結果に大きな影響をもたらすこともある点は注意を要したい。

以下、男性の 3 拍と 4 拍、女性の 2 拍と 3 拍の集計結果を示したのが表 1-14

である。

		ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
男性	3拍	52	98	39	2	60
	4拍	46	168	99	29	74
女性	2拍	25	29	6	6	16
	3拍	48	68	13	41	128

表 1-14　語末音の母音別集計

多用の順番は男性では「タ、ヤ、シ、ジ、ル、オ、ゴ、ト」、女性では、「エ、コ、ミ、ヨ」など性別の標識とされる音が強く影響しているかのような記述が原文から読み取れる。そして 2 拍の女性名について「女性固有の特徴はむしろ 2 拍の語に求められる」とした上で用例数の最多の「ミ、ナ」の実例を取り上げて分析した。

アミ　エミ　キミ　クミ　スミ　タミ　ナミ　フミ　　マミ　ミミ　ユミ　ルミ　レミ

エナ　カナ　ナナ　ハナ　マナ　ミナ　リナ　レナ

上記の 2 拍女性名について「こうした組み合わせで作られた語は具体的な意味内容を持つ語として機能することはなく、純粋に記号的な呼称となる」と著者は考えている。

本説の考察結果として冒頭での設問に対し答えが提示されなかった。この節の内容は筆者にとっていささか論点がぼやけたように見える。はっきりした見通しを持たずに考察に臨み、結果結論らしい結論に至らなかったので、所見をあれこれと書き留めたままに終わった感がある。考えるに名詞、動詞、形容詞語幹、形容動詞語幹、そして「語」とならない音まで、さまざまな要素の組み合わせで人名が成り立つため品詞分類のように特定の語尾にまとまることはま

ずできないであろう。と言いつつ少なくとも単純語[37]というべきか、一つの語彙単独で作られた名前なら傾向性が見られる可能性は否定できない[38]。勿論それを解明するには人名をより詳しく分類した上での考察が必要だと思われる。

1．7．3　まとめ

田籠博（2005a）はこれまでの先行研究をより一歩進めて、今まであまり注目されなかった語頭音にも焦点を当て語末音とともに調査対象とした。そして語頭音に後続する或いは語末音に前接する音との組み合わせも調査した。こうした試みは以前見られない。

ただ、当該箇所にて既に触れたように延べ語数と異なり語数の扱いについては筆者には賛同できない部分がある。

ともあれ田籠博（2005a）は多くの新しいアプローチの方向を示した。本稿の本論部分の考察に大いに参考となったことは間違いない。

---

[37]単純語と称するのは厳密でないが、現在一般的に一つの語として認識され、既に安定化した複合語の一部も含まれる語彙にあたる。

[38]例えば、「まもる」「おさむ」のような動詞タイプの名前なら、動詞の語尾の音的特徴を持つこととなる。

1．8　「人名の語構成」（田籠博、2005b）

この論文は 1.7 で紹介した田籠（2005a）の継続研究である。前掲論文における語頭音と語末音だけの調査では解明できない問題の存在を知り、その反省そして追考の意味を込めて田籠本人が新しい考察を行った。田籠（2005a）と区別するため、以降田籠（2005b）と称す。

1．8．1　調査対象と方法

使用された人名データベースは田籠（2005a）と同じもので田籠（2005b）では、

> 人名を二つの単位からなる構成体として説明しようとする。一つは人名の前部に位置する二拍（またはいち拍）の単位でこれを「名素」と呼ぶ。もう一つは人名から名素を除いた後部で、長さ一～四拍と様々だがこれを「名辞」と呼び人名は「名素+名辞」という語構造をもつと仮説を立てたのである。

というように、独自の定義と新しい仮説を設けた。そして、

> 人名研究はつねに表記の問題と関わり、その束縛の下で行われてきた。

と指摘した上、

> 小論は、表記とは無関係に、音的特徴の面からどのような知見が得られるかという試論である。

と断った。

1．8．2　考察結果と重要結論の紹介と評価

田籠（2005a）は既に人名を語彙と見なして調査を進めていたが、この論文ではさらなる多くの言語学的知識を取り入れ、特に形態論の考え方を借用し「名素」「名辞」の概念を作った。今までの同系列の研究では未曾有の発想だと言っても過言ではない。この発想の下で行われたこの研究は当然今までなかった新しい情報を提供してくれた。

1．8．2．1　人名の単位としての拍結合

四拍の男性名についての考察である。四拍の男性名 421 例は全部「2 拍+2 拍」の構造を持ち構成要素を数えて 87 種類あった。その区分は

（1）前部要素にのみ現れるもの　33

（2）後部要素にのみ現れるもの　11

（3）前部にも後部にも現れるもの　43

となる。そして、（1）から複数例あるものと（2）全用例を示す。

（1）　イッ　キミ　キヨ　キョウ　ケイ　ケン　シュウ　ショウ　ソウオ　タイ　タク　タダ　テツ　ミネ　リュ　リョウ

（2）　オキ　オミ　キチ　サク　ジン　スケ　ゾウ　ネン　ヒコ　ヘイ　ペイ　ロウ

（1）の内訳を見ると、音読みが多い。（2）の場合「ゾウ・ロウ、スケ・ヒコ」のような伝統的な男性名後部要素が目立つという。（3）の内 10 例以上（前部か後部の何れ）の要素は 36 種類[39]の内イチ（1-16）、コウ（10-2）[40]を除けば訓読みである。なお

> ここで重要なのは、人名にあっては個別の拍の自由な配列ではなく、こうした有限の拍結合が単位となって構成されている

と特筆した。だが、田籠博（2005b）は 1.8.1 で断ったように、表記と切り離

[39]列挙を省略する

[40]著者がコウだけを音読みとし、イチを訓読みとしたようだが、男子名の場合、「市」より「一」の可能性が高いのではないかと思われる

しての音的特徴に焦点を絞った考察であるからこそ上記のようなことを結論扱いしたのであろうか。表記の漢字から考えれば、むしろ当たり前のことを述べている感が否めない[41]。

この節で著者は言及しなかったが、上記（1）（2）の用例を見ると異なり語数では音読み要素が圧倒的に多い感じがした。しかしこれで前部或いは後部に限定される要素は音読み要素が多いと言えるのであろうか。更に人名に使われる構成要素は音読みと訓読みのどちらが多いのか。このような極めて素朴な疑問を抱いているのは筆者だけだと思わない。この質問の解明は本論にて努めるが、やはり異なり語数ではなく延べ語数を利用すべきであろう。

1．8．2．2　「名素」と「名辞」

著者が「ケイ」と「ケン」で始まる人名を例にし全体的で 3 拍の場合の「ゴ」、4 拍の「イチ」、5 拍の「タロウ」、6 拍の「イチロウ」のような後続の拍結合を紹介し、

> 拍結合＜ケイ・ケン＞はそれ自身二拍の男性名ともなるが、多くは何らかの後部要素を伴って人名を構成する。これを「名素」と名付ける。

と「名素」を定義した。そして、

> 名素に添えられて人名の後部要素となる拍結合（一拍を含む）を人名化接辞の意で「名辞」と名付ける

と「名辞」を定義した。

1．8．2．3　「名辞」認定上の問題

著者はこの問題を 3 拍の人を例に取り論じた。3 拍の男女名について「2 拍

---

[41]表記即ち漢字と読みの対応関係は近現代の男性名と大半の女性名に限って、まだ「平成人名」ほど飛躍すぎたものが少なかった。田籠博（2005ab）の人名データは昭和時代末期の人名で、人名の「平成化」の兆候はでたものの、まだ現在ほどの勢いを得ていなかったと考えている。

＋1 拍」と「1 拍＋2 拍」の構成と仮定、これで 1 拍と 2 拍の男女それぞれの名辞を得られた。まず 1 拍の名辞には男女による差異が大きく、男性は「オ、ゴ、シ、ジ、タ、ト、ム、ヤ、ル」、女性は「エ、カ、コ、ナ、ノ、ミ、ヨ、リ」と指摘し続いて紙面上の問題で全ての問題を詳述できないとした上で、以下の三つの問題のみを検討の対象とした。

シ 性の名辞「シ」の認定

「シ」は 3 拍の人名の場合、男性特有の「名辞」で、女性名には無いが必ずしも形容詞終止形の「シ」に限らない。

②動詞由来の人名の扱い

「ウ」段の音で終り、動詞の終止形と認められる。男性の用例数が女性より多いものの、男性特有の名辞とは言い切れない。

③二拍の名辞を認定する理由

男性名「タイチ、シロウ、チヒロ」女性名「ミサト、ミスズ、サユリ」など語末の 1 拍を切り離すのできない用例が多く存在する。

1．8．2．4　「名素」認定上の問題

著者は「名素は人名の前部要素としてその主体となる拍結合だが、これは固定的な拍結合を成す自立的名素と非固定的な非自立的名素とに分かれる」とし、まず二種類を指摘した。

自立的名素の典型は 1.8.2.1 の（3）であるという。例えば名素「ヒロ」は名辞「キ、シ、ジ、ト、ミ、ム、ヤ」と結び付き男性名を、名辞「エ、コ、ノ、ミ」と結び付き女性名を構成できる。自立的名素は男女を通じて人名の中心的要素である。

非自立的名素、1.8.2.3 で述べた「動詞終止形と同形の人名に認められる〔ママ〕」。例えば「ル」で終る人名で「サト」「シゲ」のような自立的で他の名辞とも結び付くことができるものに対して、「イタ」「カオ」「トオ」「ノボ」など「ル」以外の名辞と結ぶ付く用例がない拍結合を指す。また、「イッペイ」「サブロ

ウ」の「イッ、サブ」など「ペイ、ロウ」に限って結び付くような名素もこの類に入る。名詞に由来する「アカネ、ツカサ、ツバサ、ナギサ、カナメ」も同類だという。

なお、名素は原則として 2 拍だが、1 拍の名素も少数見られる。1.8.2.3 で取り上げた 2 拍名辞の 1 拍目がこれに当たる。5 拍の「ウイチロウ」の「ウ」のような部分もこれに当たる。

また名辞と同じように名素の性差も際立つ。例えば、男性に多い音読みの名素は女性に少ない。

1．8．2．5　「名素」と「名辞」の関係

両者の関係に関して、著者は人名の語構成に積極的な機能をはたすのは名辞である。…名辞は単なる拍結合を人名らしく整え、多くは男女差をも表示するとした。しかし同時に著者は人名を「名素+名辞」の語構成とみなすには大きな異例が存在することも指摘した。それは 4 拍の男性名の場合、同一の拍結合が前部要素にも後部要素にもなりうる事実である。従って著者はこれを「名素から名辞への転生」として説明しようと試みた。転生の条件を突き止めるに至らなかったが「少なくとも拗長音や促音・撥音などを含む名素は名辞へ変化することが稀である」。なお、の転生の考え方に基づき「イチロウ、サブロウ、シロウ、ジロウ」など名辞だと判定されながら単独で人名を構成することも解釈できるようになる。女性名の関しても著者は 2 拍の後部要素を名素と認めないとの考えを示した。

1．8．2．6　二拍の人名の特異性

2 拍の人名が女性 20%強と比べ、男性 4%未満の割合では全体に占める比率に大差がある。また音的特徴においても大きな性差が見られる。男性の音読みが主流なのに対し、女性については「単なる音韻の組み合わせ」か「外国語の語形に似せた音韻の組み合わせ」だと述べた林大（1957「語彙論」『講座現代国語学Ⅱ』）を否定し、著者は「むしろ『名素+名辞（という語構造の原則が二拍という短い長さの中で働いた結果だと解釈する」との考えを示したい。

その理由の一つとして 2 拍と 3 拍の語末音の分布が強い類似性を持つことが

挙げられる。具体例は省くが 3 拍女性名の語末音の上位十一位の内、八種類が 2 拍の上位十位に確認できる。これはこういった語末拍が名辞として同じ機能を果たしていることを示唆しており、語頭音についても女性名全体の分布と類似する[42]。

問題となるのはむしろ男性名の方である。2 拍の男性名に音読みが多く著者の仮説「名素+名辞」は適用できず、保留せざるを得ない状態にある。

1．8．3　まとめ

田籠（2005b）は新しい仮説を立て「名素+名辞」というモデルを持ち、人名の音的特徴の解明を試みた。これは従来無かった発想で、同じく人名データベースを利用して言語学的視点による新研究にとってもアプローチ方法の面では啓発的で参考になる箇所は多かった。しかしながら著者自身が述べたように考察はまだ行き届かなかった面もあり、このモデルでは説明の付かない問題も残っている。これからは本論部分で田籠（2005b）を参考とし、より完成度の高い人名モデルを目指さねばならない。

[42]ここよりの内容は賛同できない上、反論する予定もないので、省略した。

1．9　ここまでの言語学視点の先行研究のまとめ

以上 1.1～1.8 にて実例人名データベースを使用し、且つ言語学的視点から人名にアプローチする手法を取り本研究の本論と直接な継承間関にある諸先行研究を紹介した。

これらの先行研究の多くは女性名だけ扱うものであった。しかしなぜ男性名ではなく女性名を選んだのか、或いは、なぜ両方とも扱わなかったのか、原著者たちはその理由については殆ど説明がない。

そこで筆者は以下のように考えている。データベースを作成するために必要とされる実例人名データの入手難易度問題もありながら、一番の理由はやはり女性名が男性名より「単純」「シンプル」という感覚があったのではなかろうか。つまり人名の語学的考察をするなら、比較的に単純な方の女性名を切り口にすべきだと先学たちが考えていたのではなかろうか。表記の面では漢字字数の差は少ないが「音長」即ちモーラ数の違いなら、殆どの人が直感で分かるほど差異が明白である。勿論、実際の所それを裏付ける研究報告もあった。確かに、女性名の語学的構造は男性名より単純でシンプルだというのが事実である。しかし女性名の考察結果が男性名の考察の踏み台か手がかりになれるかというということになると、筆者は一旦意見を控えたい。

この第一章で紹介した先行研究の殆どは旧来の民俗学・歴史学を中心とした文化的視点の研究と一線を画すべく、敢えてかの分野の情報を意識的に排除し、語学的な知識や手法だけを使用するよう努めた先学たちの姿勢が見られる。かくして語学的な見解によれば、女性名と男性名は同じ語彙分類でしかも同じ表記に同じ音韻を使い、同じように扱われない理由がどこにもないように見えたのは当然であるが、こと文化的な視点で見ると両者はそもそも別物だと言い切れるほど系統が異なり、必然的にその異質さが語学的な特徴にも反映すると考えられる。従って本研究の直接の先行研究は別として、旧来の文化的視点の重要情報をもこの章の次の部分で整理しておきたい。

1．10　学際研究としての人名研究

人名は様々な研究分野で研究対象とされている。人文科学の各分野がまだ今日のように細分化されていない古代から「人名学」という「学問」の分枝が存在していた。江戸末期には栗田寛が人名の意味に着眼してそれを十六項目に分類した[43]。その後渡辺三男（1976）が栗田の分類方法を踏まえ、同じく人名の意味を元に二十分類をまとめあげた。これらの研究は広義では語学的な研究だと認められよう。無論本研究並びに先述の形態論レベルの言語学的視点の先行研究とはアプローチ方法が根本的に異なる。

宗教は日本では人名とあまり無縁な存在だと思わるのであろうが、キリスト教[44]の影響が強い国では新生児の名づけは聖書に出た聖人の名前から選ばなければならないと制限されていた。ロシアがその代表である。フランスは「自由」の代名詞とも言われるがナポレオン法典では新生児の名付けに関して宗教の影響で厳しく制限を設けていた[45]。

民俗学の分野はもっとも人名研究の本場と称すべく、その先駆者の柳田国男や金田一京助も人名に関する研究著作を残している。専ら人名研究に従事したのは佐久間英である。研究テーマを更に名字に絞れば丹羽基二がその研究者の代表格であり集大成者でもある。このほか、奥富敬之、森岡浩、坂田聡らも専門書を世に送り出し続けている。

歴史学の分野では人名、特に名字（氏（うじ）、姓（かばね））[46]に関する歴史を扱う研究は民俗学と同様多くの成果を挙げてきた。渡辺三男が人名の研究に大いに注力した歴史学者の一人でこの他、特に人名を研究テーマとしていないが、古代の氏族（うじぞく）や地方豪族、中央王権のあり方並びに古代人物間の系譜整理などを扱う歴史学研究も古代人の名前の様態の解明に資している。

また、文化人類学に出口顕の『名前のアルケオロジー』（1995）があり、ほぼ全ての人文科学の研究分野で人名を扱うことが可能であるが、人名は人文科学の研究対象に限らない。

---

[43]渡辺（1976）による。
[44]特にギリシア正教圏において顕著である。
[45]フランスでは現在名付けの制限が緩めつつあるが、撤廃には至っていないようだ。
[46]そもそも、人名という概念は古代と現在は全く違うものであった。これに関して本章で後述する。

人文科学以外の分野でも、人名もしくはそれに関連する内容が研究の対象になった例が散見される。例えば朝鮮併合後行われた所謂「創氏改名」の政策は明らかに行政的な目的を有した人名政策である。この政策を研究対象とすれば、間接的に人名に関する研究になる。また日本本土で終戦後に行われた言語政策の一環としての「当用漢字」の施行も結果的に後の戸籍及び新生児の名付けに大きな影響をもたらした。これもまた、行政学の研究対象になりうるのであろう。

法学の分野でも夫婦別姓問題は法律家の間に長い間議論が続いている。法学分野で人名に絡む法令を法律的視点で研究しもっとも重要な成果を上げたのは井戸田博史（1986）で井戸田が注目していた明治初頭の人名に関する三つの法令は明治 3 年の「平民苗氏ヲ許ス」、明治 5 年の「通称名乗両様用来候輩自今一名タラシム」、明治 8 年の「平民自今必苗字ヲ唱ヘシム」の三項で、これらの法令こそ今日の日本人の名前の形の礎を築いたと言って過言ではない。

右に述べたように、人名は様々な研究分野で研究対象とされているが、最も研究されてきた言語学分野では研究史そのものが長いものの、意味的な面に集中し、現代言語学的な視点、即ち形態論・音韻論レベルでアプローチする研究はまだ少ない。本章で紹介されてきた先行研究はその空白を補おうとしたものであり確実に進展があった。しかしながら旧来の研究視点と分離して研究を進めようとした結果、旧来の研究成果の活用が少なくなった。本研究では形態論・音韻論などの言語学的な視点に立脚するとともに、旧来の他の分野の研究成果も積極的に援用する。以下、本研究に資すると思われる他視点の既存重要情報を整理したい。

1．10．1　「姓」「氏」「名字」「苗字」

研究の場や特殊な専門分野を取り扱う職務では、その研究・職務の分野に応じて、様々な専門用語がある。日常生活でまったく区別する必要のない言葉であっても研究分野や研究者にとって、厳密に使い分けなければならないことが多く、日本の人名研究も然りである。特に名字の場合、現在、幾つかの言葉が同時に存在している。姓、氏、姓氏、名字、苗字（ミョウジ）など、これらの言い方は現代日本語において殆ど意味上の区別がなくなっているものの、昔の

ある時点にはそれぞれ違う意味を持っていた。これらの語の意味の変遷・合併を調査するのは筆者の研究目的ではないが、「日本の人名」の重要構成要素である「ミョウジ」を理解、分類するにはその由来や成り立つ経緯を知る必要がある。その作業の際、これらの語の使い分けが必要とする。

現在の日本人が馴染んだミョウジという語の意味は、恐らく明治時代の初め頃から定着しつつあったと思われる。上記の各種の言い方もこの時点から同義化していたのであろう。社会的一般認識として武士を除いた大多数の日本人はこの時にミョウジを獲得したと思われているのがこの問題に対して、筆者は素直に即答できない。答える前、まずこの「ミョウジ」はどの字で書くかを確認しなければ是非も申せない。その理由は、答えが表記によって、違ってくるからのである。ご存知の通り、「ミョウジ」には「名字」と「苗字」二通りの書き方がある。辞書を引くとそれを編纂した言語学者たちは、「名字」がもとの表記とし、「苗字」を許容表記としたように見える。日常生活では、「苗字」のほうが多用されるような気がする。それでは一般人の慣習と学者たちの見解違いはどちらが正しいのか。そして明治初期に庶民が得たのは果たしてミョウジなのか、もしそうであれば、どちらのミョウジだったのか。これらの疑問を抱えて、これからの考察に入っていただきたい。その答えはこれからの考察で明らかになるのではないだろうか。

また、本来の考察目的とは直接の関係がないが、なかなか興味深いことであるため、提起して起きたい点がある。日本人なら誰でもわかるように、天皇系は日本の唯一ミョウジのない家系である。天皇は元々神格されて人間ではないと思われ普通の人間と違い超越的な存在であるから、と解釈する人がいると思うが、結局本当にそうであろうか。以下の考察で明らかにされよう。

1．10．1．1　「姓（かばね/せい）」「氏（うぢ/し）」について

「姓（かばね）」と「氏（うじ）」という訓読みの意味を考察するには、その訓の形成を考察しなければならない。従って漢字の伝来を伴い、「カバネ」「ウジ」の訓読みと「姓」「氏」の漢字の対応状況を明らかにする必要がある。つまり、漢字「姓」と「氏」の中国におけるもともとの意味を知る必要がある。そのため、「『姓』『氏』の中国における解釈」を作成した。資料の不完全さもあいまって全体の調査結果は

不十分で推測の分も多かったが日本の訓読み形成と関係する部分は明白であった。漢字が大陸から列島に伝わった時期より早い段階で、漢字の「姓」と「氏」の意味変化は既に終わっており、区別即ち意味上の使い分けは既になくなっている。つまり、今日と同じ意味として使われていた。従って「カバネ」「ウジ」という和語の語彙を漢字に当てはまる時、漢字の元の意味を無視し、和語、特に当時の日本の社会事情に合わせたと考えられる。

それで、「姓(かばね)」の国語辞典における解釈を見てみよう。

１上代、氏(うじ)を尊んだ称。氏そのもの、または朝臣(あそみ)・宿禰(すくね)など、氏の下に付けてよぶものをいう。また両者をあわせたものをも「かばね」とよぶ。狭義には、朝臣・宿禰などのことをさす。古代の「かばね」には、臣(おみ)・連(むらじ)・造(みやつこ)・君(きみ)・直(あたえ)など数十種あり、氏の出自によるものと、氏の職業に与えられたものとがある。

２天武天皇 13 年（684）の八色(やくさ)の制で定められたもの。真人(まひと)・朝臣・宿禰・忌寸(いみき)・道師(みちのし)・臣(おみ)・連(むらじ)・稲置(いなぎ)の「かばね」を諸臣に与えて、氏族の身分秩序を確立しようとしたもの。（大辞泉より）

「姓」については民俗学の範疇内で更に考察することができるが、本稿ではそこまでは言及しない。「姓」が何かと簡単に言えば爵位のような存在だろう。具体的な官職ではないが、ある政治的地位を示す称号である。

また、「氏(うじ)」を見てみよう。

1.[名]

１その家に代々引き継がれる、家の名。家系の名称。姓。

２家柄。家系。

３古代社会における同族集団。氏の上(かみ)と氏人を主な構成要員とし、部民(べのたみ)や奴婢(ぬひ)を隷属させる場合が多い。氏の名は朝廷での職掌や居住地の名により多くは地位に応じて姓(かばね)を有した。

2.〔接尾〕名字に付けて敬意を表す。現在は一般に「し（氏)」を用いる。

「吉田—」（大辞泉より）

本稿の内容と関連するのはの[1]の 3 番である。「氏」は主にある職掌を担う血縁集団のことを指すがその擬似形態として、その職掌内容により無血縁関係の人が結成した集団もいう。同じ氏内部でも家ごとに朝廷から授けられた姓により地位の高低が存在する。つまるところ、「姓」も「氏」も現在のミョウジと最も違うのは人間一人一人として区別する標識より、その所属する集団のしるしである場合が多い。今、昔の人名に「の」を入れて読むのはその名の前の部分がその人自身のものではなく、その人がその前の集団しるしのものだと考えられているだろう。ゆえに人の名の前の称呼は色々と変ってきたが、現在の「ミョウジ」という概念にぴったり合致するものはなかったとも言えるかもしれない。

1．10．1．2　「名字」「苗字」

「姓」「氏」の読み方は「カバネ」「ウジ」の区別の消滅に伴い混同が始まってから現在と同じ意味を持ち始めたと考えられる。或いはその当時の中国風の使い方なのかもしれないがともあれ現段階でははっきりしない。律令制[47]の確立がそれまで既存する「カバネ」「ウジ」に基づいた「八色姓」[48]の組織構造の崩壊後、出現したのは「名字」であった。勿論現在のミョウジのような人と人を区別する役目を果たす第一標識の座を譲り渡したとは言え、そのもの自体は完全に消滅したわけではない。殆どは敬称として後ほどのミョウジと本名の間に介するものとなって明治まで生き延びた。

従って「カバネ」と「ウジ」の次に登場した「名字」はどういうものだろうか。「名字」は「名」の字を使うのに、なぜ「名」ではなく「姓」のことを指すのか、という問題を読者諸氏は考えたことがあるだろうか。外国人である筆者はこの疑問に随分戸惑ってきた。実はこの「名字」の「名」は所有する土地—「名田」からきたものであり人名を差す「名」とは違う由来であった。朝廷の

[47]大宝律令、養老律令など。

[48]天武天皇13年（684）に制定された姓制度。従来の姓制度を改めて新たに真人（まひと）・朝臣（あそみ）・宿禰（すくね）・忌寸（いみき）・道師（みちのし）・臣（おみ）・連（むらじ）・稲置（いなき）の八姓を定めた。天皇を中心とした新体制確立のための政策。（大辞泉による）。

任命を得て所領（名田）を支配しその支配権を主張する意図はその所領の名（名の名）を名乗ることは至極最もな要因だと言える。元々この名字は一代で終わるものであったが、もし子孫がその所領を相続するようになれば（多い）、何代も同じ名字を使い続けることになり次第に定着してしまい、例え所領や住所が変わっていても、称し続けるようになる。無論その多くは地方の領主いわば中、下級武士であり、朝廷に仕える公家など貴族や官人はやはりこのような名字を持たなかったはずでその呼び方は従来どおり、氏や職名と本名で呼んでいたと考える。それでも区別がつかない場合、住む屋敷の所在で名乗ることもあった。

「苗字」の話になるとこの言葉自体は江戸時代になってからよく使われるようになったと言われる。上述のように名字の定着につれ、その所領を表す意味が薄れ、それで家名としてその一族の苗裔を表す意で「苗字」の表記に乗り換えた、というのが一般的な見解である。そうして近世になって、まず国土の開発はほぼ完成してしまい、中世のような開墾で新しい土地を作ることはできなくなった。しかも現在の所領は幕府により定められたものであり、更に自己主張する必要もなくなったのである。それに、長男相続制の確立でその所領の実質上の分割はほぼなくなり分家するのを伴った新しい名字の発生も無くなったはずで、要するに所領の分布状態は非常に安定し、もう強調する価値は無くなったのである。比べて、血筋を一貫した家柄が重視されるようになりその原動力で「名字」を「苗字」に書き換えたと考えられないか。これは筆者の私見であり、参考資料では言及されていない。

1．10．1．3　ここまでのまとめ

「姓」「氏」「名字」「苗字」は本稿の冒頭に述べたように、現在ほぼ同義に使われている。因みにこの中にどれが一番標準的な用語だというと、恐らく「氏」であるがその理由は民法に使われる語だからである。刑事ドラマの中で、警察が容疑者尋問のシーンを思い出してみれば、必ず「氏名は？」という台詞が出てくる筈である。

ここまで見てきたように、歴史上、「姓」「氏」及び「名字」「苗字」は現今のミョウジの位置を取っていたが、ミョウジの性格や効用とは違いが存在した。これらの概念を踏まえて現在のミョウジが生み出されたと言えよう。しかし、

実際はこれらの言い方は中世、明治初期までしばしば使われていた。当時、社会的に高位高官の地位ある人のフルネームはとんでもなく長いものになってしまう。少し愉快な例を見てみよう。「徳川次郎三郎源朝臣家康」、上の言い方で解釈すれば、苗字＋通称＋氏＋姓＋本名となる。もう一つを見ると、「酒井雅楽頭源朝臣忠知」、上のように数えていくと、苗字＋職名＋氏＋姓＋本名である。これを見てやはり現代人でよかった、便利だなと思うか否かは読者の随意であるが昔の人は本当に出自や家柄を重んじたのである。

しかし、明治初期以降、民法の実施を伴い単姓が決まり、日本人の姓名生活は現在とほぼ同じようになっていた。当然ながら地名に由来する「名字」とその変形の「苗字」は現代日本人のミョウジの主体を占めている。とはいえ、これらの嘗ての「ミョウジ」は何らかの形で現代日本人のミョウジに生き延びている。

例えば、女優の藤原紀香の場合、彼女のミョウジの藤原は「氏（うじ）」であり[49]、歴史上の名族、源平藤橘の一つである。

また、元フィギュアスケート選手の村主章枝（すぐりふみえ）。彼女のミョウジは「姓（かばね）」の一種であり、古さを誇れるミョウジである。「ムラヌシ」と呼ばれると、さすがに不愉快の極みだろう。

このほか、所領（大きい地名）、住所（小さい地名）に由来するものは言うまでもなく、他に先祖の建てた寺（西園寺）や住むところのシンボル建築（二階堂）など由来する苗字もある。これらのミョウジもまた、日本人のミョウジの発生ルートの多彩さを描いている。

これら「カバネ」や「ウジ」に由来するミョウジはその読み方が古く難しいものが多く、後の「明治皆姓」の際恣意性に満ち溢れる創作ミョウジの一部とともに、現在の姓氏研究の難点を成している。よって現代日本人の姓名を概観的に考察するには先立ちこれらの問題点をはっきりしておくべきだと筆者は考えている。

1．10．1．4　質問の答え

[49]彼女の家系は歴史上の藤原一族につながるかどうかは別である。

以上ミョウジを表す各語の意味変遷を見てきた。考察で明らかになったそのそれぞれの性格を念頭において、本稿の冒頭にあった質問をもう一度見てみよう。

名字と苗字はどちらが正しいか。名字帯刀か苗字帯刀か―禁じられたのは名字である。みょうじ帯刀に筆者は長らく誤解を抱き続けていた。つまり、武士がみょうじを名乗り、大小二本の刀を帯びることは武家諸法度で許可されていたので、庶民にみょうじを有することも武器としての刀の携帯も許されなかったと思っていた。苗字と帯刀は武士、所謂支配層の特権として、百姓にはなかったと解釈し、つまり、当時では武士しかミョウジを持たず、そうしてミョウジを持つ人だけ刀の携帯が許された、と考えていたが実は今回の調べで分かるように事実はそうではなかった。百姓は苗字を持たなかったではなく、それを公称することを禁止されただけである。刀の所有もある範囲内で許された。つまり、武士の身分でない人に対して勝手に武士の礼儀作法のまねをすることを禁止した訳である。確かに、名字を持たなかった人も大勢いると考えられるがこの人たちこそ、明治の苗字必称令の真の適用対象であろう。

みょうじ帯刀は江戸時代の領主や武士の身分の象徴であった。表記に関しては、苗字の表記は江戸時代に流行ってきた表記だから、「みょうじ帯刀」もその通りだったかもしれない。しかし手元の辞書を引いたら、皆「名字帯刀」と表記している。一方、苗字に関する専門書には「苗字」の表記を用いている。第一次資料は入手できないことで、どちらが正しいか、一時保留せざるを得ないが、いずれにせよ江戸時代において、書き方が違っても表す意味は「名字」にあると思われる。なぜなら名字帯刀という法令は庶民と武士に差をつけるために設けられたものであり、別に庶民に家柄を伝わらせないためにあったわけではないからである。

明治皆姓―多くの庶民たちが得たのは苗字である。

現代日本人のミョウジの話をする際、まず取り上げられるのは 10 万台をのぼると言われるその膨大な数であろう。日本人のミョウジがこんなに多種多様なのは確かに、江戸時代のみょうじ帯刀と明治の苗字必称令と関係が深いはずである。江戸時代では庶民の人々はみょうじを公称することは制限されたが、

明治 8 年（1875 年）2 月 13 日に、「平民苗字必称義務令」という太政官布告が出され、苗字を持たなくてはならなくなった。勿論、当時もともと名字をもっている人たちは本姓のまま届出したはずである。その中苗字を本当に持たなかった庶民たちは慌てて憧れの家柄を選んで届出した者もいただろうし、村の長老や寺の僧侶に頼んで適当に作ってもらったものもいただろう。

一方、日本人のミョウジの中には自然物の名を使うものが多く、特に農林業・植物に関るもの、例えば「田」「原」「木」「竹」「山」「川」の類が多く見受けられる。その原因といえば、名字の由来は前述の通り、もともと地名から来たものが多い。それに明治の、所謂新姓の持ち主を考えるにこれらの新たに苗字を作った人の殆どは身分の低い第一次産業生産者である。彼らが一番親近感を持つものというと、毎日接してきた身の回りの物事に違いない。つまり上述のように自然環境の物が多い。もちろん、彼らが得たミョウジは単なる家柄を表すもので、正真正銘の苗字である。

1．10．1．5　天皇家にミョウジを持つ場合

氏（うぢ）、姓（かばね）、名字、苗字のそれぞれの性格から見て、もし天皇家がミョウジを使うならどんなものが相応しいかを考えた。氏（うぢ）の場合は、同じ血筋の一族を表す語であり大和朝廷の性格を考えれば、その称号とその中心にある一族の名前を同一視できると思われる。つまり天皇系の一族の氏名は「やまと」だと考えるのが自然であろう。姓（かばね）の場合は何かの職掌が本来の意義であるため、天皇系の職掌というと正に「天皇」にほかならない。名字の場合所有土地の名由来なので、天皇系は一応形式上日本という国を所有するはずなので、名字なら「日本」であろう。苗字の場合は苗裔のつながりを表す語で、基本的に上記の称号を持たない庶民の勝手に作ったものなので天皇系とは無縁であろう。以上は全て筆者の私見である。

1．10．2　近現代日本人名の構成について

今日、我々の馴染みの日本の人名を探るべく今現在の MSN ホームページを探ったら、このような日本の人名が出てきた。馬場園梓、小野真弓、久石譲（本名：藤澤守）、土屋アンナ、小沢一郎。これらの日本人名は、いかにも普通で、

少し違和感を覚えるのは「アンナ」くらいであろう。土屋アンナがハーフであることが分かれば、その名前に関して誰でもすぐ納得できる。このような一見して極普通の人名スタイルは百年余前しか遡れないことを聞いたら、人々はどう思うだろうか。実は、明治初期までの日本人は、今と全く違った人名生活を送っていたのである。勿論、明治以前の時代といっても人名スタイルという視点から見て、幾つかのいわゆる転換期が見られよう。

1．10．2．1．　江戸時代の人名について

日本の歴史上、権力者が民衆の名前に関して命令・規定を発することは極めて少なかった。古くは天武天皇が 684 年に「八色姓（やくさのかばね）」という詔を出したことがあるが、日本のミョウジに関する考察の報告に書いたようにその時代では、「姓（かばね）」というものは今我々が日常的にいう姓名の「姓（せい）」ではなく、中央政権における職掌にあたるもので、文部科学大臣や防衛大臣や官房長官など、謂わば、家柄・官位のようなので厳密にいうと、人名に関する規定には入らない。現在、最も知られている人名に関わる規定は江戸時代に打ち出された「苗字帯刀（或いは名字帯刀）」という告示で、これはしばしば江戸時代では武士以外の農民や町人には名字を持っていなかったという説の根拠とされ広く世間の一般人に信じられているようだ。文部省の検定を受けた日本史教科書でもそのように記述しており専門家を含め、長く日本人全体の「常識」とされてきた。しかし近年、学界では新しい説が主流となりつつある。

奥富（2007）によると、最初、この常識に挑んだのは早稲田大学教授の洞（ほら）富雄氏である。1952 年、日本歴史学会の機関紙である「日本歴史」第 50 号に「江戸時代の庶民は果たして苗字を持たなかったか」を題に反対論を展開した。奥富の話ではその論文が数多くの実例に緻密な検証で、学界から全く反論されなかったという。その後、賛同論や補足の論文が沢山世に出て、むしろ、現在の学界において主流となっている。洞の論文はまだ入手していないため検証できないが、その賛同論に当たる論文や専門書は幾つか目にしたことがある。それらの論文では現在となって次から次へと発見される寺や神社の過去帳、寄進帳、そして、私文書などに当時の村人たちが堂々と「名字」を名乗っていた文献資料が多く取り上げられている。もちろんその中に名字を持っていなかったもの

もいた。それはもともと持っていなかったか、何らかの原因で捨てたのか、それを一一検証することは不可能に近いと思われるが少なくともこれだけの物証があれば、江戸時代に農民や町人たちがみんな名字を持っていなかったという在来の認識の反論に十分なりうると認識してまず間違いないであろう。

この話をさらに深く広く展開していくと、恐らく本論だけでは終わらない気がするので結論を簡単に述べる。洞の論文を嚆矢とし、その後発の研究はその基本論点を踏まえてその成立ちの原因の解明に試みるものが多かった。本稿ではその諸説を詳述することを省くこととするが原因はどうあれ、すべての結論は一つの事実－江戸時代すべての農民や町人が名字を持っていなかったのではなく、持っていてもそれを公称することを許されなかっただけである－という結論に達した。

最後に気になる点が一つあった。苗字帯刀（あるいは名字帯刀）という四字熟語はかなり有名なわりにその詳細はあまりにも不明なままである。それはどの官庁部門がどのようなお触れに、どのような文言で、誰に向かって、発したものなのかでさえ、筆者はまだ掴んでいない。1801 年に布告されたという情報があるが、それ以外は今の段階ではまだ未解明である。仮に、この年代が正しければ、かなり江戸末期に近かったこととなり、普通に考えれば洞の説に有利となるがこの点に関しては、まだ調査研究が必要とされている。

1．10．2．2．　明治時代の人名について

近現代の日本の人名を論ずるには、日本の近現代の始まりの明治維新に目を向けねばならない。実は明治時代の最初の十年間に決められた人名に関する法律規定こそが今日、我々の馴染みの日本の人名スタイルを作り上げたと言っても過言ではない。現在日本の人名を言えば、「姓名」か「氏名」のことを指し、ミョウジと名前（下の名前）からなると思うはずであるが、江戸時代の武士階級及びそれ以上の社会地位の男性のフルネームを見てみると、驚嘆を禁じ得ない。江戸幕府を開いた初代征夷大将軍徳川家康こと、そのフルネームを綴ると「徳川次郎三郎源朝臣家康」、その構成は「苗字＋通称＋氏＋姓＋本名」となる。もう一つ幕末の人名をみよう。「酒井雅楽頭源朝臣忠知」、上のよう分けてみると、「苗字＋職名＋氏＋姓＋本名」となる。このような江戸時代の人名を現

行スタイルに変貌させたのは次の三つの太政官布告である。

その一、明治三年（1870）九月一九日の「自今平民苗氏被差許候事」は平民にも自由に苗字を公称できるようになったことを意味する。

その二、明治五年（1872）五月七日の「従来通称名乗両様相用来候輩自今一名タルヘキ事」では、今までの通称と実名の二重人名生活を止め、今より一通り、一人一名にすべきということを意味する。

その三、明治八年（1875 年）二月一三日の「自今必苗字相唱可申」では、今より、必ず苗字を唱えるべきということを意味する。

この三つの太政官布告によって、明治以前の人名システムは一切廃止され、現在と同じ人名システムとなったわけで上に挙げたフルネームの構成を二部に簡略化するよう規定がなされたのである。即ち今までの構成要素であった「苗字」「姓」「氏」から一つを選び、「ミョウジ」とし、「通称」「本名」から一つを選び、「名前」とするのである。勿論、ここにいう同じシステムというのは前述の「ミョウジ＋名前」という現在の人名スタイルで、人名の細部までそっくりとなったわけではない。

この他、明治五年（1872）の後ほど出された「改名禁止令」ではそれまでの自由に改名する風習を徹底的に否定した。これらの法令を中心に他の関係法令と連動した結果、現在の日本の人名スタイルの基礎が築かれたのである。以後終戦直後 1946 年に「当用漢字表」が発表されるまで、大きな変動はなかった。一つ断っておきたいのは、これらの布告が出された背景には様々な要因が絡みあっておえり、「四民平等」だけで単純に捉える訳には行かないのだがここでは議論をこれ以上展開しないこととする。

これらの布告がその時代に生きていた人々の人名生活にどんな変化をもたらしたのかを説明するため、少し例として維新の元勲たちを取り上げよう。（渡辺、1976）

西郷吉之助隆盛　→　西郷＿隆盛

木戸準一郎孝允　→　木戸＿孝允

大久保市蔵（一蔵）利通　→　大久保＿利通

板垣退助正形　→　板垣退助＿

後藤象次郎（象二郎）元曄　→　後藤象次郎＿

大隈八太郎重信　→　大隈＿重信

第二章　研究資料の選定と研究用語の定義について

第一章で触れたように、人名を研究しようとする個人の研究者が理想の人名資料を入手することは現実的に容易ではない。人名情報を大量に保有しているのは学校のほか、まず思い浮かべる当たるのは NTT 電話帳の個人名分冊である。ハローページなら比較的に入手しやすいが読み方が付いていないため、研究目的にして不向きである。NTT 電話帳のデータ数より多くの人名情報を有するのが戸籍データである。役所なら全日本国民の人名情報は所持・管理しているが、個人の要請に対して提供してくれるとは考えられない。また、個人研究にしては明らかに手に余る情報量である。後は保険会社などであるがこれも特に一般企業の場合、業務上守秘義務があり、提供してくれるはずがない。現実的に考えて既存の人名データを安易に使用することを諦め、自ら人名資料を探して、データベース化するのが残された唯一の道である。

2．1　人名資料の選定

一つの言語において、語彙の変化ぶりは文法よりはるかに活発することは周知の通りである。人名は当然言語そして文字に依存しなければならず、また人名もまた静止しているわけではなく日々変化するものである。ここにいう変化は当然個別の個体の出生と死亡によるものではなく、ある種の言語においてその人名プールの総量と質のことをいう。現在を生きる人は、出会う・知る・関わる可能性や需要性のある人物の名前のあり様に一番緊密に関わったり、関心を持ったりするはずである。日本人の平均寿命を考えて八十何歳とすれば、現在から逆算して百年程度の区間が理論上最優先的な研究対象となる。

前述した各種の研究に向かないか、入手自体困難な人名資料源のほか、次に視野に入ったのは種々の人名録である。図書館の蔵書検索に「人名録」を入力して検索すれば数百冊の人名録性格のものがヒットする。しかしその大部分は NTT 電話帳と同じく、読み方がないか、限定的な都道府県や業種・分野、あるいは年・時代の人物に限って収録しており人名データの分布範囲には均衡性が

欠けて考察の目的にそぐわないと判断された。同時にヒットした書誌名の中、数種類の年鑑類があった（後述）。これらの年鑑類には有名人の公開された個人情報を盛り込んだ人名録が付録や分冊として付属している。編集方針によれば、その刊行の前年度[50]各界で活躍していた人物を中心に収録したとしている。出身地域や年齢を問わず、全主要業種・分野に渡って収録するという点において必要する無作為抽出された人名データという性質に一致した。以降、年鑑類の人名録に絞って各材料の具体的な状況を確認している。

嘗ては以下の四種類の主要年鑑が刊行されていた。創刊の順に「時事年鑑」（1918-1994）、「毎日年鑑」（1920-1981）、「朝日年鑑」（1925-2000）、「読売年鑑」（1950[51]-現在）の四種類があり、何れも新聞社が刊行するものである。現在「読売年鑑」のみ継続しており、他の三種類は次第に休刊となった。この刊行状況を踏まえて筆者は「読売年鑑」を優先的に確認した。

現在の「読売年鑑」のスタイルは、新しい 2007 年版を例に「2007 年版　読売年鑑　別冊　分野別人名録」[52]をタイトルに年鑑本体と合わせて二冊ワンセットで刊行販売しているが、創刊の当初はこれと違うスタイルであった。「読売年鑑」は読売新聞社が 1950 年に創刊した年鑑型刊行物で創刊当初は一冊のみのスタイルで内容はこの年度内に報道された重要事件から選ばれたものであった。要注意なのはこの時のタイトルは「昭和〇〇年版　読売年鑑」となっているが、この「〇〇年」は次年度となっている点である。この出版年とタイトルの不一致が 1979 年版まで続き 1980 年版から解消されるようになった。凡例及び本文事項を確認したところ、人名の構造と特徴の分析に必要とされる人名の「表記」「読み方」「生年」[53]が揃っているため人名資料として利用可能である。刊行年の逆順にさかのぼって調べた結果、当年鑑人名録の刊行スタイルや表示方法は途中で変更があったことがわかる。1979 年版から「読売年鑑」の

---

[50]種類や発売時期により、同年度の場合もあるが、何れも、刊行する時点からさかのぼって数えた一年間となるのが基本である

[51]これは刊行年で、本体に書いてあるタイトルは「1951（昭和26年版）読売年鑑」と印字されている

[52]2007 年に最初の人名資料の選定を行った。当時確認したのは1987 年版と 2007 年版であったが、現在は創刊号までさかのぼって確認した

[53]少数ではあるが、生年月日が明記されていないケースも存在する。この場合、主としてインターネットの情報源を通じて、確認につとめるが、確認できない者はデータベースに入力せず廃棄する方針をとった。

スタイルは現行に近い二冊ワンセットとなり本体と別に「読売年鑑　昭和五十四年版　最新資料要覧」のタイトルの別冊が付いている。出版情報のページによると収録内容は人名録だけではなく、サブタイトルが示すように「戦後世相史・こよみ・人名録　官公庁・学校・会社・諸団体　国・公立情報諸機関名鑑」などの情報も盛り込まれていた。この段階でまだ独立した人名録とは言えず[54]完全に現行のスタイルに切り替えられたのは次年度の 1980 年版である。このスタイルは1980年版から1979年版の試みを踏まえて本体と別冊の分野別人名録で固められ、現在まで至っている。もう一つの変化は出版時期の変更で、上述のように 1979 年版まで当年度の年末頃に次年度をタイトルとして刊行されていたが、1980 年版からタイトルの年度と実際の出版年は統一されその年度の 3 月に刊行するようになった[55]。この出版時期は現在まで変わっていない。人名資料の選定に最も重要なポイントの一つである読み方の有無だが 1968 年版[56]から初めてふりがなが付くようになり人名資料として利用できる時期の一番早期の資料である。上記の同性格の他の三年鑑はこの時点で何れもふりがなが付いていない。要するに利用できる人名録の刊行時期の幅は「読売年鑑」が最新でにして最古でもある。以上の「読売年鑑」及びその他の年鑑類の人名録の状況に鑑み人名データベースの構築に使用する人名資料は「読売年鑑」人名録に依ると決定した。具体的に、利用可能な一番古い年度の 1968 年版をはじめ、二十年ずつ間隔をおいた1987年版と2007年版の三冊を人名データベース構築の原資料として利用することにしたが三冊の間にそれぞれ二十年間の間隔があったため、多くの変更があった。これから、それぞれの説明事項を確認する。

2．1．1　「読売年鑑」人名録の 1968 年版について

書名　「昭和 43 年版読売年鑑」

---

[54]注意点は上に述べたサブタイトルが出版情報ページのもので、表紙に載せた内容と少々違いがあることと、出版年が「昭和53年」を「54」と誤記したことである（本体が「昭和53年」であった）。初めて本体と別冊と分けて編集する試みの際、いささか混乱していた様子が窺えよう。

[55]1979年版は1978年の年末、1980年版は1980年の年始の刊行となっており、1979年に実際の刊行はなかった。

[56]1968年版は人名録本体の一部としており、全体の「第四編　人名録」とされていた。

発行年　1967 年

発行所　読売新聞社

1968 年版の人名録は年鑑本体の第四編人名録とされ「皇室」「国家議員」「人名録（日本）」「人名録（世界）」「追悼録（日本・世界）」五つの部門からなる。データベース構築に利用を予定しているのは「人名録（日本）」（pp.579 - 646）の部分である。1968 年版の場合人名録独自の凡例や掲載要項はなかったため「皇室」を除いたそれぞれの構成部門の題名の下に掲載方針などに関する説明が記されている。目次の「人名録（日本）」と異なり本文では「日本人名録」を題としているがその下に罫線で囲まれた以下の事項説明が書かれている。

氏名　ふりがな　生年月日　(出身地)　職業
前歴　専門分野　出身校　住所　電話の順序
姓名[57]のつぎの(　)は実姓名。住所で（東京都）
は省略。国家議員は前掲。
（42.9.10　現在）

「氏名」は漢字表記を指す。「ふりがな」はひらがなを用い、氏名の区切りとして、「・」が入っている。「生年月日」は年号である。特に注意すべき箇所は「姓名の次の（　）は実姓名」で、換言すれば全ての見出し氏名が本名であると限らない。作家や芸能関係者が筆名や芸名を通称名としている場合も含まれていると捉えるべきであろう。このようなケースは人名をデータベースに登録する際に対処基準が違うため詳細は後述する。なお本文内容を確認したところ、この 1968 年版は分野別人名録ではなく人名の最初の仮名[58]によって、五十音別となっている。「あ」で始まる人名は「あ組」に、「い」で始まる人名は「い組」に分類され各「組」内部の配列は読み方のカナ順ではなく、漢字の部首順のようだ。段組は四列である。何れにせよデータベース化及びその後の利用に影響を及ぼすことはない。

[57]原文ママ。
[58]即ち、名字の読み仮名の一番目。

2．1．2　「読売年鑑」人名録の 1987 年版について

書名　「昭和 62 年版読売年鑑別冊分野別人名録」

発行年　1987 年

発行所　読売新聞社

1987 年版は既に分野別人名録として独立した別冊となり、別冊目次の前に凡例のページが設けられている。その中の関連内容を抜粋すると以下のようなものである。

掲載要項

この「人名録」は,現在各界の第一線で活躍しておられる代表的な方々を,分野別に掲載しました。正確を期すために,約 20,000 人（外国人を除く）に調査票を送り回答を寄せられた方の中からさらに当社で選定させていただきました。

表記

◇配列は原則として各分野とも 50 音順

◇原則として昭和 61 年 12 月 31 現在

◇経歴の役職は現職を退いた時点ですべて「元」

以上の内容から得た重要情報は掲載要項における掲載人名の性格と配列は各分野別とも全て 50 音順であった。目次を確認すると「皇室」「国会議員」に続き「政治」「官界・法曹」「経済・産業」「社会」「報道・評論・出版」「人文科学」「自然科学」「文芸」「美術」「音楽・舞踊」「演劇・芸能」「スポーツ」「趣味,服飾,美容」「都道府県」「外国人名」「学術・芸術会員」「追悼録」「追悼録 40 年」などの分野や部門が設けられている。各分野の内容の相違に鑑みその内、データベース化に利用するのは「政治」から「趣味、服飾、美容」までの各分野とする。

なお、1968 年版のような掲載人名に関する具体的な説明は各分野の題名の右か下に書かれていた。例えば、「政治」分野の場合、

＜氏名　ふりがな　生年月日　（　）内は出生地　役職　最終学歴　住所　電話の順＞

と記されている。1968 年版と比較すると実姓名に関する注記は省かれたが、本文で確認したところ同じ方針であった。また「ふりがな」の部分における氏名の区切りとして、「・」の代わりにスペースを用いた。「生年月日」は和暦のままで、段組は 3 列に変更された。

2．1．3　「読売年鑑」人名録の 2007 年版について

書名　「2007 年版読売年鑑別冊分野別人名録」

発行年　2007 年

発行所　読売新聞東京本社

2007 年版の基本スタイルは 1987 年版を踏襲したとみられる。目次を確認した所分野の設置は「皇室」「国会議員」に続き「政治・国際」「官界・法曹」「経済・産業」「社会・生活」「報道・評論・メディア」「人文・社会科学」「医療・健康」「自然科学」「文学」「美術」「音楽・舞踊」「映画・演劇・芸能」「スポーツ」「趣味・娯楽」「都道府県」「外国人名」「学術・芸術会員」「追悼録」に微調整された。データベース化に利用するのは、「政治」から「趣味・娯楽」までの各分野となっていた。「凡例」に新しい内容が付け加えられた。以下の記述には最終的に「読売年鑑」の人名録を人名資料と決めるに重要なポイントが含まれている。

凡例

[掲載要項]

この「分野別人名録」は読売新聞紙面に掲載された人など、現在各界の第一線で活躍している代表的な方々を分野別に掲載しました。正確を期すために、約 20,000 人（外国人を除く）に調査票を送り、寄せられた回答をもとに小社が編集しました。

公的、社会的な要職にある方は、「氏名、職業・肩書、公的連絡先」について「原則公開」とさせていただきます。

[表記]

□配列は原則として各分野とも 50 音順

□データは原則として 2006(平成 18) 年 12 月 31 日現在

□経歴の職業・肩書は、現職を退いた時点で、すべて「元」

□氏名表記の漢字は、新聞表記に拠る。ふりがなは原則とし、現代仮名遣い。
　後のカッコ内は本名

□生年月日は西暦・元号を併記

「掲載要項」の記述を読む限り氏名などの掲載情報は被掲載者本人の了承を得た上で行ったと捉えよう。言い換えるとこれから同年鑑に公開された情報を利用してもプライバシー侵害の恐れはないと考えてもよかろう。今日のようなプライバシー意識の高さもあって研究が目的だと言えども、それに対する配慮は不可欠であろう。この点において情報公開の承諾を本人から得た同年鑑は非常に使用しやすい。「表記」の四番の箇条に表記、ふりがな、本名について説明があった。これは前述した作家や芸能関係者の筆名と芸名問題だけではなく、近年、結婚が原因で本名が変わっても、婚前の名前を通称名として使用し続ける社会人女性が増えつつある社会事情が背景にあることとも関係しているのであろう。このような元の本名と筆名・芸名とは本質的な違いがあり、本研究においての取り扱いも異なる。

各分野の本文内容を確認したところ、その分野の題名の下に、1987 年版のとほぼ同様の注釈があった他、「生年月日」は西暦と和暦の併記となった点以外は目立った相違が見当たらない。

以上で述べた諸般の事情を総合的に確認・考慮した結果、予定どおり、「読売年鑑」の人名録の 1968 年版と 1987 年版と 2007 年版の三冊の中から、原資料として人名データを採録することにした。

2．2　人名データベース

2．1で紹介した「読売年鑑」人名録の人名情報をデータベース化するに当たってマイクロソフト社のPC版エクセル2007を使用した。エクセルを使用することにした理由は、これまでの研究結果を踏まえて予定している統計分析方法では正式なデータベース用ソフトのアクセスを使用する必要がないと判断したためである。人名データの入力作業は三冊の人名録をそれぞれ男性と女性と分けて別々のシートとして入力することとした。入力完了後男性と女性と各自合併し、重複データの除外作業を実施した。

まず人名データベースの各列の見出しを決定した。設定は以下のとおりで、左側A列から右側へ順に、

「番号」は、人名データの入力順番を表す通し番号である。

「氏の表記」は、人名データの漢字表記の「氏」の部分に当たる。

「氏の読み」は、人名データのふりがなの「氏」の部分に当たる。

「名の表記」は、人名データの漢字表記の「名」の部分に当たる。

「名の読み」は、人名データのふりがなの「名」の部分に当たる。

「生年」は、人名データの当人の生年月日の生年に当たる。

とした。「時代」は、人名データの当人の出生年が属する時代、つまり、明治、大正、昭和の何れに当たる。「氏の注」は氏の表記やよみに関する特に注意すべき事項があった場合、別添の「人名データベース特別注意事項マーク表」[59]のそれを代表する英文字で表す。

「名の注」は名の表記やよみに関する特に注意すべき事項があった場合、別添の「特注表」のそれを代表する英文字で表す。

「備考」は、「氏の注」「名の注」のための「特別事項表」の何れのケースにも当てはまらないが特に注意が必要な場合に注記を書くために使用する。

「頁所在」は、人名データの原資料における所在頁数に当たる。

次に、人名データの入力作業を開始する前、幾つかの予備作業が要された。

[59]以下、「特注表」と省略する。

① 別について、今回の原資料内容上それに関する記載はない。これは日本人の名前の男性と女性との区別は通常混同される恐れが少ない傍証としても捉えられるが、「翼・つばさ」「光・ひかる」「忍・しのぶ」「薫・かおる」のような男女両用の名前の存在も周知である（実際は、人名データを入力する作業中、判断しにくい人名が数十例出現した）。従って常識での性別判断は不十分と認識し、性別確認作業は逐一確認をせざるを得ない状況下に置かれた。具体的な方法として、まず常識的判断をもとに疑問点のある人名データの最終学歴・役職を確認する。女子校名か女性のための組織名が現れれば女性だと確認できる。もし、何れも確認できなかった場合、インターネット上で画像検索を行う。原資料に掲載されたことは有名人であり、社会的に活躍していることを意味する。このためどちらかの正式ウェブサイトで紹介されたり、参加した会議の写真が載せられたりするのが一般的である。このように本人の顔が写っている写真（人物位置の説明付きの集合写真を含む）に基づき性別が判明できる。これでも確認できなかった場合、採用しないことにした。

② 生年月日」については、基本に原資料に記載があるが、少数ながら記載のないデータもある。この場合インターネットの信憑性の高い情報源で確認に努めた。主に利用した情報源は「国立国会図書館典拠データ検索・提供サービス」[60]と各企業・機関のウェブサイトである。一度書籍などを出版すれば、「国立国会図書館典拠データ検索・提供サービス」で著作者の生年が登録されるのが一般的である。著作のない企業関係者の場合、各所属する企業のウェブサイトで公開されている役職者の経歴情報で確認する。一部、生年月日が信憑性の高い情報源で確認できなかったデータは採用しないことにした。

③ 回の考察は「当用漢字表」の表外字の含有率という項目を設けているため、表記のすべての漢字が「当用漢字表」に含まれるかどうかについて事前確

[60]Web NDL Authorities＜http://id.ndl.go.jp/auth/ndla/＞

認を行った。表外字の場合、「特別事項表」に設けたそれを代表する英文符号を「氏の注」「名の注」に記している。

④ 資料の性格についての説明の部分ですでに触れたが人名のすべてが本名であるとは限らない。作家のペンネームと芸能人の芸名は本人や関係者が意図的に付けた名ということもあり一般の人名ではないため今後の課題として、場を改めて考察し今回の考察においてそれらのデータは採用しないこととした。なお 1968 年版と 1987 年版は日本人、外国人を各自収録する方針だったのに対し 2007 年版は外国人が日本人と混在しているため、それを事前排除した。

最後に、人名データの入力方針に関しての補足であるが、「氏」または「名」の表記が復数漢字の場合漢字の間にスペースを挿入、対応するふりがなの部分も同様に扱う。ただし、ふりがなと漢字の対応関係が明らかでない場合[61]、ふりがなはまとめて入力するか分割入力するかは、具体的な情況に応じて判断する上対処することとした。なお五文字未満の人名の氏と名の間にスペースが入っているので両者の区切りが明らかであり五文字（含む）以上の場合、ふりがなに照らして判断するが判別できないケースはなかった。

以上の方針に従い、構築した人名データベースのイメージはその一部で示すと、下記のようになった。

番号	氏の表記	氏の読み	名の表記	名の読み	生年	時代	氏の注	名の注	備考	頁所在
1	安　孫　子	あ　び　こ	藤　吉	とう　きち	37	M	X			77
2	足　　達	あ　だ ち	篤　郎	とく　ろう	43	M	X	8		77

[61]たとえば、「清水（しみず）」という名字の場合、「水」の読みは「みず」だと容易に判断できるが残された「清」という漢字と「し」という読みについて関連性は不明であり、「長谷川（はせがわ）」もこれと同類である。また、「渡辺（わたなべ）」の場合、「辺」は「なべ」と読むのは明らかに不自然で「べ」と読むべきだが、「な」の読みが取り残されてしまうこととなる。このような人名ケースは「表示と読みの対応関係にズレが有る」と大別するが、さらに細分して処理する必要がある。具体的には、「氏の注」か「名の注」に「人名データベース特別事項英文字対応表」で分類登録したケースごとの対処方法に従って処理した上、それぞれのケースを表す英文字を付けることとする。

3	阿　具　根	あ　ぐ　ね	登	の　ぼ　る	45	M				77
4	茜　ヶ　久　保	あかね　が　く　ぼ	重　光	しげ　みつ	38	M	58		7	77
5	秋　　田	あ　き　　た	大　助	だい　すけ	39	M				77
6	麻　　生	あ　そ　　う	良　方	よし　かた	12	T	K			77
7	飛　鳥　田	あすか　た	一　雄	い　ち　　お	4	T	G	R	7	77
8	淡　　谷	あ　わ　　や	悠　蔵	ゆう　ぞう	30	M		8		77
9	井　　岡	い　　お　か	大　治	だ　い　　じ	3	T				77
10	井　　出	い　　で	一　太　郎	いち　た　ろう	45	M			7	77

人名データ入力後、取得した人名データ数は下記の通りである。

1968 年版、男性名：3,953　女性名：146

1987 年版、男性名：7,761　女性名：681

2007 年版、男性名：12,223　女性名：1,849

データ数は男性名の数量と比べて女性名の方が極端に少なかった。分析調査の結果の普遍性を考えればより多くのデータが望ましいが、今回の人名資料の性格上の問題もあり人名資料を変更しない限り、女性名のデータを増やすことが困難である。また今までの調査の結果、女性名の構造は男性名のそれと比べて実にシンプルであることを踏まえ、今回は不十分とも思われるものの、女性名に関する考察は続行することとした。最終的に重複データの除外作業を終え、取得した人名データ数は男性名 21,453、女性名 2,272 となった。データ人物の出生年の幅については男性は明治元年から昭和 64 年で、女性は明治 9 年から平成 1 年となっているが両方とも大正から昭和中期のデータが一番豊富で、両端へと減少する傾向がある。その他の情報は後の章で詳述する。

2．3　用語定義

本考察を開始する前に、幾つかの用語を定義・説明しておく。

2．3．1　「モーラ」

日本語の音の長さを考える際、その単位として三つの用語「音節」「拍」「モーラ」が用いられる。名前を語彙と見なして論じる場合も勿論単位が必要とするため本稿では「モーラ」を人名の音の長さを数える際の基本単位と決める。「モーラ」は「拍」とほぼ同義ではあるが「音節」は漢字音の撥音の「ん」、漢字音の長音の「う」、促音の「っ」に加えて各種の長拗音が含まれる場合、前の音と合わせて 1 音節と数えるに対し、それぞれ 1 モーラと数えて合計 2 モーラとなる点において二語の最大の違いである。具体的に例を挙げると以下のようになる。

「新一（しんいち）」　　3 音節　4 モーラ
「浩一（こういち）」　　3 音節　4 モーラ
「一廓（いっかく）」　　3 音節　4 モーラ
「省一（しょういち）」　3 音節　4 モーラ

なお、本稿での音的考察は原則にモーラのレベルに留まり音素まで分解しない。

2．3．2　「名根」と「機能的名素」及び「モーラユニット」

人名を語彙に見なし言語学的視点からアプローチする際、人名の構成を分析してその構成要素を分類する必要がある。田原（2008）では「添字」を使用し、その後の括弧に「名前の語尾につく『子』や『郎』のような部分」と注釈を付けたが、1.2.2.4 にて触れたように「添え字」は本来別の意味を既に有している。麻生（1992、1994）は「語幹」「語尾」の用語を使ったが定義には言及していない。言語学の通常の定義をそのまま流用したと考えられるが、「語幹」「語尾」の概念は動詞・形容詞・形容動詞に用いる用語で、人名に多く存在する名詞や他の品詞に使うのは適切でない。また仮に用言であっても両者の概念は人名の範疇内では必ずしも当てはまるとは限らない。

田籠（2005b）では、「名素」と「名辞」の用語を自ら定義して使用しているが、この定義は形態論の概念「形態素」「接辞」に由来するものだとすれば、両

者は包含関係にあり同等の概念でない。しかし田籠の独自定義では同等の概念となった。そもそも一番問題となるのは人名構成は「名素+名辞」という仮説である。この仮説は「花子」「辰男」のような構造を持つ人名の説明に適すが、「博貴（ひろたか)」「香（かおり)」のような構造を持つ人名には通用しない。従って本稿の本論部分では人名の構造を分析するために同じく形態論の概念を参考にして新しい用語を三つ定義する。

① 名根」

「名根」とは人名において原則として日本語において下記四種類の「語」もしくはその「語根」に分類される形態素のことを言う。例えば動詞「広（ひろむ)」もしくはその語根の「広」の部分、形容詞「高（たかし)」もしくはその語根の「高」の部分、形容動詞語幹「静（しずか)」もしくは語根の「静」の部分、名詞[62]「家」そのものなどで、要するに「名根」は何らかの語彙的意味を持たなければならない。

② 機能的名素」

「機能的名素」とは人名において動詞や形容詞など用言の活用語尾やその他の語彙的意味を持たない形態素を言う。例えば動詞型人名「広務（む)」の「務（む)」の部分、形容詞型「高志（し)」の「志（し)」の部分、形容動詞型「静香（か)」の「香（か)」の部分と女性名に多く見られる語彙的意味を持たない単なる音結合の構成要素（モーラ）などである。「名根」がほとんど 2 モーラ以上であることに対し 1 モーラのみが原則である。以降便宜上「名素」と略す。

③「モーラユニット」

「モーラユニット」とは人名を一つの全体として見なす場合、この全体を構成する個々の漢字を基準[63]とした音の断片（モーラもしくはその結合体）を言う。「名根」と「名素」のどちらもこの用語で称すことができる。以降便宜上、「ユニット」と略す。

---

[62]数詞を含む。
[63]表記が仮名やその他の踊り字の類を含む場合、その表記に当たる。

2．3．3　「名値（めいち）」

「名値」とは、人名としての排他識別性の度合いを表す数値のことを言う。「名値」が高ければ他の人名と区別が付きやすく、同名率が下がる。恐らくこの「名値」を新たに導入しなくともモーラ数で同様な機能を果たせることができるのではないかという考えもあると思うが、モーラ数で説明しけれないケースが存在する。例えば「純太郎（じゅんたろう）」と「純一郎（じゅんいちろう）」はそれぞれ3文字5モーラと3文字6モーラで構成される。モーラ数が違っても、意味的にも感覚的にもさほど差異を感じない。もう一つの例「順（じゅん）」と「順（したごう）[64]」は同じ表記で違う読み方をする。「したごう」の方がモーラ数も断然多いが、他人の人名と区別する機能を果たす点において、必ずしも「じゅん」より高いと限らない。つまりモーラ数は人名の排他識別性を示す尺度として限界があったので、この「名値」を新たに導入する必要がある。
さて、次に「名値」の付与規則を説明する。

①原則的に「名根」に2点、「名素」に1点。
例　「弘務（ひろむ）」3点　「弘」2点　「務」1点
　　「弘美（ひろみ）」3点　「弘」2点　「美」1点
　　「弘（ひろむ）」2点　　「弘（ひろし）」2点
　　「翼（つばさ）」2点　「都羽佐（つばさ）」3点
　　「明（あき）」2点　「明（あきら）」2点

②但し、「専用止め字」[65]化した「名根」については、「名値」1点減点する。
　つまり、「専用止め字」化した「名根」の「名値」は1点とする。
例　「子（こ）」「お（雄、男、夫など）1点

なお、名値の高低に関して、名値には人名の性差を示す潜在的機能を有する、という仮説を立てたい。つまり名値が高ければ男性的、名値が低ければ女性名との区別が付きにくくなる、というものである。この発想は特に性別指示性を

[64]「倭名類聚鈔」の編者源順の諱。
[65]下記Ⅳにて説明する。

有する「止め字」を含まない人名の場合、判断の材料として大きな役割を果たすと考えている。

2．3．4　「止め字」

「止め字」という用語は現在名付け（ブック、サイト）関連の分野で広く使われている語であるが2015年現在まだ辞書に載るほど定着には至っていない。勿論精確な定義も未だ存在しない。研究者の間では使用例が少ないものの佐藤稔（2007）は以下のように述べている。

> 人名用接尾語「―すけ」「―こ」「―み」「―お」などを含む、人名の末尾一ないし二音節の部分に相当する漢字をいう。

この記述は上述の名付けの分野の実際の使用状況とほぼ合致する。

このほか、かなり早い時期にほぼ同じ意味で別の研究論文田原広史（2008）で「添字」という用語が使用されていたが、その定義も定かでなかった。「添字」は「止め字」と違い既に安定した用語ではあるが、人名に関する専門用語ではなく別の事物を指す一般語彙である。その意味をそのまま人名の研究の専門用語とするには、違和感を禁じ得ない部分がある。まず、例え人名のために「添字」を再定義しても字面では他の語に添えて副次的な立場にあるイメージがある。にもかかわらず、最も典型的な止め字「子、男・夫など」の場合、具体例「良子・義夫」の構成を見ると「良い女、良い男」と解釈できるので、むしろ「子」と「夫」が文節の中核的な部分で前の部分こそ修飾語にすぎない。つまり上の事例では前後の語の立場を「添字」の含意と正反対に捉える。それに、「添字」はこの論文以降の使用実績が殆どなかったため、総合的に判断して、本稿ではこの用語の踏襲をしないと決めた。

なお「語幹」「語尾」のように、言語学的な用語をそのまま借用する研究者もいる。しかし、これも「隆史（たかし）」「静香(しずか)」のような人名に好格好ではあるが上に挙げた人名例の各構成部の関係を説明するに適さない。また、本節のⅡに既に説明したように田籠博（2005b）で使用された「名素」「名辞」といった用語も不完全なためそのまま踏襲は出来かねる。

そもそも、これまでの先行研究のほとんどが人名は「A+B」という構造を持つと仮定した上でパターン化を目指してきた。しかし、女性名もそうであるが、特に男性名の場合、決してワンパターンでまとまるほど単純ではない。歴史的に見れば男性名でも女性名でも、同時代に複数の命名系統が並行的に存在し、一人の人間が複数の「名前」を持っており、所謂複名俗があった。一名化となったのはせいぜい明治時代初頭からのことである。結局複数存在していた系統の違う命名方式から一つ選んで新生児に名付けるようになったのが明治初頭から昭和末期までの命名メカニズムである。つまるところ、もともと異なる系統の命名メカニズムによって付けられた名前をワンパターン化しようとすることに無理があったのに加え、止め字の存在がさらなる混乱を来したのである。特に女性の代表的な止め字「子」、男性の「夫など」を使った命名方式が長い間、命名の現場において支配的な地位にあった。それに目を奪われ止め字を軸に人名のワンパターン化を目指そうとする考え方は誰しもが理解できる。しかし、止め字系統の命名方式は命名の世界を統一することができず、半ばに衰退に転じた。結局、止め字命名方式は諸命名方式の中の一種類にとどまり命名の世界は「戦国時代」に舞い戻り、各旧来命名方式に加えて新しい命名方式（所謂平成人名、キラキラネームなど）の模索も始まっている。いかに隆盛を極めていたとは言え、それだけに注目して立てた考察案で結局うまく解釈できるのはこの止め字系統の人名だけであろう。人名の全体像をつかめるには止め字に拘りすぎてはいけないことは今や明白である。とはいえこの系統の命名方式の重要性はやはり無視できるものではない。いずれにせよ、命名メカニズムの一重要パターンとしてその実態を明らかにする必要がある。

要するに、止め字は命名方式の「一つ」としてアプローチしなければならない。上記Ⅲで説明した「名根」「名素」に止め字問題を混同せず人名の構造が「A+B」と仮定しないのが筆者の基本姿勢である。

現在、名付けの現場でいう「止め字」は専ら人名の最後の一文字を指していて、これは特に問題あるわけではないが佐藤稔（2007）で取り上げた用例を見れば分かるように「こ」「お」「すけ」のような限られた字種をいうことが多い。つまり「止め字」という語は広義に言えば「人名の最後の一文字」で、狭義に言えば「こ、お、すけの類」である。本稿では二種類の止め字を設ける。

①顕在止め字。「顕在止め字」とは、「子、お、郎、すけ、彦、衛門系、兵衛系など」のような人名の最後に位置し且つ下記の要件を満たす文字あるいは語のことを言う。

イ　原則として、人名の最後に位置し、それ以外の場所に現れない[66]。
ロ　語彙的意味を持ち、名根もしくはその連合体として認められる。
ハ　性別を確定する絶対指標となる性別を表す語彙的意味を有する。

③ 在止め字。「潜在止め字」とは顕在止め字以外の「よ、え、み、し、やなど」のような人名の最後に現れることが多く且つ下記の要件を満たす文字あるいは語のことを言う。

イ　人名の最後以外の位置に現れることもあるが、最後に現れる方が多い。
ロ　語彙的な意味が希薄で、名根として認めがたく、名素と分類される。
ハ　性別を確定する相対指標しかならず、性別を表す語彙的意味を有しない。使用上の性別的な偏りから、性別判断の参考になる程度しか機能できない。
二　類似性を持つ不特定多数の語と組み合わせることが可能。

最後に、止め字の認定においてもっとも避けなくてはならない考え方は、人名の最後に現れる漢字もしくはモーラの出現率を唯一判断基準とすることである。

なお、関連用語として「止め字枠」についても少々説明する。「止め字」という用語は筆者が旧来研究から得た既存情報に自身の考えを加えて本研究において定義したもので、その説明は前述の通りである。

全ての日本人名の集合の中では人名を「止め字」を含むものと含まないものと大別できる。両者を比べて言及する際、「止め字」を含有する人名を便宜上、「止め字枠」と呼ぶが、これが即ち「止め字」を含む人名の総称である。例え

[66]彦、すけ（輔など）はこの規則から逸脱するケースも存在するが、全体においては極めて少ない。

ば、女性名の「子」「代」「恵・江・枝」「美」、男性名の「郎」「雄・夫・男」「彦」「介・輔」などを含んだ人名を「止め字枠」と呼ぶ一方、「マリア」「早苗」・「洋一」「貴紀(たかのり)」「弘(ひろし)」のような人名は「非止め字枠」とされる。

第三章　女性名について

第三章では第二章で紹介した人名データベースを利用し女性名について語学的視点[67]からアプローチしていく。

1.9 で既に触れたように女性名の言語学的構造は男性のと比べてシンプルで、その他の文化的視点から見るとしても系統も単純、しかも先行研究の累積も豊富である。従って本論での考察は男性名と女性名両方を扱うが、女性名の考察を男性名に先行することにした。

この第三章では女性名の表記（主として、漢字）と読み（モーラ）の統計調査を徹底し、その特徴や普遍性の高い規則を見出すことを考察の主要目的とする。

3．1　女性名の表記と読みの基礎データ

女性名の全データ数は 2,272 件で、その内訳は表記数ベースでは 1 文字名が 80（3.52%）、2 文字名が 1,538（67.69%）、3 文字名が 654（28.79%）で、一方、モーラ数ベースでは 2 モーラ名が 264（11.62%）、3 モーラ名が 2,002（88.12%）、4 モーラ名が 6（0.26%）となっている。

上記の集計を見て 1 文字名は少数派、2 文字名は三分の二強で、3 文字名は三分の一弱の割合を占めることは一目瞭然である。一方、モーラ数のデータでは 2 モーラ名は一割強の割合に留まり、3 モーラ名は実に九割弱と絶対主流であった。4 モーラ名についてはその存在自体が幻のようで、実例 6 例も突き止めた事に筆者自身少々驚きを覚えた。上記の集計データは飽くまでも合計であり、時代差の影響や表記数の異なる名前の間でどのような変化が生じるかについてそれぞれ取り扱う節でさらなる詳しい調査が必要である。

女性名の表記に用いる文字数（旧字体、仮名、踊り字を含む）は合計 5,118

[67]特に形態論の観点から

字で、一つの女性名に付き平均 2.25 文字が使用されている。全字種数は 562 種類で、一字種の平均使用回数が 32.93 回、そして表記の部位別の文字数と字種数の集計は下記表 3-1 が示す通りである。

	文字数	字種数	1 字種平均使用回数
全表記	5,118	562	9.09
1 字目	2,272	461	4.93
2 字目	2,192	219	10.01
3 字目	654	47	13.91

表 3-1　女性名の文字数と字種数

全表記の 1 字種平均使用回数は 9.09 回だったのに対し、部位別の 1 字種平均使用回数に格差が見られる。部位別の場合、人名の後部への移動につれ、使用回数が増加する変化ぶりは明白である。これは漢字の使用傾向が少数の字種に集中していることを意味し、止め字の影響を示唆している。しかしこの表 3-1 が示すデータは人名の概観程度しか意義を持たないと言えよう。それは例えば 1 字目の場合その中に 1 文字名と 2 文字名の 1 字目と 3 文字名の 1 字目が含まれているからである。この三種類の文字の混合グループの特徴が表 3-1 の数字として現れたがこの三種類の文字は同じ性質を持つか否かは、この表では判断しかねる。この質問に答えるにはやはり 1 字名、2 字名、3 字名と時代推移に加えて、字数別に詳しく検討しなければならない。なお一つの女性名に凡そ 2 文字（表記）が使用さたことは野元（1996）の報告と近似している。

女性名の読みに用いられるモーラ数（長音、撥音、促音を含む）は合計 6,558 モーラで、一つの女性名に付き、平均 2.89 モーラが使用されている。これも野元（1996）の報告とほぼ一致した。部位別のモーラ数とモーラの種類の集計は下記表 4-2 が示す通りである。

	モーラ数	モーラ種数	1 モーラ平均使用回数

全モーラ数	6,558	66	99.36
1 モーラ目	2,272	50	45.44
2 モーラ目	2,272	54	42.07
3 モーラ目	2,008	30	66.93
4 モーラ目	6	2	3.00

表 4-2　女性名のモーラ数とモーラ種数

女性名の読みは平均値 2.89 モーラを見る限り、3 モーラ名が女性名の主流だという結論に自然に辿り着くだろうが、果たしてこの数字という事実がイコール女性名の真実なのだろうか。筆者はそうは思わないのでその答えを探すべく後の節で再検討する。女性名はごく少数の 4 モーラ名を除き 2 モーラか 3 モーラのどちらかしかない。表 4-2 の 1 モーラ目は全部田籠（2005a）がいう「語頭音」で 3 モーラ目は全部「語末音」、一方、2 モーラ目には両方が含まれている。この状況は表 3-1 とも類似している。つまり個別の再調査が必要なのである。　女性名[68] 2,242 件の表記に対応したモーラユニットは合計 5,042 ユニットで、全ユニット 227 種類に対し、1 ユニットの平均使用回数は 22.21 回であった。部位別のユニット数と種類は下記表 3-3 が示す通りである。

	ユニット数	ユニット種類	1 ユニット平均使用回数
全女性名	5,042	227	22.21
1 字目	2,242	205	10.94
2 字目	2,162	67	32.27
3 字目	638	23	27.74

表 3-3　女性名のユニット数とユニット種類数

ユニットの判定は表記を基準としたものでユニットの平均使用回数が表記のを二倍以上上回る集計結果は女性名の音が表記よりはるかにシンプルであるこ

[68]特注表甲マーク群を除いた女性名

とが改めて浮き彫りになった。表 3-1 と表 3-3 を詳しく比較すると両方の種類の項を見て表記の字種数はユニットの倍以上あったことが分かる。これは当然一文字・ユニットの平均使用回数にも反映するはずだが、表記の方の 3 字目が最多に対しユニットの方は 2 字目が最多となっている。このような開きの存在は実に興味深く解明するにはまた詳しい調査が必要とされよう。

3．2　女性名の表記

3．1 で女性名に関する基礎データを概観し一定の特徴や傾向が見られた一方、詳しい考察が必要とする問題点も随所確認された。従って本節にては、女性名の表記に焦点を絞って考察を行う。

これまで人名の表記、特に女性名について、幾多の先行研究がなされてきた。その手法は概ね時代変化を沿って使用数上位の字種の順位変化や入れ替わりの調査であった。このような調査は無論必要だが筆者がこれだけでは重要なポイントを見落としているような気がしてならない。つまり人名の表記（主に漢字）の使用状況はその文字数或いはモーラ数で変わるのではないかと考えている。更に、同じ漢字でも人名の中における順番によって使用状況も違ってくるはずではないか。

例えば「止め字」の場合、人名の表記の字種を全体的に集計すれば「止め字」だから上位に上がるのは当然だと思われるのであろう。しかしある「止め字」をランキングにランクインさせたのは人名最後に位置する「止め字」だけが貢献した結果で、他の部位に位置した同じ「字」が皆無かと言えば実はそうでもない。例えば 3 モーラの女性名の内「よ（代・世・よ・ヨ）」が止め字（前から 3 番目に位置する）であった 36 例に対し、非止め字（前から 2 番目に位置し且つ 2 モーラの名根の最終モーラに当たらない）のは 42 例あり、非止め字の方が前者を上回っている。要するに人名の表記の実態を明らかにするには旧来の一次元的な時間軸に字数別と部位別などの軸を加えて立体的に見る必要がある。ここまで述べた内容は読者諸氏にとってやや漠然としたものかもしれないので、本節のこれからの考察で具現させてゆくこととする。ついて本節では、以下の視点から女性名の表記にアプローチしていきたい。またモーラやユニットに焦点を当てて考察する際にも、同じアプローチ方法をとる。

（1）人名の文字数の差異。字種の使用状況は人名の文字数の差から影響を受けるとの見通し。

（2）字種の部位別の差異。字種は人名における部位の違いで使用状況が変わるとの見通し。

（3）時代変化。但し、時代の分け方には筆者なりの考えがある。

ここからの「当用漢字」に関する説明は本来注記にすべきところだが、内容が多すぎて脚注に収まらない故、本文に割り込ませた形でここに記した。人名の表記（漢字字種と重なる場合が多く）を検討する際、それと実に大きく関係する歴史「事件」があるが、それは「当用漢字」とこれに絡んだ戸籍法[69]及び同法施行規則[70]のことである。結果として戸籍法の改正以降の人名の表記、即ち新生児の名付けはその制限下に置かれた。一般の個人名に対して規制する法律は明治初頭に発布され、その影響は現在にも続いている。ついては本題に入る前に、人名にまつわる当用漢字の相関事情を紹介しておく必要がある。

「当用漢字」自体は人名の表記を規定するためのものではなかったが、にもかかわらず戸籍法の改正及び同法施行規則によって「子の名には常用平易な文字を用いなければならない」という言文の「常用平易」の具体的な範囲の解釈が定められた。従ってその字種と字体は事実上人名の規範となり、1946 年に「当用漢字」が告示された当初、字種は指定されたものの、字体（異体字が存在する字の後ろの括弧にその異体字が入った）は示されなかった。1949 年にその字体を示すため「当用漢字字体表」が告示され、後の「常用漢字表」が告示されるまで使用されてきたが、「字体表」に示された字体の一部は「当用漢字」当初の字体と違い、所謂新字体であった。「当用漢字］に使われていた字体は旧字体となり入れ替えられたのである[71]。

以上の経緯を踏まえ以降人名の字体に関して発言する際、「当用漢字］の字種をいう場合、「当用漢字字体表」の字体によってカウントした数値を指し、当用漢字「旧字体」をいう場合、入れ替えられた「当用漢字」当初の字体を指す。当用漢字「異体字」をいう場合は、「当用漢字」当初の複数の異体字が存在する字種の中に代表に立てられた字体の後ろの括弧に入った字体を指す。当用漢字「表外字」をいう場合、上記「当用漢字」及び関連諸表の何れの字種字体にも

---

[69]戸籍法第五十条　子の名には、常用平易な文字を用いなければならない。
　常用平易な文字の範囲は、命令でこれを定める。（1948 年）

[70]戸籍法施行規則　第六十条戸籍法第五十条第二項の常用平易な文字は、左に掲げるものとする。
　一　昭和二十一年十一月内閣告示第三十二号当用漢字表に掲げる漢字
二　片かな又は平か（ママ）な（変体がなを除く。）（1948 年）

[71]ルビのように字体表の行間の空白に記された。

含まれていない字種を指す。以下本題に入る。

3．2．1　女性名の表記の基本データ

まず女性名の表記の基本データを見よう。女性名の全字種が 562 種類（異なり字数）で、その内訳は、漢字 468（83.27%）（当用漢字 335［59.61%[72]］、旧字体 2［0.36%］）、異体字 5［0.89%］）、表外字 126［22.42%］）字種、平仮名 53（9.41%）字種、片仮名 40（7.12%）字種、踊り字 2（0.36%）種類となっている。

女性名の全字数（表記の個数）が 5,118（延べ字数）字でその内訳は、漢字 4,516（88.24%）（当用漢字 4,096［80.03%］、旧字体 3［0.06%］、異体字 6［0.12%］、（当用漢字）表外字 411［8.03%］）字で、平仮名 462（9.03%）字、片仮名 133（2.60%）字、踊り字 7（0.14%）字となっており、この統計結果は 3.5.2.2 の野元（1996）のデータとほぼ合致した。

男性名の表記は通常漢字で書くのに対し、女性名は仮名表記が散見される。字種から見れば、平仮名と片仮名は女性名の表記の中でともに仮名総数の半分程度確認できていて女性名全字種的に各々1 割弱を占めた。表外字の 126（22.42%）字種という数値は決して無視できない量で、漢字だけの計算となればその割合が更に上昇するのであろう。

一方、字数では平仮名の数値は 462（9.03%）と高く、1 割弱の含有率を保ったことは女性名の表記の一部として安定していることを意味する。これに対し、片仮名の含有率は大幅に下落したが 2 種類の仮名表記の合計は総数の 1 割を超えていた。表外字の含有率も相当落ちている。これは表外字の字種が女性名の表記に占める地位は非安定で、命名者の個人差によって左右されやすいためかと思われ、現に用例数 1 例に留まるのは 65 字種で全 126 字種の半分以上を占めている。他方、用例数 30 例を超えたものとして「奈」35 例、「智」34 例の 2 字があり、この他用例数 10 例以上の字種が 6 字種確認された。つまり、表外字の中に女性名の表記に多用される字種は確かに存在する。

続いて、女性名の表記の字種ランキングを見よう。

---

[72]漢字全体のではなく、全字種におけるパーセンテージ。

まず、女性名の表記の用例数の降順でにおける上位 99 位を表 3-4 に示す。

順位	字種	例数	順位	字種	例数	順位	字種	例数
1	子	1,523	34	さ	19	67	亜	12
2	美	312	35	ま	18	68	生	12
3	恵	98	36	京	18	69	登	12
4	代	70	37	ゆ	18	70	の	12
5	和	63	38	栄	18	71	静	12
6	真	62	39	ミ	17	72	昌	12
7	由	61	40	文	16	73	多	12
8	み	58	41	悦	16	74	津	12
9	枝	56	42	道	16	75	お	12
10	千	55	43	る	15	76	ひ	12
11	り	53	44	純	15	77	世	11
12	紀	45	45	英	15	78	合	11
13	久	45	46	い	15	79	弓	11
14	理	37	47	慶	15	80	節	11
15	奈	35	48	敏	14	81	保	11
16	里	35	49	葉	14	82	な	11
17	智	34	50	麻	14	83	き	11
18	江	32	51	春	14	84	ち	11
19	香	32	52	ど	14	85	良	11
20	裕	30	53	佳	14	86	信	11
21	喜	27	54	リ	14	87	清	10
22	洋	26	55	郁	14	88	弘	10
23	幸	25	56	え	14	89	三	10

順位	字種	例数	順位	字種	例数	順位	字種	例数
24	明	25	57	実	14	90	富	10
25	直	24	58	穂	13	91	有	10
26	陽	24	59	光	13	92	礼	10
27	か	24	60	祐	13	93	淑	10
28	佐	23	61	順	13	94	早	10
29	知	22	62	百	13	95	綾	10
30	愛	21	63	澄	13	96	桂	10
31	雅	21	64	芳	13	97	志	10
32	貴	21	65	正	13	98	朋	9
33	寿	20	66	あ	13	99	玲	9

表 3-4　女性名の表記の字種上位 99

上位の字種を確認すれば、予想通り「子」が群を抜いて 1 位に就いた。実は、女性名の全字数は約 5,000 字であったためほぼ 3 文字に 1 字が「子」であった。まさに「子にあらずば女性名にあらず」と言えよう。因みに「こ」は 8 例、「コ」5 例であった。「子」に次いで 2 位となり唯一用例数が 3 桁だったのは「美」でこの結果は麻生（1992）と一致する。「美」と同く上位 10 位にランクインした「み」58 例と 39 位の「ミ」17 例を加わえ 400 例近くが確認できた。1 位の「子」に及ばなかったものの、二桁の 3 位以下の字種より突出した存在だと言える。以下、上位 10 位の字種は用例数 50 例以上、上位 20 位は 30 例以上、上位 30 位は 20 例以上というように順位が 10 位ずつ下がるにつれ、用例数は 20、10 例ずつ減少していく。33 位の「寿」を境目に用例数が 20 例を切った。

仔細を確認すれば「子・美・恵・代」は疑念なく上位 4 位を占めた。そして 8、9 位はその「異形態」のような存在だと捉えよう。一方、「和・真・由」のような人名の語末に殆ど現れない字種も上位にランクインしている。「子・美」に及ばないものの「恵・代」との用例数の差は余程顕著なものとは言いがたい。ここで一つの疑問が生じた。女性名がこれまでの多くの先行研究が唱えるよう

に「語幹・名素+語尾・名辞・添字」というパターンで構成されるのであれば、「子・美・恵・代」などは後者と見なされるべきであり、「和・真・由」及びその他の多くの字種は前者に相当するはずである。しかしこのほぼ定説は本当に詳しい検証に耐えられるのか。筆者は場を改めてその検証に当たりたい。

女性名の表記の字種に関する基本調査は上述通りとなり部位別及び時代別の調査は 3.2.2 と 3.2.3 で行う。

3．2．2　部位別で見る女性名の表記の字種（漢字種）

表 3-4 で女性名の上位 99 字種（仮名表記を含む）を見た。止め字グループが最上位に就いたことは容易に理解でき、また止め字は当然ながら、人名の最後に位置する。従って一歩進んで考えれば、止め字の存在自体は字種の分布における人名内部における位置においてアンバランスな状態にあると捉えられよう。つまり、人名の表記の全特徴を明らかにするには「全体像」だけではなく、「個体像」に対する考察も不可欠なのである。以下は女性名の漢字表記[73]を部位別に分けて考察したものである。

3．2．2．1　女性名の漢字表記　1 文字目

女性名の漢字表記の 1 文字目の字種数は 405 字種で、全漢字の 468 字種に対するカバー率は 86.54%である。延べ字数 2,028 文字に対し 1 字種平均使用回数は 5.01 回であり、仮名を含めた計算値より微増している。

カバー率はハイレベルではあるが 1 文字目に使用することのない字種の存在も明らかである。容易に考えられるのは止め字だが、止め字の種類にして量は多すぎる。その仔細は後の 3.2.2.4 で開示しよう。

そもそも 1 文字目を無区別に集計してきたが、この中には「1 文字名」「2 文字名の 1 文字目」と「3 文字名の 1 文字目」の 3 種類が混在している。1 文字目の字種調査を徹底するために漢字の女性名の 1 文字目とこれを構成する上記の三つのグループを加えて、合同の上位 30 位ランキングを表 3-5 に作成した。

[73]仮名表記については別の場で検討する。

順位	全漢字１字目		１字名		２字１字目		３字１字目	
1	美	136	愛	7	美	54	美	82
2	真	62	恵	6	和	51	真	34
3	和	52	緑	3	真	28	千	31
4	千	50	忍	3	裕	27	由	30
5	由	45	香	3	洋	26	久	21
6	恵	45	歩	3	直	24	喜	19
7	久	38	都	2	陽	24	恵	16
8	裕	30	綾	2	明	23	佐	10
9	洋	26	文	2	恵	23	奈	9
10	明	25	英	2	幸	22	登	9
11	陽	24	静	2	雅	21	三	8
12	直	24	史	2	千	19	百	8
13	喜	22	昌	2	京	17	富	7
14	幸	22	翠	2	久	16	眞	7
15	雅	21	藍	1	道	16	多	7
16	愛	21	巴	1	慶	15	理	6
17	京	18	光	1	由	15	麻	6
18	文	16	紅	1	悦	14	寿	6
19	悦	16	碧	1	文	14	加	6
20	道	16	悦	1	純	14	智	5
21	智	15	怜	1	郁	14	満	5
22	慶	15	彩	1	愛	14	貴	5
23	敏	14	凪	1	敏	14	有	4
24	郁	14	花	1	祐	13	比	4

順位	全漢字１字目		１字名		２字１字目		３字１字目	
25	純	14	柊	1	芳	13	香	4
26	祐	13	滋	1	正	13	志	4
27	芳	13	茂	1	葉	12	実	4
28	光	13	耳	1	順	12	友	3
29	正	13	涼	1	澄	12	冨	3
30	順	13	淑	1	良	11	亜	3

表 3-5　1 文字目とその内訳の字種上位 30

表 3-5 を見て、まずインパクトを受けたのは止め字の代表格とされてきた「美」と「恵」が上位に就いたことであろう。特に「美」は 1 字名を除けば、1 位を独占している。「恵」も何れの集計にも上位 10 位にランクインしており、この結果は恐らく殆どの従来の「止め字」に準ずる用語の定義に相反しているのであろう。一方、「子」と「代」は全く使用されていなかった。

勿論、これだけでは「美」と「恵」を止め字枠から排除できない。なぜなら、止め字を論ずる際、主にその読みを第一要義としており、表記は寧ろ副次的な存在だったからである。特に「え」には「恵・江・絵」など複数の表記が存在するので他の表記が見あらなかったことは「恵」が別の読み方でランクインした可能性を示唆する。つまり一旦このセクションにおける考察範囲から逸脱しまうが、この二字の読みを見る必要がある。

「美」の場合、2 文字名の 1 文字目は 54 字の内「み」42 例・「よし」9 例[74]で、3 文字名は 82 字の内 81 例が「み」と読んだ。この内訳を見る限り、「美＝み」が止め字として成立しがたいことは明白である。

「恵」の場合、1 文字名は「え」と読まれず「けい」2 例・「めぐみ」4 例しかなく 2 文字名は 23 字の内「え」3 例・「けい」19 例、3 文字名は 16 例全部「え」であった。1 文字名は止め字について論ずることは出来ず、2 文字名の場合ランクインしたのは別の読みに起因することが明らかである。故に、止め

[74]下の「恵」の説明を含めて、少数派の読みを省く

字から排除する理由にはできない。結論は「恵＝え」は 3 文字名に限って、止め字として認めがたい範囲に留まる。

さて考察内容を表 3-5 に戻そう。「美」と「恵」の他、3 系統は各々の偏りがあり 1 文字名、2 文字名と 3 文字名の上位字種はほぼ重ならない。なお、1 文字名の総数が少ないため 1 文字目全体の字種には対する影響が薄く、結果、他の 2 系統の和が全体のランキングとなったわけである。

上記の考察を通じて人名に使用される字種はその人名の字数によって差別化できることが立証された。また、多くの漢字に複数の読みを持ち合わせているため、字種を検討する際読みの違いに由来する落とし穴の存在に留意しなければならない。

3．2．2．2　女性名の漢字表記　2 文字目

2 文字目の字種数は 148 字種で全漢字字種に対するカバー率は 31.62%である。延べ字数 1,943 文字に対し 1 字種平均使用回数は 13.13 回であり、仮名を含めた計算値より少々増加した。

カバー率は 1 文字目に比べて半分以下に低下している。1 文字名の特有の字種が欠いた上、2 文字名の場合止め字に当たるなどの原因が考えられよう。全漢字の女性名の 2 文字目は 1 文字目と比べて構成要素が 1 種類減り、2 文字名の 2 文字目と 3 文字名の 2 文字目で構成されている。具体的にその内訳を下記表 3-6 に整理した。

順位	全漢字 2 字目		2 字 2 字目		3 字 2 字目	
1	子	1,049	子	1,049	美	79
2	美	149	美	70	代	33
3	代	66	枝	43	恵	25
4	枝	51	代	33	紀	19
5	恵	46	江	24	智	17
6	紀	34	恵	21	理	16
7	江	27	紀	15	由	15

順位	全漢字２字目		２字２字目		３字２字目	
8	理	25	里	13	奈	13
9	奈	21	香	13	知	11
10	里	21	穂	10	和	10
11	智	19	理	9	合	8
12	香	19	苗	8	枝	8
13	由	16	生	8	佐	8
14	穂	13	弓	8	津	8
15	知	12	奈	8	里	8
16	生	11	実	8	矢	7
17	佐	11	世	6	久	7
18	貴	11	保	5	鶴	6
19	津	11	貴	5	貴	6
20	和	11	栄	4	利	6
21	世	10	織	4	香	6
22	実	9	佐	3	寿	6
23	合	9	緒	3	千	5
24	保	8	重	3	衣	5
25	弓	8	津	3	都	5
26	寿	8	名	3	希	4
27	鶴	8	月	3	士	4
28	苗	8	幸	3	砂	4
29	衣	7	春	2	世	4
30	利	7	波	2	根	4

表 3-6　2 文字目とその内訳の字種上位 30

漢字名の 2 文字目となれば、2 文字名の最後の文字が該当するため、多くの止め字のランクインが予想される。実際その通り、全体のデータでは止め字群が最上位を占めた。具体的な順位は「子」「美」「代」「えグループ」へと順次下が

ってゆく。但し「え」は字種が豊富がため総数では「代」より多いものの、単独な字種ではその下位に抑えられた状態である。

2 文字名の場合まず全体トップの「子」は全てこの枠の「子」に依るものだと判明した。この傾向性は既に予想されていたが一つの例外もなかったことはさすがに著者も想像できなかったが、一方他の止め字も全部最上位に就いたことは予想通りだった。「美」の用例数は半減したものの 2 位を保っている。「えグループ[75]」の「枝」は「代」に取って代わり 3 位を獲得、そして「えグループ」には 5 字種もランクインしていて、そのすべてを合計すれば、「美」を超えていた。これで「え」の止め字としての勢いが伺える。

3 文字名の 2 文字目では不条理とも思われるが、最上位に就いたのは相変わらず止め字枠であった。しかし「子」の不在はその顕在止め字としての性格を改めて浮き彫りにした。つまり「子」は止め字として一番大きな存在であり、しかも止め字としてだけ存在する字種である点において他の字種と一線を画す。「子」に代わって 1 位についたのは「美」である。僅差ではあるが止め字としての「美」より多かった。故に 2 文字目の場合でも「美」は止め字の従来の定義に当てはまらなかった。「代」はこの非止め字部位において 2 位に返り咲いた。「え」はこれに次ぐ。「美」と同じように、顕在止め字の「子」と性格が違うが、強いていえば「え」の方が「代」と比べより止め字寄りだと言えるかもしれない。

実は 2 文字名と 3 文字名のランキングを比較すれば、重複字種は半数を超えていた。この状況を解釈するには漢字字種だけの調査だけでは到底不可能で、読みの視点をも取り入れる必要がある。

3．2．2．3　女性名の漢字表記　3 文字目

3 文字目の字種数は 21 字種で、全漢字字種に対するカバー率は 4.49%である。延べ字数 545 文字に対し、1 字種平均使用回数は 25.95 回、仮名を含めた計算値の約 2 倍に達した。

3 文字目となれば 3 文字名の 3 文字目に限られる。人名の差別化機能を担う

[75]「え」と読む字種は多岐にわたるため、止め字として全体視する場合、こう称す。

名根が含まれない上、大量の止め字の存在が予想される。故に、5%未満のカバー率に驚くに当たらない。しかし漢字字種が仮名字種を下回ったことについては少々予想外であった。

なお、このセクションの字種及びその集計値には女性名だけに存在する「仮名+仮名+漢字」という特別な人名パターンが含まれている。筆者は漢字仮名混種名と名づけた。この種の人名は男性名に存在せず表記が 3 文字（読みも 3 モーラ）の女性名しかに現れずしかも「仮名+漢字+仮名」か「漢字+仮名+仮名」といった変種も存在しない。この人名パターンについて後ほど専ら 1 セクションを設けて検討するので、このセクションではその存在、そしてその漢字部が集計に含まれることの提示に留めることとしよう。

順位	字種	例数	順位	字種	例数	順位	字種	例数
1	子	474	8	紀	2	15	栄	1
2	美	27	9	合	2	16	絵	1
3	里	7	10	香	2	17	理	1
4	恵	7	11	奈	2	18	女	1
5	江	4	12	那	1	19	勢	1
6	代	4	13	世[76]	1	20	乃	1
7	枝	4	14	実	1	21	為	1

表 3-7　3 文字目の漢字字種

上述の特殊な人名パターンも存在するが、表記の漢字字種の観点からその末尾の漢字部分は 3 文字の漢字名のと同様である。従って合わせて表 3-7 を作成した。予想通り、全ての字種が人名の末尾に当たるこの枠では「子」の用例数は突出している。他の字種の用例数となると極端に大幅減で、2 位の唯一 2 桁の「美」を除けば全て 1 桁であった。他の止め字の「代」や「えグループ」も上位に就いており、表 3-7 だけを見る限り「美」「代」「えグループ」は「子」と同様、止め字として認められるべきだと思われよう。故にこれらの字種は完全

[76]ちとせ、と読むので、「よ」ではない。

なる止め字の定義を満たすことができないものの、女性名の末尾の出現率の高さとしては他の字種より高いことも又事実である。

その他の字種は種類が少ない上、用例数も殆ど 1～2 例程度だったため、データの総数を増やさない限り、議論しても個別例の影響が強く、普遍性の高い結論が期待できない。結論付けると 3 文字の女性名は通常止め字或いは準止め字を使用し、そうでない女性名は極めて少数である。

3．2．2．4　女性名の漢字表記　止め字枠以外の字種

上記の三つのセクションで上位の字種について検討してきたが、止め字枠が殆どの場合において上位を独占していたため、事実上止め字の考察だったと言っても過言ではない。従ってここでは全漢字字種の表 3-4（上位 30 位まで）と部位別の表 3-5、表 3-6、表 3-7 を一つの表にまとめて考察することとした。まとめ表の内容は各表と変わらないので、本文での提示を省くこととする[77]。

まず、表 3-4 の止め字枠を除いてから残りの上位 10 位の字種を選出した。降順で、「和、真、由、千、紀、久、理、奈、里、智」の 10 字である。続いて、これらの字種の有無を他の表で確認する。結果、3 文字名の 2 文字目は含有率が一番高く 9 字種の確認ができた。同じ 3 文字名の 1 文字目はこれに続き 7 字種を確認でき、残りの部位は 4～5 種類で半数程度であった。

更に詳しく見ると特別な現象を発見した。2 文字名の 2 文字目と 3 文字名の 3 文字目の含有字種「里、紀、奈、理」は一致している。即ち、複数漢字を有する女性名の末尾の字種は止め字枠を取り除いても同じだった。ここで疑問が一つ生じる。これらの字種は止め字と呼ばれている（本稿において、潜在止め字へ細分した）「えグループ、美、代」と違うのか。違うなら違いはどこにあるのか。この疑問については止め字の検討の際改めて提起することとする。また注目すべき現象はもう一つある。2 文字名の 1 文字目と 2 文字目の字種に重複がない。つまりこの 2 部位を合わせるとほぼ再選上位 10 字種が揃い、互いに補集合をなしている。これは 2 文字名の前後の部位において明白な分担作業が行われていると考えられる。最後に、1 文字名の字種からは再選上位 10 字種の

[77]見やすさを考慮して、付録2として添付した。

何れも見出されなかった。この結果は 1 文字名の字種使用の独特性を改めて浮彫りしたと言えよう。以上の考察結果を簡単にまとめると以下のような算式が得られた。

（1）1 文字名≠全字種
（2）2 文字名 1 文字目+2 文字名 2 文字目≒全字種
（3）3 文字名 2 文字目≒全字種
（4）2 文字名 2 文字目＝3 文字名 3 文字目

なお、文字数を無視して単純に部位別で見ると 1 文字目と 3 文字目はそれぞれ 2 文字目と共通の字種を多く持つが、互いに共通字種を持たずに完全な補集合関係にあり、

（5）1 文字目+3 文字目＝全字種

の算式が成立する。そして全字種の選出する上位数を上位 15 位に拡大した結果、上記の算式の内（3）の含有字種数は 10 種類に留まったものの、（1）（2）（4）（5）は依然としてほぼ成立する。選出する上位数を更に拡大するとどのような結果が出るかは実に興味深いが、全データの用例数から見てそこまで範囲を広めると、どうしても少数例の影響が出かねないと考え、本稿での実行を取りやめることとした。

3．2．3　時代別で見る女性名の表記の字種昭和前半と後半の比較

女性名の字種を時代変化の視点で考察した先行研究には麻生（1992）があった。その他保険会社や名付けサイトなどでは毎年のトップテンかトップファイブ字種を発表したりもしている。繰り返して言うが最上位字種の経年流行は大衆の関心を答える形のもので、様々な突発的な要因から影響を受けやすく、その規則を客観的・学術的に検討することは難しい。強いていえば前述したように年号が変わる年とその後の 3～5 年間に、新年号に含まれた漢字に爆発的な人気が集まるくらいは検証可能としよう。

さて、本稿では字種を時代的視点で見るために更に時間の幅を持たせた一つの時代ごとに見ることとした。特に人名の字種に強力に、或いは長期間に作用

する事件を境目にして検討することが有意義だと考えられる。具体的に言えば、人名の表記に関し歴史上一番大きな事件は恐らく当用漢字による人名表記に対する制限である。国家権力による強制施行の下で人名に来した影響は莫大だと容易に想像しうる。従ってこのセクションでは当用漢字の人名表記に対する実効影響について調べる。

前述のように当用漢字の影響が実際に発生したのは1948年年始からである。1948年及びそれ以降に出生した人はその制限を受けた。従ってこのセクションで扱う人名の年代別は、昭和前半（S1[78]～S22）と後半（S23～S64）とする。

データベースから上記時間を基準に該当用例を抽出した結果、昭和前半 905例、昭和後半 1,019 例を得られた。用例数には大差がないものの、両者の集計結果値をそのまま比較するのは精確さに欠ける。その用例数の差の影響を解消するため、昭和後半の用例数を基準に係数「1,019/905」[79]を作成した。つまり昭和前期のデータの集計値にこの係数をかけると仮に昭和前半の用例数が後半のと同じ場合の数値が得られて、両者の集計値を同等な条件のもとで比較することが可能なのである。まず元の集計値を表 3-8-1 に示した。

	全表記		1 文字目		2 文字目		3 文字目	
	昭前	昭後	昭前	昭後	昭前	昭後	昭前	昭後
当用漢字	1,688	1,840	672	782	782	818	234	240
旧字体	2	0	1	0	1	0	0	0
異体字	3	2	3	1	0	1	0	0
表外字	196	157	160	120	35	35	1	2
平仮名	103	282	43	106	42	106	18	70
片仮名	57	30	26	13	26	13	5	4
踊り字	2	5	0	0	2	4	0	1
合計	2,051	2,316	905	1,022	888	977	258	317

[78]原人名資料の性格上、年号が明記されていたため、改元の年でもどちらの時代に属すか判明できる
[79]「係数K423A」と名付けることとする。

表 3-8-1　昭和前半と後半の表記文字数の比較　集計値

次に係数をかけた後の調整値の表を作成したのが表 3-8-2 の通りである。各漢字枠のデータを比較した所、顕著な差異が殆ど見られなかった。全体的に漢字の使用が減少していたが、最も影響を受けると想定した表外字であっても、減少は際だつとは言いがたい水準に留まる。その減少分はほぼ全て 1 文字目に集中していて前半と比べて後半の字数が三分の一減少したことは有意に考えられるが、特筆するほどの差もない結果であった。

	全表記		1 文字目		2 文字目		3 文字目	
	昭前	昭後	昭前	昭後	昭前	昭後	昭前	昭後
当用漢字	1,901	1,840	757	782	881	818	263	240
旧字体	2	0	1	0	1	0	0	0
異体字	3	2	3	1	0	1	0	0
表外字	221	157	180	120	39	35	1	2
平仮名	116	282	48	106	47	106	20	70
片仮名	64	30	29	13	29	13	6	4
踊り字	2	5	0	0	2	4	0	1
合計	2,309	2,316	1,019	1,022	1,000	977	290	317

表 3-8-2　昭和前半と後半の表記文字数の比較　調整値

仮名枠にははっきりした傾向性が見られる。前半と後半を比べると平仮名は増加、片仮名は減少し、この結果は先行研究の報告と一致する。仮名名の増減数はどちらも倍・半数を超えて、変動の激しさが伺える。

表 3-8-2 による延べ字数の比較では大差が見られなかったが、字種（異なり字数）の場合を見てみよう。全表記と漢字のみの二つのグループに分け、昭和前半と後半の全字種と部位別の字種数を下記の表 3-9 に示した所全表記と漢字の全字種の場合、何れも減少の傾向にあったことは明白である。1 字種目においては同じ傾向だったが 2 字目と 3 字目ではまさかの逆転となった。

まず考えられるのは名根としての 1 文字目の字種数減少の反動である。元より字種が豊富とは言えない名根としての字種の減少（即ち重複率増）に伴い、人名の基本機能を保つため他の部位の字種にバリエーションを求めた動きは容易に想像される。

	全表記		漢字のみ	
	昭前	昭後	昭前	昭後
全字種数	403	335	336	275
1 字目字種数	305	262	287	229
2 字目字種数	123	149	85	108
3 字目字種数	25	33	11	15

表 3-9　昭和前半と後半の全表記と漢字の字種数

次に考えられるのは仮名字種の影響である。本稿では平仮名と片仮名を区別して扱っているため、両者を合わせれば字種は百以上に上る。大きな変化が生じれば表記全体に数字的に大きく反応するはずである。表 3-8-2 を再確認すると、平仮名と片仮名の変動は果たせるかな、確かに強烈なものであった。しかし両者の変動は逆方向にあり相殺効果があった。そこで漢字のデータのみを確認すると、2 字目と 3 字目は表記全体の動きと一致している。つまり仮名（相殺後）と漢字の動きは方向が一致しており、その共同作用の結果が表 3-9 であった。

表 3-8、表 3-9 だけを見ては見いだせる特徴は多くはなかったが、やはり引き続き具体的な字種の比較に焦点を移して字種変化を検証する必要がある。

3．2．3．1　時代別女性名の全漢字表記の上位 30 字種の比較

以下、昭和前半と後半の上位字種を全体・部位別に比較し、変化の特徴に突き止めたい。まず全体の上位 30 字種を比較する。表 3-10 を見てみよう。昭和前半の字数（　部分）列は実際の集計値で、調整値列はそれに係数 K423A をかけた後の比定値である（以降の表 3-11、3-12、3-13 は同様）。

順位	昭和前半			昭和後半	
	字種	調整値	字数	字種	字数
1	子	823	731	子	555
2	美	114	101	美	187
3	恵	42	37	恵	51
4	和	42	37	真	51
5	代	32	28	由	44
6	枝	25	22	代	30
7	千	23	20	紀	29
8	江	21	19	理	29
9	由	19	17	里	29
10	久	18	16	奈	27
11	幸	18	16	香	26
12	明	17	15	千	25
13	紀	16	14	久	23
14	智	16	14	裕	23
15	陽	15	13	枝	21
16	洋	14	12	直	19
17	喜	14	12	和	19
18	栄	12	11	貴	16
19	佐	11	10	知	16
20	雅	10	9	智	15
21	道	10	9	佳	14
22	郁	10	9	美	13
23	真	10	9	麻	12

順位	昭和前半			昭和後半	
	字種	調整値	字数	字種	字数
24	悦	9	8	洋	12
25	康	9	8	陽	11
26	愛	9	8	祐	11
27	奈	9	8	京	11
28	文	9	8	佐	11
29	理	8	7	純	11
30	裕	8	7	有	10

表 3-10　昭和前半と後半の全漢字字種上位 30 の比較

表 3-10 ではまず昭和前半と比べて、昭和後半は用例が上位字種に集中する傾向にあることが分かった。「子」を除き同順位の場合、後半の字種にはより多くの用例を有している。これは全体的に使用できる字種数が減少（制限された）したためその分の用例が残りの字種に詰め込まれたとも捉えよう。

次に止め字枠の縮小も見られる。前半のトップテンに 4 字種とトップファイブに 6 字種に対し、後半はトップテン 3 字種とトップファイブに 4 字種へと減少傾向にあった。特に際だったのは 8 位だった「江」がまさかの圏外だった。しかし既に触れたように、「子」以外の所謂潜在的止め字枠の字種は、漢字字種だけを見ても、それが止め字であるかいなかは判明できない。顕在止め字である「子」の変動方向に反しているなら、止め字でない部分の使用率の増加によってもたらされた「虚像」である可能性は否定できない。

なお、前半の止め字枠を除いた後の上位 10 字種の内、「千・由・久」3 字が後半においてキープされ、他の字種は交代された。人気字種の入れ替わりが伺える。

3．2．3．2　時代別女性名の漢字 1 文字目の上位 30 字種の比較

下記表 3-11 は 1 文字目の場合の比較である。

番号	昭和前半			昭和後半	
	字種	調整値	字数	字種	字数
1	美	51	45	美	75
2	和	34	30	真	51
3	恵	21	19	由	32
4	千	20	18	恵	25
5	明	17	15	裕	23
6	幸	17	15	千	22
7	久	15	13	久	20
8	由	15	13	直	19
9	陽	15	13	和	15
10	洋	14	12	洋	12
11	喜	11	10	京	11
12	郁	10	9	祐	11
13	道	10	9	陽	11
14	雅	10	9	麻	11
15	真	10	9	香	10
16	文	9	8	有	10
17	悦	9	8	明	10
18	愛	9	8	奈	10
19	康	9	8	佳	10
20	裕	8	7	純	10
21	節	8	7	雅	9
22	芳	8	7	亜	9

番号	昭和前半			昭和後半	
	字種	調整値	字数	字種	字数
23	栄	8	7	貴	8
24	昌	8	7	慶	8
25	信	7	6	理	8
26	正	7	6	友	7
27	瑞	7	6	啓	7
28	京	7	6	順	7
29	光	7	6	里	7
30	弘	7	6	愛	7

表 3-11 **昭和の漢字名 1 文字目字種上位 30 の比較**

例えば「美」が首位で、「恵」も上位に付くなど（「え」でなく、「めぐみ」として）表 3-11 は表 3-5 に似た部分がある。「美」は「子」が現れない 1 文字目なら時代と関係なく 1 位に付くことは明らかである。「美」は 1 文字目に限れば「恵」と同様に止め字ではないが読みの面では止め字である場合と同じ音をする点において大きく異なる。

1 文字目は 1 文字名を含めて名根の含有率は後部の順位に比べて断然高い。故にこの部位の字種の変化は人名の全体的な字種変化とも捉える。表 3-11 の前半の 30 字の内、17 字種が後半に見られず入れ替わっている。過半数の主用字種の入れ替わりは命名者の価値観や考え方の変化と、人名の構造そのものの変化の両方が考えられるが両方の相乗作用か一方的な単独作用かについては今の段階ではまだ定かではない。

3．2．3．3　時代別女性名の漢字 2 文字目の上位 30 字種の比較

表 3-12 は 2 文字目の上位 30 字種のデータを示すものである。

番号	昭和前半	昭和後半

	字種	調整値	字数	字種	字数
1	子	579	514	子	362
2	美	55	49	美	92
3	代	29	26	代	28
4	枝	25	22	紀	25
5	恵	19	17	恵	21
6	江	18	16	理	20
7	智	10	9	枝	17
8	紀	9	8	奈	15
9	和	8	7	里	15
10	生	8	7	香	15
11	奈	7	6	由	12
12	里	7	6	穂	9
13	佐	6	5	知	9
14	由	5	4	美	8
15	穂	5	4	貴	8
16	利	5	4	智	8
17	理	5	4	江	8
18	世	5	4	弓	7
19	都	5	4	希	6
20	合	5	4	衣	6
21	矢	3	3	世	6
22	栄	3	3	苗	5
23	貴	3	3	寿	5
24	根	3	3	緒	5

番号	昭和前半			昭和後半	
	字種	調整値	字数	字種	字数
25	津	3	3	保	5
26	鶴	3	3	佐	5
27	重	3	3	津	4
28	海	3	3	織	4
29	久	3	3	佳	4
30	葉	2	2	生	4

表 3-12　昭和の漢字名 2 文字目字種上位 30 の比較

まず、この部位には 2 文字名の末尾文字が多いので止め字の含有率は高いと考えられよう。止め字枠の各字種を具体的に確認した所、同じ止め字枠にありながら変動はバラつきが見える。首位の「子」は 4 割減でシェア縮小が鮮明で、2 位の「美」は逆に 4 割増の伸びに新字種「実」までランクインしている。3 位の「代」は横ばいを見せ第 2 字種の「世」も同じ傾向にあった。最後の「えグループ」は全体的に下降気味で「栄、重」など元より用例の少ない字種はついに圏外まで落ちている。　字種の入れ替わりは半分の 15 字種で、1 文字目より少ないがこれは止め字が多いゆえの安定感だと考えられる。

3．2．3．4　時代別女性名の漢字 3 文字目の上位字種の比較

3 文字目は昭和前半、後半共に字種数が少なかったため、表 3-13 に全字種を並べた。

番号	昭和前半			昭和後半	
	字種	調整値	字数	字種	字数
1	子	244	217	子	193
2	美	8	7	美	20

番号	昭和前半			昭和後半	
	字種	調整値	字数	字種	字数
3	江	2	2	里	7
4	代	2	2	恵	5
5	栄	1	1	枝	3
6	合	1	1	紀	2
7	恵	1	1	奈	2
8	香	1	1	代	2
9	勢	1	1	江	2
10	女	1	1	美	1
11	乃	1	1	理	1
12	-	-	-	為	1
13	-	-	-	絵	1
14	-	-	-	香	1
15	-	-	-	合	1

表 3-13　昭和の漢字名 3 文字目の上位字種の比較

3 文字目は全数人名の末尾に当たるので止め字の含有率は 2 文字目よりも一段と高いと考えられる。特に昭和前半において首位の「子」は絶対的な存在感を示した。これに続く字種も止め字枠ばかりである。一方、後半に入ると、全体的な構図に変わりはないものの「子」の比率が若干下がり、他の字種は種類的にも用例数的にも微増が見られる。

なお、止め字枠の中でも「美」「絵」など新字種が確認できた。そして前半と異なり上位は止め字枠に独占される状態が破られ、以前、止め字枠とされていなかった「里」「紀」「奈」などの新しい人気字種が 3 文字目の末尾で勢力を伸ばした。勿論、これらの字種は旧来の止め字と似た性格で所謂新参止め字なのか、それとも全く違う性格を持つ「新興勢力」なのかはこれからの調査を通じ

て、その全貌が徐々に解明されるのであろう。

3．2．3．5　昭和前半と後半の漢字名字種上位 30 のまとめ

以上、当用漢字による人名表記に対する制限の発生を境目に昭和前半と後半の漢字字種の変化を比較してきた。少々残念なのは予想通りの結果が得られなかったことである。勿論制限の影響は認められ、字種の減少と上位字種への用例の集中というのが予想通り観察できたものの、人名、少なくとも女性名に限ってはその影響は決して強くはなかった。部位別に具体的に見ると全体の字種数の減少は 1 文字目に集中している。2 文字目と 3 文字目は実際に微増さえ見えた。

具体的な字種とその用例数の変化を考察するため昭和前半と後半の全字種及び各部位の上位 30 の比較も実施したところ、全字種の表 3-10 では 19 字種が残り、11 字種は交代した。これだけを見れば人気字種の入れ替わりは然程激しくはなかったとも思わるれるが、部位別で具体的に確認すれば 1 文字目の字種（名根が多い）の入れ替わりは全体と比べて多く 17 字種に達している。これに対し、止め字が多い 2 文字目の入れ替わり字種は 15 字種に留まり、一見微差しかなかったが止め字枠の比較も考慮すれば実は大差だった。1 文字目の表 3-11 に「美」と「恵」はあったものの「恵」は全く違う読みだったので、止め字として認めることはできない。部位的に考えると「美」も止め字とは認めがたいが、読みが同じために仮に止め字枠に振る。結果的に入れ替わりが無かったのは 12 字となる。一方、2 文字目の表 3-12 に止め字 9 字（内 2 字が後半でアウト）もあり非止め字の字種で入れ替わりが無かったのは実は 8 字しかない。

最後に、一つの傾向性が見られた。止め字のバリエーションが増加傾向にあったことである。昭和前半には殆ど見られなかった「美」の新字種「実」が表 3-12、表 3-13 の何れにもランクインした。

3．2．4　女性名特有の仮名名枠

このセクションでは男性名に殆ど存在しない女性特有の仮名名枠について検討しつつ片仮名と平仮名の時代変化による消長についても論究してゆきたい。

3．2．4．1　女性名の表記の仮名字種

仮名名は女性名の総数の約 1 割程度を占めている。これは男性名と比べ独特な現象であるため、その様相を明らかにすべく全字種のランキングから抽出して単独に表 3-14 を作成した。

順位	字種	例数	順位	字種	例数	順位	字種	例数
1	み	58	8	る	15	15	お	12
2	り	53	9	い	15	16	ひ	12
3	か	24	10	ど	14	17	な	11
4	さ	19	11	リ	14	18	き	11
5	ま	18	12	え	14	19	ち	11
6	ゆ	18	13	あ	13	20	エ	9
7	ミ	17	14	の	12	21	つ	9

表 3-14　女性名の表記の仮名字種上位 21

このセクションでの考察は表記に焦点を当てているので、敢えて片仮名と平仮名をそれぞれ独立したものとして扱った。3.2.1 における延べ字数の集計に反映された通り、ランクインしたのは片仮名より平仮名が多かった。なお止め字枠として 1 位に「み」、7 位に「ミ」、12 位に「え」、20 位に「エ」が就いた。「み」は 1 位だったものの 2 位の「り」とは僅差であった。仮名のランキングを見る限り止め字枠は漢字の場合のように振るわず、突出した存在感を示さなかった。これは表 3-4 との決定的な違いだと言えよう。これは漢字女性名と仮名女性名の違いを鮮烈に訴える結果となっているが、その原因については幾つかの仮説が考えられる。

（1）そもそも、漢字女性名と仮名女性名は違う種類（系統）のものである。
（2）今までの「止め字」に対する認識に欠陥があった。若しくはその定義に修正が必要とする。

（3）上記の要因の複合的な作用、若しくは現段階判明されていない要因の影響か。

3．2．4．2　女性名の表記の仮名字種　漢字仮名混種名

実はここまでの分析で取り上げていなかった人名のタイプがあり、その性格によって表 3-14 に影響を及ぼした可能性が十分考えられる。田原（2008）が 2.2.2.3 で既に報告しているように、女性名には漢字名でもなく仮名名でもなく、2 種類の表記が混在する、所謂混種型が存在している（例、「すみ江」「エミ子」）。本稿のデータベースからも漢字仮名混種名が 74 例確認された。用例数及び構成構造上の特徴などを総合的に判断した上、この種の人名を仮名名の枠内で検討することとした。

漢字仮名混種名の特徴として、以下の点が挙げられる。

（1）全用例は 3 モーラ（表記とも）名である。「仮名＋仮名+漢字」の構造を持つ。

（2）3 モーラ目の漢字は 1 例を除いて残り全て止め字である。その内訳は、「子」66 例、「美」3 例、「代」2 例、「絵・江」2 例、「紀」1 例

（3）「平仮名+漢字」（56 例）と「片仮名+漢字」（18 例）の二つのグループには時代差が存在する。終戦前後を基点で見れば前者の分布は戦前と戦後の差は大きくなかったのに対し、後者の 9 割が戦前に集中している。

特徴の（1）と（2）を総合的に見れば止め字とその前部要素とは字種の違いまで許容されることが分かる。この結果は止め字が前部要素との結合関係は極めて希薄で緊密性に欠いていることを示す重要な証拠の一つだと捉えられる。そして「子」が突出して多かったことは、他の止め字に比べて上述の結合関係が一層希薄である可能性を示唆している。一方、前部要素の 2 モーラの仮名は、必ず平仮名か片仮名で統一され、同じ仮名範疇内での字種の混用も完全拒否される。この結合の緊密さは前部要素の 2 モーラを常に全体視する必要性を示している。特徴の（3）については日本語の表記システムが大きく関わったと考えられ、所謂国語国字問題も絡んでいる。そもそも仮名名（ここでは前部要素に相当する）は人名の読みをそのまま表記にしたものであり、元より表記に強いこだわりを持っていたら漢字を選んだはずである。つまり音声が重要視され

た（或いは漢字に無関心）結果、社会的な書写慣習に委ねる形で表記されたのであろう。戦前の公文書は「漢字片仮名交じり文」であったため、戸籍なども漢字でない場合、本人の強い申し出がなければ仮名イコール片仮名に記されたと考えられる。以上の推定は片仮名の場合の説明に矛盾はないが、平仮名の説明にはならない。ここからは筆者の推測だが、戦後の表記システムは「漢字平仮名まじり文」へと切り替えられたので無漢字の場合、平仮名とされたのは特に不自然さを感じない。問題なのは戦前の平仮名の解釈である。筆者は戦後の表記システムへの乗り換えだと考えているが現段階では裏付ける証拠はないゆえ、仮説に留めるしかない。

なお、この混種型女性名の考察結果は表 3-14 が表 3-4 と違って、止め字が上位を独占しなかった状況の発生原因だと解釈できそうである。つまりこの混種型の前部の仮名の部分は表 3-14 の集計に入ったものの、後部の止め字である漢字の部分が弾けだされたため、全体的に仮名表記の止め字の割合が抑えられた結果となった。次に全仮名名の分析に移る。

3．2．4．3　女性名の表記の仮名字種　仮名名

仮名名の総数は 170 例である。2 モーラ名は合計 62 例で、その内訳は平仮名名 34（54.84%）例、片仮名名 27（43.55%）例、混種名 1（1.61%）例[80]で、3 モーラ名は合計 108 例でその内訳は、平仮名名 94（87.04%）例、片仮名名 14（12.96%）例となっている。

2 モーラ名の平仮名と片仮名のそれぞれの割合には大差が見られない。2 モーラの平仮名名の内、戦前と戦後の分布は 21 例対 13 例、片仮名名の場合 24 例対 3 例で、何れも戦前の方が優勢である。この分布傾向は 3.2.4.2 の漢字仮名混種名と極めて類似している。一方、3 モーラ名の場合平仮名名は 24 例対 70 例、片仮名名は 10 例対 4 例で、異なった傾向性を示した。まとめると 2 モーラ名・片仮名名は戦前的で 3 モーラ名・平仮名名は戦後的だと言えよう。

下記表 3-15 は 2 モーラ名と 3 モーラ名の平仮名名及び片仮名名に分けて最終モーラのランキングを示すものである。まず止め字枠が全く存在感を示さな

[80]通常考えられない現象ではあるが、筆者の作業ミスではなく、原データ及びその他のルートで確認したが、間違いなく「ミつ」であった。

かったのはこれまでの考察では極めてまれな現象だと言える。次に、「り・リ」、特に平仮名枠においての優勢が目立つ。この他用例数の制限で用例の多くはイ段とエ段に属すこと以外の特徴は検出できなかった。

2モーラ平		2モーラ片		3モーラ平		3モーラ片	
り	6	ミ	5	り	30	エ	5
い	4	リ	3	み	21	コ	3
え	3	キ	3	か	5	ヱ	2
ゑ	2	サ	3	え	5	リ	2
み	2	ノ	1	き	5	カ	1
か	2	ヅ	1	さ	4	ミ	1
き	2	マ	1	る	4	―	―
し	2	ク	1	ぶ	4	―	―
ふ	1	ネ	1	こ	4	―	―
が	1	エ	1	ゑ	2	―	―
ぶ	1	ホ	1	な	2	―	―
よ	1	カ	1	お	1	―	―
く	1	ウ	1	れ	1	―	―
の	1	イ	1	ち	1	―	―
ろ	1	ロ	1	や	1	―	―
つ	1	ジ	1	ろ	1	―	―
ん	1	ス	1	ら	1	―	―
で	1	―	―	い	1	―	―
な	1	―	―	ひ	1	―	―

表 3-15　仮名女性名の最終モーラのランキング表

3．2．5　女性名の表記のまとめ

この節での考察を通して、幾つかの重要結論が得られた。

まず、止め字に関して従来の認識を根本から覆す調査結果が示された。「えグループ、美、代」といった止め字については女性名を対象とした先行研究で必

ずとも言っていいほど言及されるが、今回の考察結果では従来の止め字の定義に当てはまらなかった。本稿では暫定的に「潜在的止め字」と分類して、止め字枠に存続させたがこれからの調査では、更に否定的な結果が現るかもしれない。一方、同じ止め字枠の「子」はあらゆる定義を満たして止め字として唯一「顕在止め字」と称すことができた。恐らくこれからの調査でもこの結果が変わることはないのであろう。

次に理論上、当用漢字による人名の表記に対する制限が原因でその施行の前後の人名の字種に大きな変化が生じることは想像しうる。しかし実際の考察の結果、女性名においては元より字種数が少ないせいか、受けた影響は極めて限定的なものだと判明した。一方、名前の文字数と名前における部位の違いによって字種の使用傾向が違ってくることは明らかである。

3．3　女性名のモーラ

本節では女性名の読みをモーラ単位で調査する。3.2 節にて表記について見てきたが多くの漢字に複数の読みを有するため、漢字の字種だけによる調査は時にその影響で撹乱される。例えば「恵」は 1 文字名では「めぐみ」、2 文字名の 1 文字目では「けい 3 文字名の 1 文字目では「え」と読むように[81]、同じ字種であっても違った読みをする事例は多々ある。従って読みに焦点を当てた考察はそれを補完する役割を果たすことが期待できる。

そもそも女性名の場合、男性名と違って音自体が表記より重要視される傾向にあった。つまりモーラに対する考察は女性名にとって表記の考察以上に女性名の実像にアプローチする手がかりなのである。

3．3．1　女性名のモーラ　基本データ

まず、女性名の全体のモーラ使用数を下の表 3-16 にまとめ、表は五十音図に模した。濁音は対応する清音の下に拗音は直音部分の下部にしたが、全く用例のない行は省くこととした。用例数の多いモーラ（仮名字種）を強調し、直観性を高めるため最大で 5 種類（ランク）の網掛けを施している[82]。なお基本

[81] この例について、全ての用例に当てはまるわけではないが、大多数はそうである。
[82] 順に、（行数の制限で用例を示す図は次のページに）

的に 1 ランクに付き 5 種類に使用するような計算としているが、各ランクは定額制ではなく表一つ一つの実際の分布状況に応じて付するようにしている。

例えば表 3-16 では、ランク 1 は「こ」だけに付したがその基準は用例「1000 台」となる。ランク 2 は「み」だけに付したがその基準は「500 台」である。以下、「200 台」「100」となっており以降、3.3 と 4.3 節の網かけは全てこのルールに従って行っている。

あ	173	い	219	う	179	え	276	お	71
か	199	き	233	く	69	け	80	こ	1,547
が	4	ぎ	8	ぐ	6	げ	6	ご	
さ	201	し	126	す	82	せ	25	そ	7
ざ		じ	8	ず	108	ぜ		ぞ	
た	66	ち	157	つ	116	て	22	と	118
だ	7	ぢ		づ	20	で	17	ど	24
な	132	に	13	ぬ	6	ね	22	の	69
は	46	ひ	104	ふ	60	へ		ほ	26
ば	4	び	1	ぶ	29	べ		ぼ	
ま	190	み	547	む	2	め	12	も	66
や	80			ゆ	191			よ	247
ら	7	り	212	る	75	れ	35	ろ	52
わ	14	ゐ				ゑ	1	を	1
								ん	49
きゃ				きゅ				きょ	32
しゃ				しゅ	1			しょ	6
じゃ				じゅ	34			じょ	

1　2　3　4　5

ちゃ				ちゅ				ちょ	1
りゃ				りゅ	1			りょ	16

表 3-16　女性名の全モーラの分布図

表 3-16 で、「こ」は 1,547 例で 1 位を占める。2 位の「み」は 547 例で「子」の三分の一程度しか及びなかった。以下、ランク 3 は「い段」に最も集中し 3 モーラあった。ランク 4 は「あ段」、最も不人気な「え段」では「え」しか上位に入れなかった。行として一番多くの上位モーラを集めたのは「あ行」で、「あ、い、う、え」の 4 種類があった。

なお、濁音枠は用例数が 1 桁に留まるモーラも少なからず好まれていないことは明白である。その一番多い用例数を有するのは「ず」の 108 例である。

拗音枠は全体的に使用率が更に低く実績が認められるのは「きょ」32 例、「じゅ」34 例、「りょ」16 例に限っている。

表記の場合と同様、モーラの使用傾向は部位別によって差別化できると考え、以下 3.3.1.1 から部位別の考察を行う。

3．3．1．1　女性名のモーラ　1 モーラ目

全女性名の 1 モーラ目に当たるモーラを抽出して作成したのが下記表 3-17 である。

あ	169	い	33	う	4	え	73	お	3
か	118	き	60	く	37	け	73	こ	12
が		ぎ	1	ぐ		げ		ご	
さ	77	し	36	す	35	せ	22	そ	6
た	60	ち	66	つ	9	て	22	と	89
な	72	に		ぬ	1	ね	1	の	49
は	44	ひ	103	ふ	59	へ		ほ	2
ば		び	1	ぶ		べ		ぼ	
ま	171	み	235	む	2	め	8	も	19

や	44			ゆ	141			よ	140
ら	3	り	33	る	15	れ	32	ろ	
わ	2	ゐ				ゑ		を	
きゃ				きゅ				きょ	32
しゃ				しゅ	1			しょ	6
じゃ				じゅ	33			じょ	
ちゃ				ちゅ				ちょ	1
りゃ				りゅ	1			りょ	16

表 3-17　女性名の 1 モーラ目の分布図

まず「あ段」に多くの上位モーラが集まったことは明らかである。これに「い段」が続き「う段」が最少である。次にやはり濁音は語頭に立たないルールが効いたようで濁音枠には「び」1 例しか現れなかった。しかしラ行音は用例数が多くはなかったものの、四つのモーラに用例があった。最後に拗音枠はほぼ全てがこの部位に集中していることが大きな特徴だと言える。

また、止め字の読みとされる「え」「み」が上位に入っていることは第 3 章における表記の考察結果を裏付けるものだと捉えられるが「代」は表記の時に上位に入らなかった。つまりこのセクションの「よ」は「代」でなく、別の何かの可能性が大きい。これを解明するには表記と読みを両方とも駆使して照合する作業が必要とする。今回は見送りとしたが、場を改めて行う予定である。

3．3．1．2　女性名のモーラ　2 モーラ目

全女性名の 2 モーラ目に当たる用例数を示したのが表 3-18 である。

あ	4	い	179	う	175	え	75	お	61
か	62	き	147	く	32	け	7	こ	3
が	4	ぎ	6	ぐ	6	げ	6	ご	

さ	118	し	90	す	47	せ		そ	1
ざ		じ	8	ず	105	ぜ		ぞ	
た	6	ち	90	つ	107	て		と	24
だ	7	ぢ		づ	20	で	17	ど	24
な	49	に	13	ぬ	4	ね	19	の	16
は	2	ひ	1	ふ	1	へ		ほ	20
ば	1	び		ぶ	22	べ		ぼ	
ま	19	み	186	む		め	2	も	47
や	35			ゆ	50			よ	71
ら	2	り	120	る	48	れ	1	ろ	51
わ	12	ゐ				ゑ		を	1
								ん	47

表 3-18　女性名の 2 モーラ目の分布図

2 モーラ目は「い段」と「母音行」に用例数の多いモーラが集まっている。「え段」は「え」だけのランクインとなっており、続いて語中語尾に当たる当該部位では語頭音の制約が解かれて濁音が広く見られたが、「ず」の 105 例を最多に決して多用される感はない。「ら行」音はそこそこの増が観察できたが拗音はなかった。

「え」「み」「よ」もまた揃ってランクインした。どうやら、音の面から見てもこれらのモーラが「止め音」とすることは無理があるようである。

3．3．1．3　女性名のモーラ　3 モーラ目

下記表 3-19 は女性名の 3 モーラ目の集計となる。表記の場合と違い 3 モーラの 2 文字名の最終モーラが含まれている。

あ		い	7	う		え	128	お	7

か	19	き	26	く		け		こ	1,527
さ	6	し		す		せ	3	そ	
ざ		じ		ず	3	ぜ		ぞ	
た		ち	1	つ		て		**と**	5
な	11	に		ぬ	1	ね	2	**の**	4
は		ひ		ふ		へ		ほ	4
ば	3	び		**ぶ**	7	べ		ぼ	
ま		み	126	む		め	2	も	
や	1			ゆ				よ	36
ら	2	り	59	る	12	れ	2	ろ	1
わ		ゐ				ゑ	1	を	
								ん	1
じゃ				じゅ	1			じょ	

表 3-19　女性名の 3 モーラ目の分布図

まず、3 モーラ目においての「こ」の圧倒的な存在感は言うまでもない。2 位は「え」3 位は「み」で、4 位は以外にも止め字枠のはずの「よ」ではなく、「り」であった。「こ」を除けば「い段」は一番上位字種を集めた段で全体的にモーラの種類自体が激減している。次に、拗音枠は濁拗音の「じゅ」の 1 例のみでしかも「あんじゅ」という外国風の名前だった。つまり 3 モーラ目にも原則として、拗音は使わない。

4 モーラの女性名はほんの僅かしか存しないため、この部位のモーラはほぼ全て最終モーラに当たる。「こ」「え」「み」確かに再上位に就いたが「よ」は「り」に締め出された結果は興味深かった。「り」は今まで未発見だった止め字の仲間なのか、それとも、ただの偶然なのか。止め字が優位に立つはずのこの部位だけに、「り」より用例が少なかった「よ」は止め字と呼べるのか。この疑問はやはりモーラだけの考察ではどうにも解明できそうはないので課題として保留す

ることとする。

3．3．2　段別で見る女性名のモーラ

3.3.1 にて女性名のモーラの分布を調べた。このセクションではその補助調査として、仮名の五つの段に焦点を当てて考察して見てみたい。まず全体の合計値と部位別の集計を表 3-20、表 3-21、表 3-22、表 3-23 に示した。

清音	濁音	拗音	濁拗音	⇔	清音	濁音	拗音	濁拗音
1,108	15	0	0	あ段	760	0	0	0
1,611	17			い段	566	2		
780	163	2	34	う段	303	0	2	33
473	23			え段	231	0		
2,204	24	55	0	お段	320	0	55	0

表 3-20　段別全モーラ　　表 3-21　段別 1 モーラ目

清音	濁音	拗音	濁拗音	⇔	清音	濁音	拗音	濁拗音
309	12	0	0	あ段	39	3	0	0
826	14			い段	219	0		
464	153	0	0	う段	13	10	0	1
104	23			え段	138	0		
295	24	0	0	お段	1,584	0	0	0

表 3-22　段別 2 モーラ目　　表 3-23　段別 3 モーラ目

全体的に 1,500 以上の「こ」を持つ「お段」は当然用例数が最も多い。「こ」を除けば「い段」が首位にのし上がる。濁音枠では「う段」が圧倒的な 1 位である。この他拗音枠は「お段」で、濁拗音枠は「う段」と明白な役割分担が見てとれる。

部位的に見るとまず、1 モーラ目は「あ段」が首位となり、い段」がそれに次ぐ。濁音はほぼないと言える。一方、ほぼ全ての拗音（お段）と濁拗音（う段）がこの 1 モーラ目に集中し全体的に見た役割分担は更に具体的な部位にあって明確化された。興味深いのは女性名の起首に濁音が立たないルールは順守されているものの、濁拗音は全くその制約を受けていないどころか、寧ろ、積極的に使用される印象を受けたことである。

次に 2 モーラ目は「い段」が首位となり「う段」が 2 位であった。濁音は「お段」に集中し、実際に殆どの濁音はこの 2 モーラ目にあったのに対し拗音と濁拗音は皆無であった。

続いて 3 モーラ目は当然「お段」が最多で「い段」がこれに次ぐ。濁音は少量ながら存する。しかも具体的に確認すると、その内訳は「ふたば」3 例、「みすず」3 例、「しのぶ」7 例であった。言わば熟語または単純語の最終モーラに当たり「作られた」のではなく、「選ばれた」形で人名の音の構成要素となったことが共通点だと言える。つまり女性名の末尾は濁音を完全拒絶とまでしないものの、決して、好まれる音ではない。また 2 モーラ目と同様拗音はなかった。濁拗音は 1 例あったが例の外国風名「あんじゅ」の「じゅ」であり、通常なら、ありえないと考えられよう。

3．3．3　行別で見る女性名のモーラ

3.3.2 の段別調査に続いて女性名のモーラを行別にまとめたのが表 3-24 である。分布の有無を直観で把握させるため、敢えて用例のない行を空欄のまま残しておいた。

	全モーラ	1 モーラ目	2 モーラ目	3 モーラ目
あ行	918	282	494	142
か行	2,128	300	251	1,572
さ行	441	176	256	9
た行	479	246	227	6

	全モーラ	1モーラ目	2モーラ目	3モーラ目
な行	242	123	101	18
は行	236	208	24	4
ま行	817	435	254	128
や行	518	325	156	37
ら行	381	83	222	76
わ行	16	2	13	1
きゃ行	32	32	0	0
しゃ行	7	7	0	0
ちゃ行	1	1	0	0
にゃ行	0	0	0	0
ひゃ行	0	0	0	0
みゃ行	0	0	0	0
りゃ行	17	17	0	0
が行濁	24	1	22	0
ざ行濁	116	0	113	3
だ行濁	68	0	68	0
ば行濁	34	1	23	10
ぱ行半濁	0	0	0	0
ぎゃ行濁拗	0	0	0	0
じゃ行濁拗	34	33	0	1
びゃ行濁拗	0	0	0	0
ぴゃ行半濁拗	0	0	0	0

表 3-24　女性名のモーラの行別集計

まず、全体として、「か行」は 2,000 以上のモーラが使用されたがその内、四

分の三は「こ」である。2 位は 918 モーラの「あ行」で 3 位は 817 モーラの「ま行」そして「こ」を除いた「か行」と「や行」が続く。上述の段は母音を表すのにに対し、行は子音の使用傾向を反映し拗音枠では主に「きゃ行」と「りゃ行」に用例が集中している。また全濁音枠に用例が見られたが「ざ行」が突出に多く濁拗音は全て「じゃ行」にあることが判明した。子音/p/は直音、拗音を問わず使用実績は確認できていない。

部位的に見ると 1 モーラ目は全体的な傾向に似ているが、語頭に濁音が立たないルールの影響で濁音は 2 例しかない。2 モーラ目は「あ行」が首位を占めた。他の行には用例数が比較的に平均的に分布し「は行」だけ用例が極端に少なかった。前述のように、拗音と拗濁音はなく濁音は全体的な傾向そのものとなる。3 モーラ目は「こ」の影響で「か行」は他の行に大差を付けて躍り出る存在だった。「あ行」と「ま行」はこれに次いでまさに全体の場合の上位の構図と似ており清音以外の濁音、拗音、拗濁音は何れも好まれないことは明らかである。

3．3．4　女性名のモーラのまとめ

以上、女性名を成す一つ一つのモーラを清音、濁音、拗音、濁拗音に分けてその使用状況を個別的に考察し、子音と母音の好みについて段と行に焦点を当てて調査した所、女性名において清音所謂五十音図枠と濁音、拗音、濁拗音のそれぞれの使用傾向に大差があることが明らかになった。

また本節の考察内容は田籠博（2005a）と重なる部分があった。例えば、田籠博（2005a）で語頭音に対する考察は本稿において 1 モーラ目に相当する。例を挙げると行別の考察で上位の行は

田籠　ま行 424　あ行 362　や行 310　か行 194
本稿　ま行 435　や行 325　か行 300　あ行 282

と極めて近い数値だった。一つ注目すべき点は、田籠（2005a）のサンプルが狭い時間帯に集中しているためその時間帯の人名の特徴しか反映していない欠点があるものの、密度が高い分精確さに長ける。一方、本稿は時間的に幅を広

く持つ分密度が希薄になり、精確さが懸念視される面があった。今、上述のような類似性の高い結果に別々に辿り着いたことはこの結果は高い普遍性を有していると言えるのではないだろうか。以上のような一致した結論は多くあったが、列挙を省く。

最後にモーラの観点から見た止め字枠についてまとめよう。止め字の本質は人名の末尾に多く現れるのが前提ではあるがそれだけではない。つまり、人名の末尾以外の部位にも多く現れればただ全般的に好まれている字だったのではないかという疑問を感じかねない。表記の考察では「子」以外の所謂止め字はまさにこういう状態だった。しかしその場で断っておいた通り、1 文字目の「恵＝けい」のような別の読みによるランクインも否定できないため、結論付けは一旦見送り、本章にて音の反映であるモーラの考察にそれを留意してきた所、結局ほぼ表記と同じく高いランクを得ている。この結果は完全なる証明とまで言わないがこれらの止め字に対する否定的な証拠に違いない。

第四章　男性名について

男性名は文字数やモーラ数の何れの面においても、女性名より多く且つ複雑である。しかも文化的視点から見ても、歴史上存在していた系統が多かったため、必然的にその系統ごとの特有の特徴が表記や読みに反映されるのであろう。加えて先行研究の累積も少なく、具体的にどのような考察項目を設けるかも模索しながら考えなければならない。ついては本章の男性名の考察は本稿にとって、一番の重点であり同時に最大の難所でもある。注意を払って、進めていきたい。

4．1　男性の名前の表記と読みの基礎データ

男性名の全データ数は 21,453 件でその内訳は表記ベースでは 1 文字名が 4,196 件（19.56%）、2 文字名が 15,445 件（71.99%）、3 文字名が 1,774 件（8.27%）、4 文字名が 34 件（0.08%）、5 文字名が 4 件（0.02%）であり、一方モーラ数ベースでは 2 モーラ名が 480 件（2.24%）、3 モーラ名が 10,864 件（50.64%）、4 モーラ名が 8743 件（40.75%）、5 モーラ名が 890 件（4.15%）、6 モーラ名が 473 件（2.20%）、7 モーラ名が 2 件（0.01%）、8 モーラ名が 1 件（0.00%）となっている。

男性名の表記の文字数の範囲が 5 文字に広がったにもかかわらず、2 文字名の比率は女性名のを凌ぐほど七割以上の集中ぶりであった。1 文字名がこれに続いて 2 割を占め 3 文字名が 1 割弱を保っている。4 文字名と 5 文字名も収録されていたが「〇〇左（右）衛門」「〇〇兵衛」のようなものが多く、殆どは明治時代の人名で大正から昭和前期にかけて次第に減少し、終戦後はすっかり途絶えた[83]。他方モーラ数の範囲はより広く 8 モーラまで達しているが仔細を確認すれば 3 モーラ名が最多で半分を占め、4 モーラ名は 4 割でそれを追う。2 モーラ、5 モーラ、6 モーラ名は合わせて 1 割で 7 モーラと 8 モーラ名は実は数例しか存しなかった。

上記の集計結果で示された 3 モーラの男性名が 4 モーラのより多かったこと

[83]戦後に漢字なしで4モーラの仮名名が1例あった。集計で計上されたが、考察において、他の漢字名から外した。

は 2.7 の田籠（2005a）の表 3-8 が示した 4 モーラ男性名が最多という結論に相反した。そもそも 2.7 にて既に指摘していたように、このような集計は「異なり語数」ではなく「延べ語数」で計上すべきである。無作為で集められた人名の一つ一つ全員に己の特徴を主張する権利があるはずではないか。例えるなら選挙とよく似ている。選挙で投票者の名前が同じを理由に同一候補者に入れた票を一票に見なすはずがないよう、名前が同じであろうとその全員の特徴を集計に反映させるべきだ。

男性名の表記に用いられる文字数（旧字体、仮名、踊り字を含む）は合計 40,564 字で一つの男性名に付き平均 1.89 文字が使用されており全字種は 1,232 種類で、一字種の平均使用回数が 32.93 回の計算となっている。表記の部位別の文字数と字種数の集計は下記表 4-1 が示す通りである。

	文字数	字種数	1 字種平均使用回数
全表記	40,564	1,232	32.93
1 字目	21,453	1,047	20.49
2 字目	17,257	644	26.80
3 字目	1,812	101	17.94
4 字目	38	6	6.33
5 字目	4	2	2.00

表 4-1　男性名の文字数と字種数

2 万件以上の男性名イコール 4 万あまりの漢字を分析して、得られた字種は 1,200 程度しかなかった。結局、表記に対して当用漢字による制限が設けられた前の時代の人名を多く収録した当データベースであればより多くの字種が収録されるとの予想を覆して、人名に用いる漢字のバリエーションの少なさを示唆した結果となった。また表 4-1 を詳しく見ると、1 字目と 2 字目の文字数に大差がないのに対し字種数の開きが際だつ。これはやはり女性名と同様、使用回数の極めて高い字種の存在が伺えよう。構造的に考えると止め字しか考えられない。他方、止め字を持てない 2 割を占めする 1 文字名の存在を考えれば、

1 字目の平均使用回数が低めの状況に納得されるが 3 字目のこれを下回る平均使用回数は少々不可解に思われる。その原因は表記と読みの対応の節で突き止めたい。なお、一つの男性名に使用された文字数（表記）は女性より少ないが近似値は同じく 2 文字であった。

男性名の読みに用いられるモーラ数（長音、撥音、促音を含む）は合計 75,834 モーラで一つの男性名に付き、平均 3.53 モーラが使用されている。部位別のモーラ数とモーラの種類の集計は下記表 4-2 が示す通りである。

	モーラ数	モーラ種数	1 モーラ平均使用回数
全モーラ数	75,834	84	902.79
1 モーラ目	21,453	75	286.04
2 モーラ目	21,453	69	310.91
3 モーラ目	20,973	78	268.88
4 モーラ目	10,109	39	259.21
5 モーラ目	1,366	15	91.07
6 モーラ目	476	8	59.50
7 モーラ目	3	3	1.00
8 モーラ目	1	1	1.00

表 4-2　男性名のモーラ数と仮名種類数

まず、一つの男性名に使用されたモーラ数は 3.53 モーラという数値を本節の冒頭に紹介した男性名の文字数別の内訳と合わせて考えれば、3 モーラ・4 モーラの男性名は同等のシャアを均衡的に有していることが分かる。これもまた、2.7 の田籠（2005a）の「男性名の語長は 4 モーラだ」という主張に対する再否定である。具体的に表 4-2 を見れば 1 モーラ目と 3 モーラ目の仮名種類はほぼ同じで、2 モーラ目はこれらに僅差で続く。一方 4 モーラ目のトータルモーラ数は 1 と 2 と 3 と比べて半減したが仮名種類も丁度半分程度に減っている。つまり、1 種類のモーラの平均使用回数でも確認できるように上位の 3 部位と同じ枠で論じることがである。ところがこの 4 部位の数値を止め字の観点から見

ればいささか理解しがたい状況が生じる。3 モーラ目と 4 モーラ目のモーラ種類は通常なら止め字が多く含まれると想像しうるため、1 モーラ目と 2 モーラ目と比べて少なめとなるはずだ。しかし表 4-2 をみる限り顕著な差が殆ど見られない。このような状況をもたらした可能性として以下のような原因が考えられよう。

①3 モーラ目と 4 モーラ目にある男性名の止め字は女性のと違い、種類が多く、より分散している。
②1 モーラ目と 2 モーラ目に何かの制約が存在し、仮名のバリエーションの多様化を抑制するよう働きかけている。

これらの仮説の検証は止め字を扱う節と部位別に関する考察を扱う節で改めて取り上げて行う。

男性名[84]21,424 件の表記と対応するモーラユニットは合計 40，485 ユニットで全ユニット 543 種類に対し 1 ユニットの平均使用回数は 39.45 回であった。部位別のユニット数と種類は下記表 4-3 が示す通りである。

	ユニット数	ユニット種類	1ユニット平均使用回数
全男性名	40485	543	39.45
1 字目	21,424	479	44.73
2 字目	17,226	267	64.52
3 字目	1,801	62	29.05
4 字目	31	6	5.17
5 字目	3	2	1.50

表 4-3　男性名のユニット数とユニット種類数

男性名のユニット種類は部位順を表す数字の増加につれ逓減する傾向にあり、ユニット数自体の変化の影響が大きかったがその低減率は必ずしもユニット数のと同じとは限らない。例えば 1 字目から 2 字目にかけてユニット数が 2 割減

[84]特注表甲マーク群を除いた男性名

減少に対し、ユニットの種類は 4 割以上減少している。なお表 4-3、表 4-1 を比較すればユニットの種類は漢字の字種より半減していることが容易に分かる。特に 1 字目と 2 字目のユニット数とユニット種類を比べれば、2 字目では少数のユニットに集中する動きが読み取れ、高比率の止め字の存在を示唆した結果だと捉えよう。

4．2　男性名の表記

第 3 章では女性名に関する先行研究は何本も紹介していたが男性名に関するものは殆どなかった。故に男性名の考察に際して手がかりとなれるものは皆無なの状態だと言える。やむを得ず相違点が多いことは承知の上で、本節で女性名の表記の考察項目を参考にし、男性名の表記の考察項目を立てた。無論、異なる点が多く全く同じように進められたとは考えていない。

4．2．1　男性名の表記の基本データ

まず、男性名の表記の基本データを確認しよう。男性名の全字種が 1,232 種類（異なり字数）で、その内訳は漢字 1,200（97.40%）（当用漢字 727［59.01%］、旧字体 7［0.57%］）、異体字 18［1.46%］）、表外字 448［36.36%］）字種、平仮名 20（1.62%）字種、片仮名 12（0.97%）字種、踊り字無しとなっている。

男性名の全字数（表記の個数）が 40,564（延べ字数）字でその内訳は、漢字 40,515（99.88%）（当用漢字 34,981［86.24%］、旧字体 72［0.18%］、異体字 88［0.22%］、（当用漢字）表外字 5,374［13.25%］）字で平仮名 32（0.08%）字、片仮名 17（0.04%）字となっている。

男性名の字種構成は女性名とは大いに異なる。仮名字種の少なさや踊り字がないことが上げられよう。当用漢字と表外字の比率の差も少なかった。用例数から見れば漢字の使用率は 100%には達していないが、男性名イコール漢字という考えに総じて間違いはなさそうだ。平仮名名と片仮名名の存在は確かであるが、女性名において示したほどの存在感はなかった。一方、漢字枠では表外字の割合が大幅に上昇している。しかし、やはり当用漢字枠に比べ 1 字種あたりの使用回数が少ない。

続いて、男性名の表記の字種ランキングを見よう（女性名の場合と違い、男性名における仮名名の割合は極めて低いため、以降漢字表記だけについて考察することとする）。

まず、男性名の表記の用例数の降順で上位 99 位を表 4-4 に示す。

順位	字種	例数	順位	字種	例数	順位	字種	例数
1	一	2,096	34	文	262	67	志	137
2	郎	2,019	35	忠	257	68	修	137
3	夫	1,363	36	司	255	69	芳	136
4	雄	1,291	37	敏	251	70	敬	132
5	正	965	38	平	248	71	真	132
6	三	836	39	康	247	72	憲	131
7	男	678	40	勝	244	73	助	131
8	二	664	41	宏	235	74	章	131
9	彦	650	42	也	222	75	朗	126
10	治	553	43	樹	207	76	裕	125
11	太	458	44	泰	201	77	徳	125
12	義	455	45	茂	200	78	豊	124
13	信	427	46	哲	198	79	保	120
14	之	414	47	浩	198	80	克	112
15	明	411	48	直	197	81	善	112
16	和	399	49	人	195	82	実	110
17	英	399	50	重	190	83	貞	109
18	次	391	51	誠	189	84	紀	108
19	俊	382	52	道	186	85	元	107
20	隆	378	53	行	182	86	嘉	106

順位	字種	例数	順位	字種	例数	順位	字種	例数
21	弘	368	54	洋	181	87	公	103
22	秀	346	55	喜	178	88	寿	102
23	博	337	56	利	176	89	四	102
24	昭	330	57	美	171	90	寛	101
25	久	327	58	昌	171	91	進	100
26	幸	319	59	雅	157	92	典	100
27	孝	295	60	邦	154	93	大	99
28	武	294	61	史	151	94	恒	99
29	良	285	62	介	151	95	衛	98
30	清	281	63	生	141	96	成	96
31	光	278	64	達	140	97	啓	96
32	健	276	65	栄	138	98	勇	95
33	吉	268	66	政	137	99	蔵	94

表 5-4　男性名の表記の字種の上位 99

男性名の上位字種ランキングは女性のそれと少しばかり異なる様子を呈している。女性名のような「子」を始めとする「止め字天下」と違って、群雄割拠の戦国時代に見えた。僅かな優位で首位に就いたは止め字ではなく、「順番字」の「一」であった。上位十位で同系統に 6 位の「三」、8 位の「二」があり、加えて 11 位の「太（＝一)」、18 位の「次（＝二)」もその「異形態（字種)」として数えられる。この順番を表す字種グループは女性名の表記に存在せず、比較するなら用法的に「美」と似たところがあるのであろう。決して名前の末尾に限って使われることなく男性名のすべての部位に確認できる字種であった。

2 位は一見天涯孤独の「郎（ろう)」と言いたいところだが、考えてみれば順番字の女房役に徹する故の 2 位のではないか。「郎」は「通称系」の音読みの止め字枠の最高位であった。

3 位から「おグループ」の「夫」「雄」「男」がトップテンに入っている。字種が分散したため、3 位に甘んじているものの、合計すれば、首位となるはずだった。この「おグループ」は男性名において「子」に一番近い対照的な存在に違いないがその由来を筆者は未だ突き止めていない。「子」の女性名における使用実績は少なくとも嵯峨天皇の人名大改革に遡られるが、対応する男性名は名乗り（実名）系統であった。明治以前の人名が見られる資料ではこのタイプの名前は割りとあまり見られない。今現在、明治初頭の一名政策と直接な関連性があるか不明ではあるが少なくとも大流行はそれ以降のことだと考えている。若しくは、女性名の「子」のブームと呼応し、又は刺激を受けた結果なのかも知れない。先行研究の記録ではこの「おグループ」の消長変化は「子」のと類似性を持っているという。つまり大正あたりから人気が爆発的に増え始め、昭和中期に全盛期を迎えた後、急速に廃れていくという流れを辿った。

9 位の「彦」も止め字枠の一員で、しかも恐らく最も古参株だろう。また、62 位の「介」、73 位の「助」もランクインできなかった「輔」「佑」など「すけグループ」をなす。このタイプは古い時代にルーツを持ちつつ一旦廃れて、戦後から暫くの間返り咲きを果たしたものである。

上記顕在的止め字の他、男性名には「司（じ）」「史・志（し）」「樹（き）」「人（と）」「弥・也・哉（や）」など幾多種類の潜在的止め字が存在する。人気の名根字種よりも用例数が少ないものの、性格上止め字枠に分類するに相応しい。

残りの上位字種は総じて名根の人気字種が殆どで幾つかの抽象的な意味に分類でき、同じ読みをする同訓異字の類が多い。

用例数に注目すると上位 4 位は千字以上、上位 10 位は五百字以上、15 位までは 400 字、26 位 300 字、46 位 200 字、93 位から 100 字を切った。全体的に止め字枠が上位を独占できなかったことは女性名の場合に比べ、一番の相違だと言える。以上、男性名の表記を概観してきた。女性名のと比べて、多くの相違点が見られた。次節で部位別の調査に入る。

4．2．2　部位別で見る男性名の漢字表記の字種

上述通り、男性名の表記は字種面だけでなく分類や字種が持つ用例数など、女性名のと多くの相違点が存在する。これより部位別の調査を通して、文字数

とモーラ数はともに女性名より多い男性名から多くの特徴の発見を見込まれている。

4．2．2．1　男性名の漢字表記　1 文字目

男性名の漢字表記の 1 文字目の字種数は 1,033 字種で全漢字の 1,232 字種に対するカバー率は 86.08％である。延べ字数 21,437 文字に対し 1 字種平均使用回数は 20.75 回であった。

字種のカバー率は女性名と同じくハイレベルであり、全人名において 1 字目は字種の一番豊富な部位と判明した。1 文字目に使われた漢字数は全用例数の半分を超えた 21,437 字でその内訳は当用漢字 18,227 字（85.03%）、旧字体 53 字（0.25%）、異体字 74 字（0.35%）、表外字 3,083 字（14.38%）となっていて女性名とほぼ一致する。

男性名は最大 5 文字を有するので 1 文字目に「1 文字名」と「2・3・4・5 文字名の 1 文字目」の 5 種類の字種が含まれているが、4 文字と 5 文字の男性名は少量しか存在しておらず、更にその殆どは明治時代に集中しており現代に至ってほぼ消滅した。故にこれらを除外し、1 文字目全体の字種に 1 文字名と 2 文字名 1 文字目と 3 文字名 1 文字目を加え上位 30 位の合同ランキングを表 4-5 に示した。

順位	漢字 1 字目		1 字名		2 字 1 字目		3 字 1 字目	
1	正	849	清	98	正	706	喜	52
2		470	博	94		423	健	38
3	英	344	宏	91	義	318		37
4	俊	329	正	86	和	303	正	34
5	義	328	隆	82	英	299	富	33
6	信	318	明	81	俊	296	信	24
7	和	317	誠	81	秀	282	徳	23
8	秀	317	茂	78	信	273	英	21

順位	漢字１字目		１字名		２字１字目		３字１字目	
9	隆	301	進	71	良	205	洋	20
10	健	274	豊	70	隆	196	日	19
11	清	273	実	69	幸	194	伊	19
12	武	263	弘	65	忠	188	雄	19
13	博	254	徹	64	武	183	久	18
14	忠	229	健	61	康	183	栄	17
15	良	226	稔	59	敏	180	誠	17
16	孝	215	修	58	健	173	幹	16
17	幸	215	浩	55	光	171	大	16
18	康	214	武	53	文	152	源	16
19	勝	206	孝	50	清	152	孝	16
20	敏	205	昇	49	勝	150	幸	16
21	昭	197	勇	48	孝	144	陽	15
22	弘	195	勝	48	泰	141	新	15
23	光	193	昭	47	雅	137	善	14
24	哲	193	功	43		137	千	14
25	茂	184	晃	42	昭	137	清	14
26	誠	183	淳	42	博	136	敬	14
27	泰	181	洋	41	重	134	謙	14
28	直	179	寛	40	直	127	太	14
29	浩	178	裕	39	邦	125	啓	13
30		174	章	39	利	123	藤	13

表 4-5　男性名の１文字目とその内訳の字種上位 30

男性名の１文字目は殆ど名根の字種に占められており、3 文字名の 12 位に止め

字と思われる「お＝雄」が入っているものの実際に確認したところ、全て「ゆう」の読み方をしていた。これは女性名の「恵＝けい」のケースと極めて似ている。漢字字種としては止め字枠に分類されることが多いものの、別の読み方をも有していた。人名においてこのタイプの漢字の使用傾向は以上の調査で解明されたように、その機能分担は大体部位別に分けられており、状況を事前に知っていれば間違えることも少ないのであろう。このような部位別に細分化した調査を行わなければ、全字種の集計調査では恐らく殆どの場合、止め字枠の「お＝雄」として処理されてしまうのであろう。

この他、「一[85]」と「三[86]」といった「順番字」系の字種が見られた。この女性名にない字種グループの性格も「美」と似ているのではないかと考えている。つまり、人名の末尾を含めて全部位に広く多く分布する字種である。人名の末尾に位置する場合、止め字と見なされること可能ではあるが「おグループ」「郎」など顕在的止め字とは同一視することはやはり妥当ではない。強いて分類するなら潜在的止め字枠に近い存在であろう。

なお、1 文字名の字種は他の列の字種とはそれほど差異を感じなかった。この点は女性名の大きく異る。

4．2．2．2　男性名の漢字表記　2 文字目

2 文字目の字種数は 632 字種で全漢字字種に対するカバー率は 52.67%である。延べ字数 17,241 文字に対し 1 字種平均使用回数は 27.28 回であった。

カバー率は 1 文字目に比べて相当低下しており半分程度に留まったが、女性名の同部位の値に比べたらまだ高かった。4.2.2.1 での調査で明らかになったように、上位字種を見る限り 1 文字の男性名の字種は女性名と違い 2 文字名で使われているのとあまり変わらなかったものの、1 文字名と比べて 2 文字名の字種は大幅に減少している。これは男性名には使用頻度が低いが特有の字種がやはり存在したことを示唆する。1 字種の平均使用回数に関して部位別では最高

[85]女性名の場合の「美＝よし」と似て、訓読み「かず」と読む字も一定の量で存在すると思われるが、「いち」の方が主流であろう。

[86]「一」の次は「二」となるはずだが、字種的に「二」と「次」など複数の変形があるため、用例数が分散された結果、「三」に抜かれたと思われる。

値であったがこれは大量の止め字を含んだことが原因だと思われる。

2 文字目に使われた漢字数は 17,241 字で、文字目に次いで多い。その内訳は当用漢字 14,951 字（86.72%）、旧字体 19 字（0.11%）、異体字 14 字（0.08%）、表外字 2,257 字（13.09%）となっていて、1 文字目と殆ど変わらない。

2 文字目の男性名上位字種とその内訳を下記表 4-6 に示した。

順位	漢字 2 字目		2 字 2 字目		3 字 2 字目	
1	一	1,623	一	1,273	一	349
2	夫	1,291	夫	1,211	夫	339
3	雄	1,129	雄	1,087	二	170
4	郎	764	郎	747	次	145
5	二	653	彦	621	之	111
6	彦	630	男	588	一	107
7	男	618		488	四	48
8		595	二	476	治	36
9	治	457	治	419	久	31
10	之	402	之	288	兵	28
11	三	375	明	261	士	26
12	次	336	也	215	八	19
13	明	263	平	203	五	18
14	司	240	次	191	出	17
15	也	216	人	178	喜	16
16	平	207	司	175	志	16
17	樹	201	弘	172	千	15
18	人	193	吉	166	十	15
19	久	183	久	149	代	13

順位	漢字２字目		２字２字目		３字２字目	
20	吉	175	行	147	紀	11
21	弘	173	昭	132	美	10
22	行	147	生	130	佐	10
23	介	138	義	124	吉	9
24	生	135	正	116	知	9
25	昭	133	美	111	巳	8
26	義	127	信	109	比	8
27	美	125	幸	104	丸	8
28	正	116	文	100	矩	7
29	史	114	朗	96	加	6
30	志	109	蔵	91	重	5

表 4-6　男性名の 2 文字目とその内訳の字種上位 30

2 文字目の字種は 1 文字目と比べて一変した。上位 30 位の殆どが止め字枠と順番字枠に占められ「一」はすべての列のトップを独占した。2 文字名の 2 文字目においても 3 文字名の 2 文字目においても、僅かな優勢でリードしたが両方を合わせた結果で 2 文字目の全字種のトップに就いた。同枠の「三」は 5 位で、「二」は 8 位であった。この他、「一」と「二」の異形字種として「太」と「次」も高い順位を獲得している。

しかしこの部位に一番振るったのは止め字枠である。まず「おグループ」は「夫」「雄」「男」が 2、3、7 位の上位に就き「郎」と「彦」もトップテン入りに成功した。「すけグループ」は不振とも言え「介」が 23 位に甘んじた。またトップテンに入らなかったものの、10 位以下～30 位の帯で勢いを振るったのは潜在的止め字枠であった。多くの字種は顕在的止め字枠の「介」「生」より順位が上だった。なおこの状況下であっても、名根枠も一定のシェアを保った。

そもそもこの部位は 2 文字名の末尾と 3 文字名の中間文字が混在しておりその性格の違いは必然的に字種の違いに反映してくる。

2 文字名の全体における比率が高いため上に述べた 2 文字目の特徴はその多くがここに由来したものである。一方、3 文字名の場合これと違う構図を呈しており 3 文字名の 2 文字目の上位字種では順番字枠が際だった存在感を示した。当然ながら止め字枠は皆無でしかも、残りの字種は 2 文字名のと違い、名根が殆ど見られず 1 モーラの名素ばかりだった。

以上 2 文字目の字種を見てきたが特徴的なものも多く見られたものの、こうであった内因は語学的観点では解明できるはずがない。なぜならこの内因は男性名の系統の違いに由来するものであるからだ。例えば順番字枠は通称系統に由来するなどである。とは言え、この節では字種に焦点を当てた考察であるため字種の特徴の指摘に留まり、男性名の系統に関して深入りはしないことしよう。

4．2．2．3　男性名の漢字表記　3 文字目

3 文字目の字種数は 88 字種で、全漢字字種に対するカバー率は 7.33%である。延べ字数 1,796 文字に対し 1 字種平均使用回数は 20.41 回であり 1 文字目と同レベルだった。

3 文字目となれば 4 文字名と 5 文字名が極めて少数のため、実際に殆ど 3 文字名の 3 文字目に当たり女性名と同様、大量の止め字の存在が予想される。カバー率は女性名より若干高かったのは止め字への集中率が女性名より低かったためだと推測できる。3 文字目漢字用例数は 1,796 字で前の二部位に比べて、減少が際だつ。その内訳を見ると当用漢字 1,762 字（99.11%）、表外字 34 字（1.89%）で旧字体と異体字はなかった。3 文字目の男性名と 3 文字名の 3 文字目の上位字種を示したのが下記表 4-7 である。

順位	漢字 3 字目		3 字 3 字目	
1	郎	1,243	郎	1243
2	助	85	助	85
3	夫	72	夫	72
4	雄	64	雄	64

順位	漢字３字目		３字３字目	
5	男	60	男	60
6	衛	47	衛	29
7	介	13	介	13
8	太	13	治	12
9	治	12	由	11
10	由	11	古	9
11	二	9	朗	9
12	朗	9	二	8
13	古	9	良	7
14	介	8	二	7
15	良	7	次	6
16	二	7	輔	6
17	輔	6	太	6
18	彦	5	也	5
19	也	5	代	5
20	代	5	彦	5
21	美	4	出	4
22	出	4	吉	4
23	吉	4	美	4
24	馬	3	二	3
25	右	3	馬	3
26	典	3	典	3
27	二	3	丸	3
28	丸	3	臣	3

順位	漢字 3 字目		3 字 3 字目	
29	松	3	松	3
30	臣	3	八	2

表 4-7　男性名の 3 文字目とその内訳の字種上位 30

表 4-7 で群を抜いて 1 位についてのは止め字「郎=ろう」である。これは女性名の同部位の「子」の場合に似ている。以下、予想通り全体的に多くの止め字がランクインしているが、2 文字名で圧倒的に多かった「おグループ」を含めて他の止め字枠の字種の用例数は「郎」に遥かに及ばなかった。従って「郎」は 3 文字名に多用されることは明白である。これと似て「すけグループ」も同じ傾向にあり、他の字種についてもこれまで見てきた何れの部位の字首とも異なるものばかりで規則性も見いだせない。何れの用例数も多くはないので個別例とし扱っても差し支えないと言えよう。

4．2．2．4　男性名の漢字表記　4 文字目と 5 文字目

4 文字の男性名は大半が「○右（左）衛門」で、残りの殆どは「○○太（次・三）郎」である。このように 4 文字目は「衛」か「順番字」に決まるためこれ以上調査する必要もない。

5 文字の男性名は「次郎左衛門」「左衛門太郎」「八郎右衛門」「吉野右衛門」の 4 例しか無くその末尾の字種は一目瞭然である。特徴的とも言えるが「順番字、止め字、止め字タイプの複合語」といった語彙的に意味のない要素がずらりと並べて作られた点で実に興味深い。

4．2．2．5　男性名の漢字表記　止め字・順番字など以外の字種

このセクションで 3.2.2.4 と同じ手法で考察を行うので繰り返して紹介することを省くこととする。表 4-4 の止め字枠などを除いた残りの上位 10 位の字種を選出した。降順で「正、治、義、信、之、明、和、英、俊、隆」の 10 字である。続いてこれらの字種の有無を他の表で確認したい。

まず、使われた部位の多い字種は全字種ランキングの 1 位[87]の「正」計 4 箇所で 2 位の「治」計 3 箇所であった。とは言え両者には大きな違いがある。「正」の殆どは「まさ」と読むのに対し、「治」の半数強は「はる」、残りは「じ」と読むのだ。実は人名の考察に際して「治」のような複数の読み方を有する漢字の扱いは極めて困難な課題であり、場合によっては考察結果を間違った方向に導く大きな陥穽ともなりうる。このセクションでは表記即ち漢字字種に焦点を当てているためその影響は少ないと思われがちかもしれないが、出現する部位はやはり大きく関わっており前述の再選 10 字種の内、「之」が「治」の場合に似ている。

次にこの 10 字種の出現の多い部位を見てみよう。2 文字名の 1 文字目に 7 種類で首位、同じく 2 文字名の 2 文字目は 5 種類で次ぐ。この分布傾向は女性名との対比は鮮明でこの二部位の字種を合わせると 9 字種を得られ、疑いなく 2 文字名は一番豊富な字種を擁しているのである。

一方、他の部位の字種は多くとも 3 字種で特に 3 文字名は 1 字種しかなかった。これもまた女性名とは対比的な結果だった。また、1 文字名に 3 字種が確認されて、決して多くはなかったものの、女性名の 0 字種と比べて違いは大きい。つまるところこの止め字など以外の常用字種の分布に関する考察においては男性名と女性名の間に大きな差異が認められる。

4．2．3　時代別で見る男性名の表記の字種昭和前半と後半の比較

このセクションでは男性名の時代別の字種変化を考察する。具体的には女性名の同考察と同様、昭和前半（S1～S22）と後半（S23～S64）に分けて比較してゆくこととする。

データベースから上記時間を基準に該当用例を抽出した結果、昭和前半 9,499 例、昭和後半 3,532 例を得られた。用例数の差は約 3 倍に達したため係数を作成する必要がある。従って女性名の場合と同様、昭和後半の用例数を基準に係数「3,532/9,499」[88]を作成した。

---

[87]止め字などを除いている。

[88]「係数K523B」と名付ける。

まず、両時期の基本データであるが、下記の表 4-8 が示す通りである。

	昭和前半		昭和後半	
	字種	字数	字種	字数
全体	873	17,585	523	6,547
1 文字目	748	9,499	407	3,532
2 文字目	439	7,517	272	2,840
3 文字目	47	564	34	175
4 文字目	2	5	—	—

表 4-8　昭和前半と後半の字種と字数の比較

昭和前半の全字種は全データより 300 字種以上の大幅の減少を示しており、後半は前半より更に 300 字種以上減少した。この字種の減少する傾向は他の具体的な部位にも見られ、しかも減少は特定の部位に集中しておらず全体に及んでいる。女性名と比べて、男性名の 2 文字目と 3 文字目も 1 文字目と同じ方向で字種数が減っていたのは止め字の含有率が相対的に低く、名根の分布範囲は広いためで故に名根がほぼ 1 文字目に集中していた女性名と違った変動を呈したのである。

昭和前半に比べ後半では字種が減るのは当用漢字による制限として捉えるが、どうやら字種の萎縮はそれ以前既にかなり進行していたようである。勿論、筆者は昭和前半と後半の字種数の差は用例数自体の差と無関係だと考えていないが、これまでの調査で明らかになったように、字種と用例数は線形関数の変数のような関係に当たらないためその影響は字種数の差を和らげる程度に留まり、全体の流れを変えるほど強くはない。

以下、各字種枠の仔細を表 4-9 にまとめた。なお昭和前半の数字は原集計値に係数 K523B をかけた後の修正値となっている。

	全表記	1 文字目	2 文字目	3 文字目

	昭前	昭後	昭前	昭後	昭前	昭後	昭前	昭後
当用漢字	5,473	5,721	2,916	3,154	2,350	2,408	205	159
旧字体	13	12	9	9	4	3	0	0
異体字	15	5	13	4	2	1	0	0
表外字	1,034	773	593	353	437	416	4	4
平仮名	0	30	0	10	0	10	0	10
片仮名	3	6	1	2	1	2	1	2
踊り字	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	6,539	6,547	3,532	3,532	2,795	2,840	210	175

表 4-9　昭和前半と後半の文字数の比較　調整値

まず、各合計（使用された文字数）は殆ど変わらなかった。これは男性名の語長即ち一つの人名に使用する文字数が安定していて、変化はなかったことを意味する。続いて当用漢字枠は全表記、1 文字目と 2 文字目において同じく微増の傾向にあったものの 3 文字目だけが減少している。この変化の構図は丁度表外字の変化と相反して互いの消長を補った形となっている。

表外字は大幅の用例数の減少が見られ、しかもその殆どは 1 文字目に集中している。綜合的に判断して、恐らく表外字が多用されたのは 1 文字名か止め字を持つ 2 文字名だと考えられよう。

仮名枠の変化は比較的に鮮明で前半には仮名は殆どなかった。男性名イコール漢字というイメージを裏付ける結果だと言える。特に前半には平仮名は一つもなかったのに対し後半となると、30 字も確認された。

引き続き、部位別に具体的な字種の比較を見てみよう。

4．2．3．1　時代別男性名の全漢字字種の上位 30 字種の比較

以下、昭和前半と後半の全体としての上位字種を比較してゆく。表 4-10 を見よう。昭和前半の字数（　部分）列は実際の集計値で調整値列はそれに係数 K523B をかけた後の比定値である（以降の表 4-11、4-12、4-13 も同様）。

順位	昭和前半			昭和後半	
	字種	調整値	字数	字種	字数
1	一	326	876	一	329
2	夫	243	654	郎	184
3	郎	240	646	夫	141
4	雄	192	517	正	139
5	彦	143	384	雄	129
6	正	141	378	彦	110
7	男	119	321	明	109
8	一	103	277	隆	100
9	一	102	274	博	100
10	昭	101	271	和	99
11	治	90	242	秀	95
12	弘	90	242	一	93
13	和	83	222	治	93
14	明	78	210	幸	88
15	義	76	205	樹	81
16	之	71	190	之	78
17	信	68	182	司	75
18	英	67	179	男	75
19	隆	65	175	俊	72
20	俊	64	173	英	70
21	博	60	162	史	70
22	宏	57	152	康	68

順位	昭和前半			昭和後半	
	字種	調整値	字数	字種	字数
23	幸	55	147	信	66
24	孝	54	146	也	64
25	久	54	145	裕	60
26	大	52	139	雅	59
27	勝	50	135	浩	58
28	武	49	133	孝	58
29	司	49	132	一	57
30	光	47	127	久	57

表 4-10　昭和前半と後半の全漢字字種上位 30 の比較

昭和前半と後半の全漢字字種を比較すると幾つかの特徴が見られる。まず、両方とも順番字と顕在的止め字枠が上位を占めたことは明白で、予想内の結果だと言える。

順番字の場合「一」が首位に就いたが、「二」と「三」の順位と用例数に差が見られた。前半に比べ後半において、順位の後退と用例数の減少が明らかである。特に「三」が「二」より後退と減少の具合が多かったことは昭和後半の家庭における子供の人数の変化を物語っている。

止め字枠の場合「おグループ」「郎」「彦」は「一」に次ぐ上位を占めることに変わりはないが、何れの用例数も大幅に減少していた。これはこのタイプの命名方式が淘汰されていると考えられよう。この他、後半において潜在的止め字が幾つかランクインした。つまるところ止め字を使う男性名は減少傾向に有りかつ顕在タイプから潜在へのそれへと流れたのである。

残りの名根字種は殆ど後半に残ったが表外字はなくなった。そして、戦意高揚のニュアンスを匂わせた「義」「勝」「武」などもすっかり消えた。また、昭和の「和」は残ったが「昭」は残らず全体的に入れ替わった字種は女性名より少なかった。

4．2．3．2　時代別男性名の漢字 1 文字目の上位 30 字種の比較

下記表 4-11 は 1 文字目の場合の比較である。

順位	昭和前半			昭和後半	
	字種	調整値	字数	字種	字数
1	正	119	321	正	125
2		69	186	秀	89
3	和	65	175	隆	82
4	昭	62	166	和	77
5	英	59	158		72
6	俊	56	150	俊	64
7	義	54	144	博	62
8	隆	53	142	康	61
9	信	50	135	雅	58
10	弘	48	128	英	57
11	博	47	126	哲	53
12	武	45	121	直	52
13	健	45	121	浩	51
14	宏	42	114	信	48
15	勝	42	113	裕	47
16	忠	40	107	健	47
17	孝	39	106	洋	44
18	秀	39	104	幸	44
19	幸	38	102	清	40
20	康	36	98	真	39
21	良	36	96	明	38

順位	昭和前半			昭和後半	
	字種	調整値	字数	字種	字数
22	清	35	94	孝	38
23	泰	35	93	修	37
24	哲	34	92	敏	37
25	浩	34	91	良	37
26	光	33	89	茂	35
27	敏	32	87	光	35
28	洋	32	87	誠	33
29	昌	31	83	勝	33
30	誠	31	83	文	33

表 4-11　昭和前半と後半の 1 文字目字種上位 30 の比較

表 4-11 では「一」以外の順番字や止め字枠の字種は皆無で全体的に昭和後半の方の用例数が多かった。これは実際の字種の減少で無くなった字種の分が残った字種に振り分けられたことが原因だと考えられている。

他の 20 字種以上の名根が残った。入れ替わったのは表 4-10 同様、表外字と戦争を思わせる「義」「武」「忠」などの字種である。

4．2．3．3　時代別男性名の漢字 2 文字目の上位 30 字種の比較

表 3-12 は 2 文字目の上位 30 字種のデータを示すものである。

順位	昭和前半			昭和後半	
	字種	調整値	字数	字種	字数
1		256	689		257
2	夫	232	623	夫	131
3	雄	167	448	彦	110
4	彦	140	376	雄	104

順位	昭和前半			昭和後半	
	字種	調整値	字数	字種	字数
5	男	109	294	一	86
6	郎	99	266	樹	80
7	一	94	252	治	76
8	二	82	220	之	76
9	治	74	200	司	71
10	之	69	185	明	71
11	明	50	134	男	70
12	司	47	127	郎	69
13	太	43	115	也	63
14	弘	42	114	史	60
15	也	42	114	人	55
16	昭	39	105	二	48
17	樹	35	95	行	46
18	次	35	94	幸	44
19	久	34	91	太	42
20	人	33	89	志	40
21	生	29	79	久	39
22	平	29	77	介	39
23	行	27	73	博	38
24	介	23	62	弘	31
25	義	23	61	宏	27
26	正	21	57	生	26
27	美	21	56	平	25

順位	昭和前半			昭和後半	
	字種	調整値	字数	字種	字数
28	忠	20	53	則	24
29	朗	19	52	美	24
30	和	17	47	朗	23

表 4-12　昭和前半と後半の 2 文字目字種上位 30 の比較

女性名と同様、男性名の 2 文字目にも多くの止め字や順番字が予想された通りランクインしている。

順番字は全体的に順位が下落し、用例数も減少する傾向にあったが「一」は順位的にも用例数的にも圧倒的な安定感を示した。一方「次」は圏外へ落ちた。

「おグループ」と「彦」など顕在的止め字は用例数が減少したものの、以前「一」に次ぐ最上位に留まった。しかし順番字とペアで使われていた「郎」の下落ぶりは少々目立つ。これと反対に「介」や「朗」のようなもともと使用頻度が低めの字種は逆にやや上昇の傾向を見せた。

一方、顕在的止め字枠とは対照的に潜在的止め字枠の字種は殆ど伸びが確認できた。特に「樹」と「司」は幾つかの顕在的止め字と順番字を尻目にトップテンにまでのし上がった。このような変化から人名に個性を求め始めた命名者の思惑が読み取れる。

上述の止め字と順番字の字種は極めて多かったため、名根の字種はそもそも前半に数字種しかランクインしていなかった。入れ替わりは 1 文字目と共通性が見られ「昭」や「義」など時代感の強い字種は消えた。驚くべきは 1 文字目の首位の「正」がまさかの圏外に凋落した点である。あくまで筆者の推測に留まるが、もしかすると名根枠には起首用と末尾用の「役割分担」があったかもしれない。因みに「和」は圏外の 24 に後退したが、用例数としては 24 例に増えている。

なお「平」という字の取り扱いに関して、実に少々躊躇しているところがある。男性名の末尾にある程度現れるものの、1 文字目の使用例もまたある程度確認できた点が、他の男性名止め字とは異なる。しかし、このような使い方は

女性名では止め字とされた「美」「えグループ」の使い方とはほぼ変わらない。要するに「美」などを止め字枠にとどめておけば「平」も止め字に認定すべきで、もしくは「美」などとまとめて止め字枠から外すか、のどちらかに決めなければならないからだ。

。現段階で結論を出すには時期尚早ではあるが筆者は後者を考えている。

また表 4-12 にて「美＝み」が確認された。長らく女性名の止め字とされてきた字種が男性名の末尾に現れる報告は未だに見たことはないが、現実に名根の「美＝よし」としてではなく、明らかに止め字性格を有する用例に使われている。この「美」は名素として、「む」で終る動詞の語尾のモーラに当てられていた。この用法は形容詞の「たかし」を「隆史」と表記する発想と極めて近いため止め字と認定した。この発見は「美」を女性名の止め字とする主張とは明らかに相容れない。筆者の考察計画はまだ重要な検証過程が欠如しているため、この件に関してまた驚くべき事実が現れるかもしれないので、結論付けは一旦保留としたい。

4．2．3．4　時代別男性名の漢字 3 文字目の上位字種の比較

後半共の 3 文字目の字種数が少なかったため、表 3-13 に全字種を並べた。

順位	昭和前半			昭和後半	
	字種	調整値	字数	字種	字数
1	郎	141	379	郎	115
2	夫	12	31	夫	10
3	雄	10	28	助	6
4	男	10	27	男	5
5	助	5	13	介	3
6	衛	3	9	雄	3
7	朗	3	8	志	3
8	志	2	6	古	3

順位	昭和前半			昭和後半	
	字種	調整値	字数	字種	字数
9	介	1	4	則	2
10	治	1	4	典	1
11	美	1	3	允	1
12	[illegible]	1	3	央	1
13	彦	1	3	生	1
14	輔	1	3	己	1
15	古	1	3	巳	1
16	臣	1	3	[illegible]	1
17	太	1	3	宏	1
18	良	1	2	也	1
19	四	1	2	綱	1
20	樹	1	2	朗	1
21	佑	0	1	士	1
22	士	0	1	和	1
23	里	0	1	止	1
24	[illegible]	0	1		
25	嗣	0	1		
26	基	0	1		
27	吉	0	1		
28	鈴	0	1		
29	史	0	1		
30	[illegible]	0	1		

表 4-13　昭和前半と後半の 3 文字目字種上位 30 の比較

男性名全体の用例数は極めて多いが、3 文字目となれば急落している。結果、トップテンを出ていない内に両方とも用例数は既に 1 例まで低下している。全体的に言えば 2 文字目と同様、個々の字種の用例数は減少しており止め字などを除いた字種は微増した。

3 文字目はやはり殆ど止め字であった。複数の字種に分散することのない「郎」は首位を保持している。以下、「おグループ」はこれに続き、2 文字目と比べ「すけグループ」は勢力を若干伸ばした。特に後半となれば「おグループ」に肉迫する勢いを見せた。

順番字は昭和前半にまだ数例検出されたが後半ではほぼ消滅した。残りの字種は皆 1 例しかないので検討のしようがない。

4．2．3．5　昭和前半と後半の字種の比較のまとめ

女性名の考察では、想定した影響は殆ど見られなかったのに対し、男性名の字種の減少がはっきり観察できた。加えて以下の傾向も認められる。

止め字では顕在的止め字枠は依然優位に立つが、各々の字種の用例数の減少は明白である。一方、潜在的止め字枠は確実に字種と用例数の両方を伸ばしており女性名と同一視することはできないが、方向性としては一致する部分がある。順番字枠の変化は顕在的止め字と似ている。

なお、名根枠は女性名の方より安定していて入れ替わりは比較的に少なかった。特に 1 文字目の字種の入れ替わりは女性のそれとの違いは鮮明であった。

「美」の止め字認定は女性名の「子」以外の止め字を否定する観点を支持する貴重な証拠として考えられる。

4．2．4　男性名の表記のまとめ

男性名には「順番字」という女性名にないパターンが存在する。具体的には「一郎」、「孝次郎」か「謙三」のような人名に含まれた「順番を示す機能を有する漢数字か漢字」を言う。右に取り上げた例のように男性名の末尾のみならず、起首、語中にも現れるので止め字と見なせない字種グループをなしている。止め字と見なせない理由はもう一つある。止め字の「郎」とペアに使わること

が多いからであり、止め字は重ねて使用されることは無い[89]ためこの字種グループを止め字にするのは明らかに不適切である。

止め字の字種についても女性名と異なる。まず、顕在的止め字枠でも「郎」、「彦」、「おグループ」など複数種類が存在し、しかも潜在的止め字枠、例えば「司」「樹」も女性名の「絵」「代」などとは使い方に差異が見られる。加えて男性名においての「美」については 4.2.3.3 にて既に論じたが、結果、女性名の「美」を止め字枠から外す方向へ促す材料になったとも捉えられる。

最後に、字種や字種の内訳に関しては女性名のそれと比べると増加傾向にあり、特に表外字枠ではその傾向は一層増長している。そして、時代差に焦点を当てた考察においては女性名の名根枠の上位字種の激しい入れ替わりと対照的に、男性名の場合は、強い安定感を示した。

[89]少なく男性名において

4．3　男性名のモーラ

本節にては男性名をモーラ単位で調査する。女性名の音重視と異なり、男性名は漢字的だと言えるため漢字との関連性を断った音だけの考察ではどこまで有用な情報を提供してくれるのかは未知である。

4．3．1　男性名のモーラ　基本データ

まず、男性名の全体のモーラ使用数を下記表 4-14 に示す[90]。

あ	1,254	い	3,598	う	5,276	え	467	お	4,248
か	2,469	き	3,001	く	781	け	1,750	こ	1,541
が	66	ぎ	48	ぐ	105	げ	585	ご	222
さ	2,707	し	5,029	す	1,384	せ	395	そ	113
ざ	74	じ	1,813	ず	925	ぜ	48	ぞ	653
た	2,857	ち	2,380	つ	1,890	て	499	と	2,258
だ	592	ぢ	1	づ	10	で	624	ど	35
な	404	に	250	ぬ		ね	298	の	1,289
は	549	ひ	3,221	ふ	364	へ	197	ほ	44
ば	8	び	13	ぶ	799	べ	31	ぼ	90
ぱ	4	ぴ		ぷ		ぺ	52	ぽ	4
ま	1,747	み	1,687	む	490	め	169	も	514
や	1,020			ゆ	1,142			よ	1,976
ら	430	り	689	る	1,352	れ	76	ろ	3,523
わ	104	ゐ				ゑ		を	8
								ん	1,939
きゃ				きゅ	17			きょ	75

[90]本節5.3の諸表の構造や網掛けなどの使用は4.3に準ずる

ぎゃ				ぎゅ				ぎょ	8
しゃ				しゅ	317			しょ	399
じゃ	1			じゅ	318			じょ	59
ちゃ				ちゅ	34			ちょ	30
ひゃ	1			ひゅ				ひょ	4
みゃ				みゅ				みょ	8
りゃ				りゅ	154			りょ	192

表 4-14　男性名の 1 モーラ目の分布図

男性名の全モーラでは「う」「し」「お」がランク 1 を、「い」「ろ」「ひ」「き」がランク 2 を成す。「う」は男性名に存在するおびただしい 2 モーラで「う」で終る漢字音に由来すると考えられ、少なくとも止め字の「郎」の読みに含まれるに違いない。「お」は「雄・夫・男」グループの止め字に当たるので上位に入ることは想像に難くない。「し」は形容詞タイプの男性名パターン「隆史」「広司」の最終モーラに当たるが 3.2 における調査結果ではこれほどあると考えられず、現段階では一部の出処が不明だと言わざるをえない。ところが興味深いことに、最上位のランクではないものの「こ」、「み」、「よ」など女性名では最上位ランクを占めていた止め字枠のモーラが男性名の常用モーラとして確認されている。

濁音枠は人気があると言いがたいが女性名より使用実績が多い。用例の多い順に、「じ」「ぶ」「ず」「ぞ」「で」が挙げられ殊に「ざ行」の使用例は多かった。

拗音枠はモーラの種類にして女性名より確実に増えており「あ段」の「ひゃ」まで 1 例現れている。なお、同じ行で女性名が「う段」か「お段」のどちらに偏る使用傾向と比べて、男性名は両方をほぼ均等的に使っている。とは言え、拗音の使用はやはり限られたモーラに絞られ、拗濁音は拗音と似た傾向にある。

次に、行で見れば「あ行」「か行」「さ行」「た行」に上位のモーラが集中している。中でも「あ行」に二つのランク 1 モーラが入っており最多の用例数を有していた。

そして、段で見れば「い段」に用例数の多いモーラが最も集まり「お段」が次ぐ。

最後に、撥音「ん」の使用率は女性名より大幅上昇し。男性名全体における漢字音の含有率の影響だと考えられる。以上総じて、女性名の場合より男性名の表の方の埋まり具合は上昇したに違いない。以下、部位別に具体的に見てみよう。

4．3．1．1　男性名のモーラ　1モーラ目

男性名の全モーラの内1モーラ目に当たるのを抽出し、各モーラの集計値を下記表4-15にまとめた。

あ	768	い	534	う	45	え	283	お	172
か	1,123	き	567	く	229	け	802	こ	679
が	14	ぎ	24	ぐ	7	げ	67	ご	75
さ	432	し	989	す	204	せ	338	そ	93
ざ		じ	144	ず	3	ぜ	42	ぞ	
た	1,968	ち	95	つ	345	て	441	と	1,162
だ	78	ぢ		づ		で	15	ど	3
な	254	に	15	ぬ		ね	1	の	550
は	314	ひ	1,786	ふ	225	へ	32	ほ	15
ば	5	び	6	ぶ	43	べ	7	ぼ	6
ま	1,485	み	662	む	70	め	10	も	185
や	568			ゆ	571			よ	1,238
ら	3	り	63	る	1	れ	59	ろ	33
わ	34	ゐ				ゑ		を	1
きゃ				きゅ	15			きょ	65
ぎゃ				ぎゅ				ぎょ	8

しゃ				しゅ	302			しょ	358
じゃ	1			じゅ	282			じょ	45
ちゃ				ちゅ	32			ちょ	27
ひゃ	1			ひゅ				ひょ	4
みゃ				みゅ				みょ	1
りゃ				りゅ	144			りょ	185

表 4-15　男性名の 1 モーラ目の分布図

まず、ランク 1 のモーラの内三つもが「あ段」に属している。これは女性名に通じる。行で見ると「か行」は 4 モーラも上位ランクに入った。

次に、濁音とら行音は殆どのモーラに用例が見られるが上位に上がるものはなかった。男性名の系統的な観点からすれば濁音は語頭に立たないルールは早くも打破されていたが、好んで使われるまで至らなかったようである。

続いて拗音と濁拗音について見ると、これも女性名の場合に似て全体としての拗音と濁拗音の用例は殆どこの 1 モーラ目に集中していることは明白である。

4．3．1．2　男性名のモーラ　2 モーラ目

男性名の 2 モーラ目を以下、表 4-16 に示す。

あ	10	い	1,282	う	2,312	え	37	お	375
か	695	き	878	く	360	け	500	こ	183
が	32	ぎ	16	ぐ	32	げ	447	ご	4
さ	1,732	し	1,639	す	692	せ	6	そ	15
ざ	3	じ	155	ず	697	ぜ	2	ぞ	13
た	202	ち	395	つ	1,252	て	14	と	436
だ	463	ぢ		づ	10	で	531	ど	5
な	62	に	200	ぬ		ね	250	の	188
は	23	ひ	19	ふ	3	へ	21	ほ	

ば	1	び	4	ぶ	394	べ	1	ぼ	81
ま	33	み	316	む	1	め	25	も	229
や	22			ゆ	9			よ	388
ら	60	り	268	る	297	れ	14	ろ	1,225
わ	66	ゐ				ゑ		を	
								ん	1,770
きゃ				きゅ				きょ	3
しゃ				しゅ	3			しょ	6
じゃ				じゅ	7			じょ	
ちゃ				ちゅ	1			ちょ	
りゃ				りゅ				りょ	2

表 4-16　男性名の 2 モーラ目の分布図

男性名は漢字本位であるため、2 モーラ目は 1 文字目の最終モーラに当たる。ランク 1 にあるのは「う」「ん」「さ」「し」の 4 モーラだった。この内、「う」「ん」は音読みの「こう」「じゅん」のようなモーラユニットに由来するに対し、「さ」「し」は訓読みの「いさ・ひさ・まさ」「とし・よし」から由来するものだと分かった。

行と段のモーラ分布は比較的に平均だったが、語頭から外れたので濁音の使用は増えていた。また、拗音と濁拗音も少量ながら存している。通常なら音読みにせよ訓読みにせよ語根（語幹など）の最終モーラに現れることはないはずだが仔細調査の結果これらのモーラは読みを 1 モーラとする 1 文字目に後続する 2 文字目の語頭モーラだったことが判明した。「右京（うきょう）」「喜重郎（きじゅうろう）」などがその例である。なお、撥音の「ん」の 9 割ほどが 2 モーラ目にあった。

4．3．1．3　男性名のモーラ　3 モーラ目

男性名の 3 モーラの集計を下記、表 4-17 に示す。

あ	476	い	1,461	う	332	え	115	お	3,680
か	431	き	521	く	70	け	25	こ	35
が	6	ぎ	8	ぐ	13	げ	3	ご	143
さ	210	し	1,920	す	299	せ	50	そ	5
ざ	70	じ	1,512	ず	15	ぜ	4	ぞ	640
た	662	ち	193	つ	107	て	44	と	560
だ	5	ぢ	1	づ		で	1	ど	17
な	81	に	4	ぬ		ね	14	の	551
は	212	ひ	1,416	ふ	136	へ	144	ほ	29
ば	2	び	3	ぶ	81	べ	22	ぼ	3
ぱ	4	ぴ		ぷ		ぺ	52	ぽ	4
ま	228	み	512	む	419	め	134	も	38
や	430			ゆ	559			よ	335
ら	360	り	16	る	816	れ	3	ろ	559
わ	4	ゐ				ゑ		を	7
								ん	36
きゃ				きゅ	2			きょ	7
しゃ				しゅ	12			しょ	35
じゃ				じゅ	29			じょ	14
ちゃ				ちゅ	1			ちょ	3
みゃ				みゅ				みょ	7
りゃ				りゅ	10			りょ	5

表 4-17　男性名の 3 モーラ目の分布図

3 モーラ目において単独モーラとして止め字の「お」が首位を占め、以下「い

段」に「い」「し」「じ」「ひ」全てのランク 2 のモーラが集中している。ランク 3 は「お段」に多い。「い」は通称系の男性名パターン「〇〇いち（ろう）」の順番字の「一」の最初モーラに当たる。「し」は前述の形容詞タイプの最終モーラに当たる止め字である。「じ」の来源は少々複雑だが順番字「二・次」及びその代用字とも思われる「司」「治」などに当てられており、総じて 3 モーラ目は止め字と順番字の多い部位である。なお、濁音の最も集中する「ざ行」の「じ」と「ぞ」の殆どはこのモーラに集まっていた。

拗音と濁拗音についてこのモーラは漢字ベースでは 2 文字目の語頭に当たる可能性が高く用例数は 1 モーラ目に次いでに多い。実例を見る限り「哲久（てつきゅう）」「良順（りょうじゅん）」のような「字（あざな）系統」の 2 文字名が殆どである。

4．3．1．4　男性名のモーラ　4 モーラ目

下記表 4-18 に男性名の 4 モーラ目の集計をまとめた。

あ		い	319	う	1,361	え	29	お	21
か	220	き	1,035	く	121	け	320	こ	644
が	14	ぎ		ぐ	53	げ	68	ご	
さ	333	し	481	す	187	せ	1	そ	
ざ	1	じ	2	ず	210	ぜ		ぞ	
た	22	ち	1,696	つ	185	て		と	100
だ	46	ぢ		づ		で	77	ど	10
な	7	に	31	ぬ		ね	33	の	
ば		び		ぶ	281	べ		ぼ	
ま		み	197	む		め		も	47
や				ゆ	3			よ	15
ら	5	り	341	る	237	れ		ろ	1,250

								ん	106

表 4-18　男性名の 4 モーラ目の分布図

4 モーラ目に用例数の多いモーラはランク 1 に「ち」「う」「ろ」「き」が入った。「ち」は主に「一」＝「いち」に由来し「う」はまず「郎」＝「ろう」からだと考えられていたが、表 4-17 の「ろ」の用例数に照合した結果開きは大きすぎ精査した所余剰部分は「三・蔵」の最終モーラに当っていたことが判明した。「ろ」は大まかに 2 種類の来源を持つ。まず、「○○たろう」「○○じろう」のような、「太郎」「次郎」を含めた通称系統の男性名パターン、次に「たかひろ」「たけひろ」のような「ひろ＝広・弘など」で終わる名乗り系統の男性名パターンである。「き」はルーツが二通りに分かれ「あき」か「ゆき」の何れで終わる名乗り系統になる。濁音は全体的に衰退傾向にあり「ず」「ぶ」だけは 200 位上の用例数を保っていた。一方、拗音と濁拗音は完全に消えている。

全体的に「が行」と「い段」に上位モーラが集まっているが、続けて低調してきた「う段」はこの 4 モーラ目ではようやく勢いを見せた感がある。

4．3．1．5　男性名のモーラ　5 モーラ目

男性名の 5 モーラ目のデータを表 4-19 に示す。

あ		い	2	う	770	え	1	お	
か		き		く	1	け	101	こ	
さ		し		す	2	せ		そ	
た	3	ち	1	つ	1	て		と	
ば		び		ぶ		べ	1	ぼ	
ま	1	み		む		め		の	13
ら	2	り		る		れ		ろ	455
								ん	12

表 4-19　男性名の 5 モーラ目の分布図

5 モーラ目となるとモーラの種類の減少は著しく「う」「ろ」のほか、「け」だけが辛うじて 101 例で百台をキープした。「う」は 1.5.1.4 で述べた「〇〇たろう」・「〇〇じろう」の最終モーラに当たり「ろ」は「〇〇いちろう」「〇〇さぶろう」の 5 番目モーラである。濁音は 1 例のみで拗音と濁拗音は勿論無く、 結局 5 モーラ目となれば訓読みの和名系統の男性名パターンは現れることはなく、残ったのは音読みの通称系統のみとなる。

4．3．1．6　男性名のモーラ　6、7、8 モーラ目

残りの 6、7、8 モーラ目をここにまとめよう。表 4-20 は 6 モーラ目のデータとなる。

あ		い		う	455	ろ	2	お	
か		き		く		け	2	こ	
ま		み		む		め		も	1
ら		り	1	る	1	れ		ろ	1
								ん	13

表 4-20　男性名の 6 モーラ目の分布図

「う」は 455 例、前述の表 4-19 の「ろ」の用例数と一致した。「ん」は全て「〇〇さ（う）えもん」の最終モーラである。

7 モーラ目、「う」1、「も」1、「ん」1。

8 モーラ目、「ん」1。

何れも「順番字」「ろう」「えもん」の組合せである。

例：じろうざえもん＝次郎左衛門

4．3．2　段別で見る男性名のモーラ

4.3.1 の補完調査として下記表 4-21、表 4-22、表 4-23、表 4-24、表 4-25 に各種のモーラの集計値を段別にまとめてみた。

清音	濁音	拗音	濁拗音	⇔	清音	濁音	拗音	濁拗音
13,541	740	1	1	あ段	6,946	97	1	1
19,855	1,875			い段	4,711	174		
12,679	1,839	522	318	う段	1,690	53	493	282
3,851	1,288			え段	1,966	131		
15,514	1,000	708	67	お段	4,128	84	640	53

表 4-21　段別全モーラ　　表 4-22　段別 1 モーラ目

清音	濁音	拗音	濁拗音	⇔	清音	濁音	拗音	濁拗音
2,905	499	0	0	あ段	3,094	83	0	0
4,997	175			い段	6,043	1524		
4,925	1,133	4	7	う段	2,738	109	25	29
867	981			え段	529	30		
3,039	103	11	0	お段	5,799	803	57	14

表 4-23　段別 2 モーラ目　　表 4-24 段別 3 モーラ目

	清音	濁音	清音	濁音	清音	濁音	清音	濁音
あ段	587	61	6	0	0	0	0	0
い段	4,100	2	3	0	1	0	0	0
う段	2,094	544	774	0	456	0	1	0
え段	383	145	102	1	4	0	0	0
お段	2,077	10	468	0	2	0	1	0

表 4-25　段別 4-8 モーラ目

全体的に「い段」のモーラ数が最多で、お段」がこれに次ぎ「え段」は最少で

この結果は 4.3.1 で上位モーラの集合状況と一致する。

濁音では「い段」と「う段」はほぼ同値でトップに就き、「あ段」は一番少なかった。拗音は「お段」が僅差で「う段」を抑えて 1 位を占める。「あ段」は 1 例しかなかった。濁拗音では「う段」が大きな優位性を示し首位に就いたが「お段」もある程度の存在感を示した。総じて女性名で示されたどちらかに偏る構図と違い、比較的に均衡性の保った分布状況をしている。

部位別に見ていくと、まず、1 モーラ目は「あ段」の一番用例数が多く、しかも全部位を通じて最多の用例数を有している。濁音は全体的に少なく「い段」は僅差で「え段」をリードする。やはり語頭モーラでは濁音に抵抗感があったようで拗音と濁拗音は全モーラの用例の殆どを占めた上、勢力図も酷似していた。

次に 2 モーラ目は「い段」と「う段」がほぼ同じ用例数で 1 位を競う。濁音は「う段」がトップで「え段」がそれに次ぐ。拗音と濁拗音は僅かあったものの、傾向性を見出すには難しい。

続いて 3 モーラ目は「い段」がトップで「お段」がそれを僅差で追う。両方とも全部位において自己最上位である。濁音では「い段」が最多で濁音全体においての最高用例数でもあった。拗音と濁拗音は 1 モーラ目の十分の一に萎縮したが、「う段」と「お段」の比率は保たれたように見える。

4 モーラ目は引き続き「い段」が首位を維持し濁音では「う段」が 1 位となり、2 モーラ目と類似性が見られる。この部位以降、拗音と濁拗音の用例がなくなった。

総じて「い段」と「お段」はほぼあらゆる部位において上位にとどまっており、部位のモーラ数の奇･偶によって上位の段が入れ替わる。これは男性名の漢字は 2 モーラのが多くモーラ数の奇･偶で語頭か語尾かが交代するため、本質的に日本語の語根（2 モーラ）の内部のモーラの母音配列に由来に影響を受けたのではないかと考えている。本稿において検証するに至らなかったため仮説として指摘した。

4．3．3　行別で見る男性名のモーラ

4.3.2 に続いて、男性名のモーラを行別に集計して、下記表 4-26 に示す。

	全	1 目	2 目	3 目	4 目	5 目	6 目
あ行	14,843	1,802	4,016	6,064	1,730	773	457
か行	9,542	3,400	2,616	1,082	2,340	102	2
さ行	9,628	2,056	4,084	2,484	1,002	2	0
た行	9,884	4,011	2,299	1,566	2,003	5	0
な行	2,241	820	700	650	71	0	0
は行	4,375	2,372	66	1,937	0	0	0
ま行	4,607	2,412	604	1,331	244	14	1
や行	4,138	2,377	419	1,324	18	0	0
ら行	6,070	159	1,864	1,754	1,833	457	3
わ行	112	35	66	11	0	0	0
きゃ行	92	80	3	9	0	0	0
しゃ行	716	660	9	47	0	0	0
ちゃ行	64	59	1	4	0	0	0
にゃ行	0	0	0	0	0	0	0
ひゃ行	5	5	0	0	0	0	0
みゃ行	8	1	0	7	0	0	0
りゃ行	346	329	2	15	0	0	0
が行濁	1,026	187	531	173	135	0	0
ざ行濁	3,513	189	870	2,241	213	0	0
だ行濁	1,216	96	1,009	24	133	0	0
ば行濁	941	67	481	111	281	1	0
ぱ行半濁	60	0	0	60	0	0	0

	全	1目	2目	3目	4目	5目	6目
ぎゃ行濁拗	8	8	0	0	0	0	0
じゃ行濁拗	378	328	7	43	0	0	0
びゃ行濁拗	0	0	0	0	0	0	0
ぴゃ行半濁拗	0	0	0	0	0	0	0

表 4-26　男性名のモーラの行別集計

男性名のモーラの行別集計では「あ行」が首位、「か行」「さ行」「た行」はほぼ同じ用例数でそれに次ぐ。拗音では「しゃ行」がほぼ独走状態で 2 位の「りゃ行」さえその半分に及ばなかった。濁音では「ざ行」が大差をもってリードし、拗濁音は「じゃ行」に集中している。こうして見れば清音枠以外では全てのトップは「さ行」に対応する音でこれらの特徴は女性名のと類似性が見られる。

続いて部位別に検討する。1 モーラ目は「か行」と「た行」が突出している。拗音枠では全体の 90%以上の用例を集め女性名の状況に似ている。濁音の用例数は多くはないものの、女性名の場合と比べて抵抗感をさほど感じなかった。拗濁音は拗音と同じく 1 モーラ目に殆どの用例が集まった。

2 モーラ目では 1 モーラ目と交代して、「あ行」と「さ行」がトップを占めた。拗音と拗濁音は殆どなくなったが「だ行」を始め濁音が勢いを増した。

3 モーラ目では 2 モーラ目に引き続き「あ行」と「さ行」は上位を占める。拗音と拗濁音は 1 モーラ目に次ぐ多い部位であるが数値にして多くなく濁音では「ざ行」が突出して多い。

4 モーラ目では、上位に 1 モーラ目の場合の「か行」と「た行」が返り咲く。これで上位モーラの入れ替わり構図が見られた。

1 モーラ目と 4 モーラ目　「か行」と「た行」
2 モーラ目と 3 モーラ目　「あ行」と「さ行」

つまり、全体で上位の 4 行の中で 2 行ずつ入れ替わっている。4 モーラ目の濁音枠は比較的に均衡的に分布している。拗濁音はここから途絶えた。

5 モーラ目から用例のある行は激減する。5 モーラ目は「あ行」は首位だったものの、「か行」「さ行」「た行」の用例数は振るわず、「ら行」に抑えられ 6 モーラ目となると「あ行」以外は殆ど用例がなくなっている。

4．3．4　男性名のモーラのまとめ

女性名と比べ男性名は強い漢字本位の性格を持つため、漢字表記と切り離してモーラだけ考察するには時々限界を感じることがある。特に男性名の漢字 1 文字に当てられるモーラ数は女性名より多く、3 モーラ目以降は何番目の漢字に属するかは判断が付きにくくなる。以上の事情で男性名の考察は女性名より難航しがちであった。

また、本稿の考察結果を田籠博（2005a）の語頭音の順位表と比較して女性名のと同様、高い類似性が見られる。

終章

本研究は日本人名の言語学的視点からその特徴の解明を目的とし、表記とモーラに分けて計量調査した上で時代別・男女別に統計分析を行った計量的な調査である。本論の部分で女性名と男性名の各々の表記と読みに対し、人名データベースを用い部位的、字数的、時代的などの面に焦点を当て、集計調査を行った。そこから得た集計データを文中に示す一方、精査して特徴や傾向性を見出すために分析した。この終章にて段階的な考察成果を報告し、残存課題の展望を記して本稿を終わりにする。

5．1　重要な考察結果

具体的な分析結果は既に各章・節にて指摘しているので、ここでは逐一に繰り返さない。重要ポイントのみ整理したい。まず、二つの重要結論を指摘し、5.1.1 と 5.1.2 にてそれぞれ具体的に説明する。

①女性の止め字の内、「美、恵（など）、代」について、漢字表記といいモーラといい何れにも止め字の定義に反すると思われる調査結果が現れた。

②女性名と男性名を言語学的に考察した結果、日本語に見られるジェンダー（女ことばと男ことば）のような性差の存在も確認できた。

5．1．1　女性名の止め字について

止め字について、先行研究ごとに意味の似たような用語は幾つかあったが、厳密かつ共通な定義はなかったため、本論第 2 章で筆者が新たに定義した。止め字の存在は非常に早い段階で認識されていたにもかかわらず、今日に至ってまだ統一明白な定義がないのは名の語学的特徴はまだ殆ど解明されておらずベールに包まれたままであるからである。故に、定義を下すことは難しくないものの、どこかで反対事例が確認され、結局どの定義も踏襲されることなく、一

過性のものに終わってしまうのである。

例えば田籠（2005b）の「名素」+「名辞」の発想では明らかに「名辞」そのものが止め字の用例を念頭にして作られた。その発想のスタートは極めて先駆的で評価すべきだったが、無理に全ての人名をこのパターンに収めようとしたことが結局混乱を招いた。その論文に既に調和できない逸脱例を作者の田籠自身も発見して指摘している。前述のように、完成度が高く全ての人名に適合するモデルを持って人名を一括に記述しようとする心情は理解出来るが、現在の人名、特に男性名のシステムは歴史的から見れば複数の系統[91]で構成されており、系統ごとに独自の特徴や構造を持っているので、人名を一つのパターンで記述しようとすることは極めて困難である。まして止め字（名辞）を持つことを前提としたら尚更理論の破綻を来してしまうであろう。

こうした経緯に鑑み、筆者は止め字の定義を考えた際まず人名は止め字を持つものと持たないもの両方あるとはっきり認識した。その上、止め字を持つ人名と言えども、必ずしも 1 つのパターンに収めると決めつけないこことした。例えるなら形容動詞には漢語由来のと和語由来のがあるように動詞には上一段動詞と下一段動詞とサ変動詞などがあるのと似ている。

結果、止め字を「顕在的止め字」と「潜在的止め字」と 2 種類に分けることとし考察を進めるにつれ「子、枝（江、恵など）、美、代」を同類とした従来の認識を覆すような結論に辿り着き「子」は顕在的止め字の定義を満たして止め字として認定した。一方、「えグループ、美、代」といった女性名を対象とした先行研究で必ず取り上げて言及される字種は、止め字の「人名の末尾に位置する」という基本条件をクリアできていないことが判明した。

以下、表記の上位字種を表 5-1 にモーラの上位仮名を表 5-2 に示す。

順位	全漢字		1 文字目		2 文字目		2 字名 2 字目		3 字名 2 字目		3 文字目	
1	子	1,523	美	136	子	1,049	子	1,049	美	79	子	474
2	美	312	真	62	美	149	美	70	[illegible]	33	美	27

[91]例えば、武士以上の階層の本名所謂名乗りの系統と通称の系統は漢風つまり中国式で、幼名の系統と庶民の名の系統は和風つまり日本式である。

順位	全漢字		1 文字目		2 文字目		2 字名 2 字目		3 字名 2 字目		3 文字目	
3	恵	98	和	52	代	66	枝	43	恵	25	里	7
4	代	70	千	50	枝	51	代	33	紀	19	恵	7
5	和	63	由	45	恵	46	江	24	智	17	江	4
6	真	62	恵	45	紀	34	恵	21	理	16	代	4
7	由	61	久	38	江	27	紀	15	由	15	枝	4
8	枝	56	裕	30	理	25	里	13	奈	13	紀	2
9	千	55	洋	26	奈	21	香	13	知	11	合	2
10	紀	45	明	25	里	21	穂	10	和	10	香	2
11	久	45	陽	24	智	19	理	9	合	8	奈	2
12	理	37	直	24	香	19	苗	8	枝	8	那	1

表 5-1　女性の止め字の表記の順位表

順位	全モーラ		1 モーラ目		2 モーラ目		3 モーラ目	
1	こ	1,547	み	235	み	186	こ	1,527
2	み	547	ま	171	い	179	え	128
3	え	276	あ	169	う	175	み	126
4	と	247	ゆ	141	き	147	り	59
5	き	233	と	140	り	120	と	36
6	い	219	か	118	さ	118	き	26
7	り	212	ひ	103	つ	107	か	19
8	さ	201	と	89	ず	105	る	12
9	か	199	さ	77	ち	90	な	11
10	ゆ	191	け	73	し	90	ぶ	7
11	ま	190	え	73	え	75	お	7

順位	全モーラ		1モーラ目		2モーラ目		3モーラ目	
12	う	179	な	72	ま	71	い	7

表 5-2　女性の止め字のモーラの順位表

まず表 5-1 を確認すると、

① 「美」は「子」の現れる部位では 2 位、現れない部位では 1 位をキープしてきた。中の 1 文字目と 3 文字名の 2 文字目は非末尾モーラで末尾モーラの総数を上回り、止め字の定義に反していることは明らかである。
② 「恵」は全ての部位において上位を保った。「恵」自身の「異形態」とも言える「江」「枝」とともに「美」に次いで「代」と共に上位を占めた。
③ 「代」は 1 文字目に現れなかったものの、他の部位では「美」と「恵」とほぼ変わらず全体的に見ても人名の末尾と非末尾の出現回数も殆ど同じだった。

このように「美」「恵」「代」は表記から見る場合、人名を構成する文字の位置の順番上、止め字の定義に反していることは明白である。

次に、表 5-2 のモーラの場合を見よう。

①「み」の順位は「美」とほぼかわらない。
②「え」の順位は 1 モーラ目と 2 モーラ目では後退したが、3 モーラ目では「み」を抑え 2 位に上昇した。この結果は「え」の止め字としての性格の現れである。更に 2 モーラ目の用例数を 2 モーラ名の 2 モーラ目即ち止め字と 3 モーラ名の 2 モーラ目即ち語中と分ければ、それぞれ 18 例と 57 例で結果、非止め字 130 例対止め字 144 例となった。数字的に止め字の方が若干優勢だが、非止め字の方も決して無視できる数ではない。
④ 「よ」のデータが示した情報は少々難解である。1 モーラ目では表記から見て上位に上がらなかったにも関わらず、モーラの方だけ上位 5 位に入っている。これは別の表記の読みによるものに違いない。2 モーラ目の順

位は高くなく、その内訳は 2 モーラ名の 2 モーラ目は 9 例、3 モーラ名の 2 モーラ目は 62 例で、非止め字の方が圧倒的に多い。結果非止め字は 2 モーラ名の 2 モーラ目の 9 例と 3 モーラ目の止め字 36 例の合計よりも多かった。

以上の計算はあくまでも表記とモーラを分離し、単純化して得た数値である。実際は表記とモーラの数には食い違いがあり、同じ表記で別の読みだったり、他の表記に当該モーラが含まれたりするケースが考えられる。最終的にそれらの実態を把握には更なる詳細な考察が要されるだろう。

止め字の本質は人名の末尾に多く現れるのが前提であるがそれだけではない。今回の考察で得られたデータが示す状況は、少なくとも女性名の止め字の定義について再考する必要があると問題提起するには十分である。

5．1．2　人名におけるジェンダー（文化的・社会的な性差）

日本の男性名と女性名は違う。恐らくこのような直感を持つ人は少なくはない。その違いは語彙的な意味に由来するものもある一方で、語学的構造にも存在するはずだと筆者が考えている。

世界的に見れば、男性名と女性名の区別の有無は言語によって異なる。同じキリスト教文化圏で、インド・ヨーロッパ語族に属す西欧諸国でも、宗派や言語によって様々である。しかし、殆どの場合慣習的に男性名か女性名かは分かれている。この上、ロシア語など「文法的性」を持つ言語ではフルネームの場合、男性名と女性名は同じ原語に由来する部分（ミドルネームと姓）でも実際の使用者の性別によって、男性形と女性形に変化する。そのため、男性か女性かは綴りレベルではっきり区別される[92]。一方、英語は性をほぼ失なっているので、男性名か女性名かについては慣習のみによって判断するそうだ。

西欧諸国のような「選択型」名付け方式と対照的に、漢字文化圏（或いは嘗て）の国々の名付け方式を「作成型」と名づけよう。そもそも日本語は文法的

[92]フランス語は「文法的性」が残っているが、名詞の曲用をなくしたため、名詞自体の語形に反映しないそうである

性を有しないため、男性名と女性名にはロシアのような違いはありえない。しかし、日常的な経験上、名前さえ分かれば同時に性別も判明できるのが殆どである（平成以前）。ただ筆者の経験上、現代の中国人でも韓国人でも名前で性別が判明できる比率は日本人を大きく下回る。それは中国語と韓国語では一つの漢字の読みは殆ど固定していて、日本語のような複数通りの読みを同時に持つことは殆どないからである。つまり漢字が持つ意味（イメージ）は唯一の参考であり、その字面を見て当てるしかない。極端な話だが、筆者の知り合いのある韓国人女性の名前は「正男」という。その本人に実際に対面する前まではてっきり男性だと思い込んでいたため共通の友人に実際紹介された時、実に驚いた。このような明らかに反対側の性別として捉えられる命名は中国にも時折見られ、主に男児祈願の発想によるものである。因みに「正男」女史は長女で、弟がいる。

これより本文の考察中に男女名の章で各々作成した基本データ表をまとめて示した上で比較しその差異を分析することで、言語学的な面においての人名のジェンダーの存在を明らかにしてゆきたい。

下記表 5-3 は男女名の文字数と字種数の比較である。男女の文字数の幅に差が見られる。男性名の 1～5 文字という広い幅を有することに対し、女性名は 1～3 文字で男性の半分程度に留まる。共に 2 文字名が 7 割前後で最多だが 2 番目は男性が 1 文字で女性が 3 文字で分かれる。

	文字数			字種数		
	男性	女性	男/女	男性	女性	男/女
全表記	40,564	5,118	7.93	1,232	563	2.19
1 字目	21,453	2,272	9.44	1,047	461	2.27
2 字目	17,257	2,192	7.87	644	219	2.94
3 字目	1,812	654	2.77	101	47	2.15

表 5-3　男女名の文字数と字種数の比較

文字数と字種の比較を見る限り、男女差は寧ろ少なかった。

表 5-4 は男性名と女性名のモーラ数の比較である。

	2 モーラ	3 モーラ	4 モーラ	5 モーラ	6 モーラ[93]
男性名	2.24%	50.64%	40.75%	4.15%	2.20%
女性名	11.62%	88.12%	0.26%	―	―

表 5-4　男性名と女性名のモーラ数の比較

男性名の 2～8 モーラの幅広に対し、女性名は 2～4 モーラで半分にとどまる。男女ともに 3 モーラ名が首位であるが、それぞれの占める割合は大きくかけ離れており、モーラ数の二番に多い部位も違う。男性名は 3 モーラと 4 モーラに集中しほぼ均等的に分布しているのに対し、女性名の場合はもともと分布範囲が絞られた上、3 モーラに極端に集中する傾向にあった。このようなモーラ数の分布傾向の違いは男性名と女性名の本来それぞれ持つ系統の影響だと考えられる。なお、男性名の平均モーラ数は 3.53 モーラで女性名の 2.89 モーラを上回るがこの平均モーラ数の差は名値の性差指示機能の証明だと捉えられよう。

表 5-5 は男女名のモーラ数とモーラ種数の比較である。

	モーラ数		モーラ種数	
	男性名	女性名	男性名	女性名
全モーラ	75,834	6,558	84	66
1 モーラ目	21,453	2,272	75	50
2 モーラ目	21,453	2,272	69	54
3 モーラ目	20,973	2,008	78	30
4 モーラ目	10,109	6	39	2
5 モーラ目	1,366	―	15	―
6 モーラ目	476	―	8	―

[93] 7 モーラと 8 モーラの用例数は極端に少なく四捨五入すれば 0 となったため省略した

7モーラ目	3	―	3	―
8モーラ目	1	―	1	―

表 5-5　男女名のモーラ数とモーラ種数の比較

男性名のモーラ数は女性名の約 10 倍だがモーラの種類数は僅か 3 割増程度に留まる。これもまた未検証の推測にすぎないが、この 3 割の差も用例数の差に由来するものより、男女名各自の使用するモーラの種類の差によるものだと考えられるが、その理由は以下の通りである。

用例数の決定的な差もあって男性名と女性名のモーラの種類を直接に比較することはできないが、男性名の使用例の 10 例（含む）以下のモーラを取り除くと 73 種類のモーラが残った。つまり用例数の多い男性名の個人差に依る影響（少数派のモーラ）を排除し、用例数に左右されない基本常用モーラを抽出して得た常用モーラだけでも女性名の全モーラ（単独用例 6 例を含む）66 種類より多かった。従って「男性名で使用されるモーラの種類は女性より多い」と結論づけられる。

表 5-6 は男女名のユニット数とユニット種類数の比較である。

	ユニット数		ユニット種類	
	男性名	女性名	男性名	女性名
全データ	40,485	5,042	543	227
1字目	21,424	2,242	479	205
2字目	17,226	2,162	267	67
3字目	1,801	638	62	23
4字目	31	―	6	―
5字目	3	―	2	―

表 5-6　男女名のユニット数とユニット種類数の比較

ユニット数は表記数に近似しているため、繰り返しは控えるが、男女ともに表

記の字種数とユニットの種類数に顕著な差が存在する。上記表 5-6 と表 5-3 を比較するとユニットの種類数は表記の字種数の半分以下に減少していることは明らかで、この減少傾向は男性名も女性名も同じだが女性名の 2 字目の減少具合は特に際立ち三分の一以下まで低下している。

男性名の全ユニットから用例数 10 例（含む）以下のユニットを取り除き 228 種類のユニットが得られた。この種類数はまだ女性名の全ユニット種類 227 種類（11 例以上は 69 種類、1 例以上は 154 種類[94]）を上回っている。つまり男性名と女性名の全データ数とは関係なく、男性名のユニット種類は女性より豊富だと主張できる。

一方、男性名の表記から用例数 10 例（含む）以下の字種を除き、357 字種を得られこの字種数は女性名の全 563 字種を超えなかった。女性名の単独字種（用例 1 例のみ）を除いて再集計すれば、347 字種となる。男性名の常用字種でぎりぎりカバーできた。このように絶対的までとは言えないものの、表記においても男性名が女性名の字種数より多いことに変わりはない。

5．2　今後の課題

本論文で主として表記（仮名名を含む）とモーラに分けて集計・調査を行ったものであるが、実際は表記とモーラの数にはずれもある。同じ表記で別の読みだったり他の表記に当該モーラが含まれたりするケースも考えられるため最終的に、それらの実態を把握するには更なる細かい考察を要することが明らかである。

人名の実態及びその特徴、類型性、傾向性を言語学的な視点から解明するには、データベースの用例を全体視するのみならずミクロ的な考察を進める必要もある。本論文においては人名を文字数別、人名を構成する要素の位置別及び命名の時代別等を巡って考究してきたが、資料の充実・精緻化・分析の多元化及び時代差や男女差についての解釈等について更なる課題として研究を続けねばならない。その上で中国人名との比較研究は本研究のまたの目的とする。

---

[94]男性名の 1 例以上の用例数は 407 例ある。

なお、「平成人名」については本稿で使用している人名データベースの性格上の制限を受け考察対象とならなかった。「平成人名」は難しくて読めないといった声があって久しい。その成因に関して近年社会的な関心が高まりつつあり、その解明に挑む研究者も現れたものの未だ解明に至っていない。筆者は言語学的な観点からの調査が有効な手段だと考えている。なぜなら難しい、読めないというのは、それと比べて優しい・読みやすいのがあってからの感想であり、つまり、読めない平成人名に対して、それ以前の読める人名があるわけである。従って、両者の違いを言語学的なレベルで解明すればその難しさの由来も明らかになり、対処方法も考えられるかもしれないのだ。筆者は、平成人名の成因を探れば前述の女性名の止め字と人名のジェンダーともつながっていると考えている。今後も平成人名の実例データを収集、データベースを構築し、基本データの取得から検証していきたい所存である。

付録

付録１　人名データベース特別注意事項マーク表

分類	符号	現象	表記例	読み例
表記と読みの対応関係に影響あるもの	A	読みに「の」「が」「な」「つ」あり、当てる字なし	井　上	い　の　う　え
	B	熟語。表記と読みの関連性不明。字数×２＝読み	服　部	はっとり
	B	熟語。二字または三文字の内の二字が関連性不明		
	B	熟語か分割可能だがその一部が当て字か意味不明	稲　荷	いなり
	B	熟語。漢字二字で一拍	五十嵐	いがらし
	B	熟語。二或は三文字で一つの語彙	主　税	ちから
	C	読みの音節脱落。漢字あり、読みなし	吉　右　衛　門	きち　え　もん
	D	前後同一音合併、拍減少。また、単純脱落	吉　識	よ　しき
	E	前方音の母音脱落、後方無子音母音と短縮結合	常　磐	ときわ
	F	その他、極特殊なケース：類義語二字一読み、二文字で一つの読みで表す	顕　彰	あきら
表記と読みの対応関係に影	G	撥音便：名根間、名根内	公　一	きんかず
	H	促音便	一　成	いっせい
	I	拗音便	柳　生	やぎゅう
	J	連声	文　雄	ぶん　のう
	K	清音化	海　部	かい　ふ
	L	う音便子音脱落。拍数が加減しない	日　向	ひうが

響ないもの		物		
	M	一つの名根内、ア段からオ段、長音化。拍数が加減しない物	上　滝	こう　たき
	N	二つの名根間、ア段からオ段、長音化。拍数が加減しない物	左　右　田	そ　う　だ
	O	え段からあ段に母音交替	稲荷	いなり
	P	お段からあ段に母音交替	白　石	しら　いし
	Q	その他の同行音便	色　摩	しか　ま
	R	連濁	小林	こばやし
	S	連濁。前の字の最後の音	秩　子	ちづこ
	T	連濁。後ろの字の最初の音半濁音化	金　平	きんぺい
	U	擬似連濁		
ただ、留意するまで	V	重箱読み		
	W	代用字	嘉　朗	よし　お
	X	文字合わせ　２字	上　里	あが　り
	Y	「兵衛」関係		
	1	名前、仮名漢字交じり	たか子	
	2	名前、仮名のみ		
	3	名前、歴史仮名		
	4	旧字体あり（104P まで）		
	5	「ヶ」か「ノ」か「ツ」の何れあり	一　番　ヶ　瀬	いち　ばん　が　せ
	6	「々」「ゞ」あり	す　ゞ　子	す　ず　こ
	7	面白		
	8	**表外字**		
	9	**異体字**		

付録２　女性名全部位字種横比べ

	全漢		１字		２の１		３の１		２の２		３の２		３の３	
1	子	1523	愛	7	美	54	美	82	子	1049	美	79	子	474
2	美	312	恵	6	和	51	真	34	美	70	代	33	美	27
3	恵	98	緑	3	真	28	千	31	枝	43	恵	25	里	7
4	代	70	忍	3	裕	27	由	30	代	33	紀	19	恵	7
5	和	63	香	3	洋	26	久	21	江	24	智	17	江	4
6	真	62	歩	3	直	24	喜	19	恵	21	理	16	代	4
7	由	61	都	2	陽	24	恵	16	紀	15	由	15	枝	4
8	枝	56	綾	2	明	23	佐	10	里	13	奈	13	紀	2
9	千	55	文	2	恵	23	奈	9	香	13	知	11	合	2
10	紀	45	英	2	幸	22	登	9	穂	10	和	10	香	2
11	久	45	静	2	雅	21	三	8	理	9	合	8	奈	2
12	理	37	史	2	千	19	百	8	苗	8	枝	8	那	1
13	奈	35	昌	2	京	17	富	7	生	8	佐	8	世	1
14	里	35	翠	2	久	16	眞	7	弓	8	津	8	実	1
15	智	34	藍	1	道	16	多	7	奈	8	里	8	栄	1
16	江	32	巴	1	慶	15	理	6	実	8	矢	7	絵	1
17	香	32	光	1	由	15	麻	6	世	6	久	7	理	1
18	裕	30	紅	1	悦	14	寿	6	保	5	鶴	6	女	1
19	喜	27	碧	1	文	14	加	6	貴	5	貴	6	勢	1
20	洋	26	悦	1	純	14	智	5	栄	4	利	6	乃	1
21	幸	25	怜	1	郁	14	満	5	織	4	香	6	為	1
22	明	25	彩	1	愛	14	貴	5	佐	3	寿	6		
23	直	24	凪	1	敏	14	有	4	緒	3	千	5		
24	陽	24	花	1	祐	13	比	4	重	3	衣	5		
25	佐	23	柊	1	芳	13	香	4	津	3	都	5		
26	知	22	滋	1	正	13	志	4	名	3	希	4		
27	愛	21	茂	1	葉	12	実	4	月	3	士	4		

	全漢		1字		2の1		3の1		2の2		3の2		3の3	
28	雅	21	耳	1	順	12	友	3	幸	3	砂	4		
29	貴	21	涼	1	澄	12	冨	3	春	2	世	4		
30	寿	20	淑	1	良	11	亜	3	波	2	根	4		

付録３　男性名全部位字種横比べ

	全字種		漢字１字目		１字名		２字１字目		３字１字目	
1	一	2096	正	849	清	98	正	706	喜	52
2	郎	2019	一	470	博	94	一	423	健	38
3	夫	1363	英	344	宏	91	義	318	三	37
4	雄	1291	俊	329	正	86	和	303	正	34
5	正	965	義	328	隆	82	英	299	富	33
6	三	836	信	318	明	81	俊	296	信	24
7	男	678	和	317	誠	81	秀	282	徳	23
8	二	664	秀	317	茂	78	信	273	英	21
9	彦	650	隆	301	進	71	良	205	洋	20
10	治	553	健	274	豊	70	隆	196	日	19
11	太	458	清	273	実	69	幸	194	伊	19
12	義	455	武	263	弘	65	忠	188	雄	19
13	信	427	博	254	徹	64	武	183	久	18
14	之	414	忠	229	健	61	康	183	栄	17
15	明	411	良	226	稔	59	敏	180	誠	17
16	和	399	孝	215	修	58	健	173	弥	16
17	英	399	幸	215	浩	55	光	171	大	16
18	次	391	康	214	武	53	文	152	源	16
19	俊	382	勝	206	孝	50	清	152	孝	16
20	隆	378	敏	205	昇	49	勝	150	幸	16
21	弘	368	昭	197	勇	48	孝	144	陽	15
22	秀	346	弘	195	勝	48	泰	141	新	15
23	博	337	光	193	昭	47	雅	137	善	14
24	昭	330	哲	193	功	43	三	137	千	14
25	久	327	茂	184	晃	42	昭	137	清	14
26	幸	319	誠	183	淳	42	博	136	敬	14
27	孝	295	泰	181	洋	41	重	134	謙	14

	全字種		漢字１字目		１字名		２字１字目		３字１字目	
28	武	294	直	179	寛	40	直	127	太	14
29	良	285	浩	178	裕	39	邦	125	啓	13
30	清	281	三	174	章	39	利	123	藤	13

漢字２字目		２字２字目		３字２字目		漢字３字目		３字３字目	
一	1623	一	1273	一	349	郎	1243	郎	1243
夫	1291	夫	1211	太	339	助	85	助	85
雄	1129	雄	1087	三	170	夫	72	夫	72
郎	764	郎	747	次	145	雄	64	雄	64
三	653	彦	621	之	111	男	60	男	60
彦	630	男	588	二	107	衛	47	衛	29
男	618	二	488	四	48	介	13	介	13
二	595	三	476	治	36	太	13	治	12
治	457	治	419	久	31	治	12	志	11
之	402	之	288	兵	28	志	11	古	9
太	375	明	261	士	26	三	9	朗	9
次	336	也	215	八	19	朗	9	三	8
明	263	平	203	五	18	古	9	良	7
司	240	次	191	出	17	次	8	二	7
也	216	人	178	喜	16	良	7	次	6
平	207	司	175	志	16	二	7	輔	6
樹	201	弘	172	千	15	輔	6	太	6
人	193	吉	166	十	15	彦	5	也	5
久	183	久	149	代	13	也	5	代	5
吉	175	行	147	紀	11	代	5	彦	5
弘	173	昭	132	美	10	美	4	士	4
行	147	生	130	佐	10	士	4	吉	4
介	138	義	124	吉	9	吉	4	美	4

漢字２字目		２字２字目		３字２字目		漢字３字目		３字３字目	
生	135	正	116	知	9	馬	3	一	3
昭	133	美	111	七	8	右	3	馬	3
義	127	信	109	比	8	典	3	典	3
美	125	幸	104	九	8	一	3	丸	3
正	116	文	100	矩	7	丸	3	臣	3
史	114	朗	96	加	6	松	3	松	3
志	109	蔵	91	重	5	臣	3	八	2

付録４　当用漢字表

一	健	務	嘆	姿	左	性	排	暴	殉	澄	疾	窯	繊	荘	語	輝	錠	飲
丁	側	勝	器	威	巧	怪	掘	暦	殊	沢	病	窃	欠	茎	誠	輩	銭	飯
七	偶	労	噴	娘	巨	恒	掛	曇	殖	激	症	立	罪	菊	誤	輪	錯	飼
丈	傍	募	嚇	娯	差	恐	採	暁	残	濁	痘	並	置	菌	説	輸	錬	飽
三	傑	勢	厳	娠	己	恥	探	曜	段	濃	痛	章	罰	菓	課	轄	鍛	飾
上	備	勤	嘱	婆	市	恨	接	曲	殺	湿	痢	童	署	菜	調	転	鎖	養
下	催	勲	囚	婚	布	恩	控	更	殿	済	痴	端	罷	華	談	辛	鎮	餓
不	伝	励	四	婦	帆	恭	推	書	殴	濫	療	競	羊	万	請	弁	鏡	余
且	債	勧	回	婿	希	息	措	替	母	浜	癖	竹	美	落	論	辞	鐘	館
世	傷	勺	因	媒	帝	悦	描	最	毎	滝	登	笑	着	葉	諭	辱	鉄	首
丘	傾	匁	困	嫁	帥	悔	堤	会	毒	瀬	発	笛	群	著	諮	農	鋳	香
丙	働	包	固	嫡	師	悟	揚	月	比	湾	白	符	義	葬	諸	込	鑑	馬
中	像	化	圏	嬢	席	患	換	有	毛	火	百	第	羽	蒸	諾	迅	鉱	駐
丸	僚	北	国	子	帳	悲	握	服	氏	灰	的	筆	翁	蓄	謀	迎	長	騎
丹	偽	匠	囲	孔	帯	悼	掲	朕	民	災	皆	等	翌	薄	謁	近	門	騰
主	僧	匹	園	字	常	情	揮	朗	気	炊	皇	筋	習	薦	謄	返	閉	騒
久	価	匿	円	存	帽	惑	援	望	水	炎	皮	筒	翼	薪	謙	迫	開	駆
乏	儀	区	図	孝	幅	惜	損	朝	氷	炭	盆	答	老	薫	講	迭	閑	験
乗	億	十	団	季	幕	恵	揺	期	永	烈	益	策	考	蔵	謝	述	間	驚
乙	倹	千	土	孤	幣	悪	捜	木	求	無	盛	箇	者	芸	謡	迷	閣	駅
九	儒	升	在	孫	干	惰	搬	未	汗	焦	盗	算	耐	薬	謹	追	閥	骨
乳	償	午	地	学	平	悩	携	末	汚	然	盟	管	耕	藩	証	退	閲	髄
乾	優	半	坂	宅	年	想	搾	本	江	煮	尽	箱	耗	虐	識	送	関	体
乱	元	卑	均	宇	幸	愁	摘	札	池	煙	監	節	耳	処	譜	逃	防	高
了	兄	卒	坊	守	幹	愉	摩	朱	決	照	盤	範	聖	虚	警	逆	阻	髪
事	充	卓	坑	安	幻	意	撤	几	汽	煩	目	築	聞	虜	訳	透	附	闘
二	兆	協	坪	完	幼	愚	撮	朽	沈	熟	盲	篤	声	虞	議	逐	降	鬼
互	先	南	垂	宗	幽	愛	撲	材	没	熱	直	簡	職	号	護	途	限	魂

五	光	博	型	官	幾	感	擁	村	沖	燃	相	簿	聴	蚊	誉	通	陛	魅
井	克	占	埋	宙	床	慎	択	束	河	燈	盾	籍	粛	融	読	速	院	魔
亜	免	印	城	定	序	慈	撃	杯	沸	焼	省	米	肉	虫	変	造	陣	魚
亡	児	危	域	宜	底	態	操	東	油	営	看	粉	肖	蚕	譲	連	除	鮮
交	入	却	執	客	店	慌	担	松	治	燥	真	粒	肝	蛮	谷	逮	陪	鯨
享	内	卵	培	宣	府	慕	拠	板	沼	爆	眠	粗	肥	血	豆	週	陰	鳥
京	全	巻	基	室	度	惨	擦	析	沿	炉	眼	粘	肩	衆	豊	進	陳	鳴
人	両	卸	堂	宮	座	慢	挙	林	況	争	睡	粧	肪	行	豚	逸	陵	鶏
仁	八	即	堅	宰	庫	慣	擬	枚	泉	為	督	粋	肯	術	象	遂	陶	塩
今	公	厘	堤	害	庭	慨	拡	果	泊	爵	瞬	精	育	街	豪	遇	陥	麗
介	六	厚	堪	宴	庶	慮	摂	枝	泌	父	矛	糖	肺	衝	予	遊	陸	麦
仕	共	原	報	家	康	慰	支	枯	法	片	矢	糧	胃	衛	貝	運	陽	麻
他	兵	去	場	容	庸	慶	収	架	波	版	知	系	背	衡	貞	遍	隆	黄
付	具	参	塊	宿	廉	憂	改	柄	泣	牛	短	料	胎	衣	負	過	隊	黒
代	典	又	塑	寂	廊	憎	攻	某	注	牧	石	紀	胞	表	財	道	階	黙
令	兼	及	塔	寄	廃	憤	放	染	泰	物	砂	約	胴	衰	貢	達	隔	点
以	冊	友	塗	密	広	憩	政	柔	泳	性	砲	紅	胸	衷	貧	違	際	党
仰	再	反	境	富	庁	憲	故	査	洋	特	破	紋	能	袋	貨	逓	障	鼓
仲	冒	叔	墓	寒	延	憶	叙	柱	洗	犠	研	納	脂	被	販	遠	隣	鼻
件	冗	取	墜	察	廷	憾	教	柳	津	犬	硝	純	脅	裁	貫	遣	随	斎
任	冠	受	増	寡	建	懇	敏	校	活	犯	琉	紙	脈	裂	責	適	険	歯
企	冬	口	墨	寝	弊	応	救	株	派	状	硬	級	脚	裏	貯	遭	隠	齢
伏	冷	古	堕	実	式	懲	敗	核	流	狂	碁	紛	脱	裕	弐	遅	隷	
伐	准	句	墳	寧	弓	懐	敢	根	浦	狩	砕	素	脹	補	貴	遵	隻	
休	凍	叫	墾	審	弔	懸	散	格	浪	狭	碑	紡	腐	装	買	遷	雄	
伯	凝	召	壁	写	引	恋	敬	裁	浮	猛	確	索	腕	裸	貸	選	雅	
伴	凡	可	壇	寛	弟	成	敵	桃	浴	猶	磁	紫	脳	製	費	遺	集	
伸	凶	史	圧	寮	弦	我	敷	案	海	獄	礁	累	腰	複	貿	避	雇	
伺	出	右	塁	宝	孤	戒	数	桑	浸	独	磯	細	腸	襲	賀	還	雌	

似	刀	司	壊	寸	弱	戦	整	梅	消	獲	示	紳	腹	西	賃	辺	双	
但	刃	各	士	寺	張	戯	文	条	渉	猟	杜	紹	膚	要	賄	邦	雑	
位	分	合	壮	封	強	戸	斗	械	液	獣	祈	紺	膜	覆	資	邪	離	
低	切	吉	壱	射	弾	房	料	棄	涼	献	祉	終	膨	見	賊	邸	難	
住	刈	同	寿	将	形	所	斜	棋	淑	玄	秘	組	胆	規	賓	郊	雨	
佐	刊	名	夏	専	彩	扇	斤	棒	涙	率	祖	結	臓	視	賜	郎	雪	
何	刑	后	夕	尉	彫	手	斥	森	淡	玉	祝	絶	臣	親	賞	郡	雲	
仏	列	吏	外	尊	彰	才	新	棺	浄	王	神	絞	臨	覚	賠	部	零	
作	初	吐	多	尋	影	打	断	植	深	珍	祥	絡	自	覧	賢	郭	雷	
佳	判	向	夜	対	役	扱	方	業	混	珠	票	給	臭	観	売	郵	電	
使	別	君	夢	導	彼	扶	施	極	清	班	祭	統	至	角	賦	都	需	
来	利	吟	大	小	往	批	旅	栄	浅	現	禁	糸	致	解	質	郷	震	
例	到	否	天	少	征	承	旋	構	添	球	禍	絹	台	触	頼	配	霜	
侍	制	含	太	就	待	技	族	概	減	理	福	経	与	言	購	酒	霧	
供	刷	呈	夫	尺	律	抄	旗	楽	渡	琴	禅	緑	興	訂	贈	酢	露	
依	券	呉	央	尼	後	抑	既	楼	測	環	礼	維	旧	計	賛	酬	霊	
侮	刺	吸	失	尾	除	投	日	標	港	璽	秀	綱	舌	討	赤	酪	青	
侯	刻	吹	奇	尿	径	抗	旨	枢	渇	甘	私	網	舎	訓	赦	酵	静	
侵	則	告	奉	局	徒	折	早	模	湖	生	秋	綿	舗	託	走	酷	非	
便	削	周	奏	居	得	抱	旬	様	湯	産	科	緊	舞	記	赴	酸	面	
係	前	味	契	届	従	抵	昇	樹	源	用	秒	緒	舟	訟	起	酔	革	
促	剖	呼	奔	屈	御	押	明	橋	準	田	租	線	航	訪	超	醜	音	
俊	剛	命	奥	屋	復	抽	易	機	温	由	秩	締	般	設	越	医	韻	
俗	剰	和	奪	展	循	払	昔	横	溶	甲	移	縁	舶	許	趣	醸	響	
保	副	咲	奨	層	微	拍	星	検	滅	申	税	編	船	訴	足	釈	頂	
信	割	哀	奮	履	徴	拒	映	桜	滋	男	程	緩	艇	診	距	里	項	
修	創	品	女	属	徳	拓	春	欄	滑	町	稚	緯	艦	詐	跡	重	順	
俳	劇	員	奴	山	徹	抜	昨	権	滞	界	種	練	良	詔	路	野	預	
俵	剤	哲	好	岐	心	拘	昭	次	滴	畑	称	縛	色	評	跳	量	頒	

併	剣	唆	如	岩	必	拙	是	欲	満	畔	稲	県	芋	詞	踊	金	領	
倉	力	功	妃	岸	忌	招	時	欺	漁	留	稿	縫	芝	詠	踏	針	頭	
個	加	劣	妊	峠	忍	拝	晩	款	漂	畜	穀	縮	花	試	践	鈍	題	
倍	助	努	妙	峰	志	括	昼	歌	漆	畝	積	縦	芳	詩	躍	鈴	額	
倒	努	効	妥	島	忘	拷	普	欧	漏	略	穂	総	芽	詰	身	鉛	顔	
候	効	劾	妨	峡	忙	拾	景	歓	演	番	穏	績	苗	話	車	銀	願	
借	劾	勅	妹	崇	忠	持	晴	止	漢	画	獲	繁	若	該	軌	銃	類	
倣	勅	勇	妻	崩	快	指	晶	正	漫	異	穴	織	苦	詳	軍	銅	顧	
値	勇	勉	姉	岳	念	振	暇	歩	漸	当	究	繕	英	誇	軒	銑	顕	
倫	勉	動	始	川	怒	捕	暑	武	潔	畳	空	絵	茂	誌	軟	銘	風	
仮	動	勘	姓	州	怖	捨	暖	歳	潜	疎	突	繭	茶	認	軸	鋭	飛	
偉	勘		委	巡	思	掃	暗	歴	潤	疑	窒	繰	草	誓	較	鋼	翻	
偏			姫	巣	怠	授	暫	帰	潮	疫	窓	継	荒	誕	載	録	食	
停			姻	工	急	掌	暮	死	渋	疲	窮	続	荷	誘	軽	錘	飢	

付録５　当用漢字旧字体と異体字

旧字体	
佛	條
來	樂
傳	櫻
價	滯
兒	濕
單	狹
國	盡
團	祕
壘	縣
壞	藝
壽	轉
專	逮
峽	鑄
帶	顯
廣	飜
廳	
應	
拂	
攝	
晝	

異体字						
併	寶	樞	獻	膽	貳	驅
假	對	權	畫	臺	贊	驛
兩	屆	歐	當	舊	踐	髓
劑	屬	勸	發	莖	輕	體
勞	嶽	歸	研	萬	辨	鹽
勵	廢	殘	禮	處	辭	麥
勸	徑	毆	稱	號	遞	點
區	參	淺	穩	蟲	遲	黨
卽	戀	滿	竊	蠶	邊	齋
參	擇	潛	竝	蠻	醫	齒
嚴	擔	澤	絲	覺	釋	齡
圍	據	濟	經	觀	錢	
圓	擧	濱	總	觸	鐵	
圖	擴	瀧	繪	證	鑛	
墮	數	灣	繼	譯	關	
壓	斷	營	續	譽	隨	
壹	曆	爐	缺	讀	隱	
學	會	犧	聲	變	雙	
實	榮	獨	肅	豐	靈	
寫	樓	獵	腦	豫	餘	

人名資料編

別冊を参照

参考文献

Ⅰ　雑誌論文

麻生健人（1992）　「女性名の文字が表す意味 ： 短大生の名前にみる命名の心理」『松山東雲短期大学研究論集』（23）pp.51-64　松山東雲女子大学・松山東雲短期大学

麻生健人（1994）　「女性名を構成する音 ： 短大生の名前に見る名前の型」『松山東雲短期大学研究論集』（25）pp.11-31　松山東雲女子大学・松山東雲短期大学

阿辻哲次（2005）　「子供の名前につけたい漢字」『月刊言語』34（9）pp.6-7　大修館

飯沼賢司（1988）　「氏と名字と姓」『歴史評論』（457）pp.16-20　校倉書房

井戸田博史(1998)　「明治前期の改名禁止法制」『帝塚山法学』（通号 1）pp.49 - 81　帝塚山大学法学会編

井上文雄（2006）　「読めない漢字」『日本語学』25（11）p73　明治書院

宇根俊範（1989）　「氏(ウヂ)の名のごとき個人名」『史学研究』（通号 185）pp.1-22　広島史学研究会

江澤建之助（1982）　「ドイツ人の名前」『言語生活』（通号 361）pp.40-43　筑摩書房

円満字二郎（2005）　「『人名用漢字』顛末記」『月刊言語』34（3）pp.56-57　大修館

大森政輔（1982）　「人名用漢字の範囲拡大――民事行政審議会の答申について」『言語生活』（通号 361）pp.24-31　筑摩書房

奥富敬之（2006）　「地名と名字と苗字」『月刊言語』35（8）pp.58-65　大修館

小倉宏之（2003）　「名前の流行クロニクル――使われる漢字を中心に」『月刊しにか』14（7）pp.36-43　大修館書店

乙部二郎（1976）　「人名用漢字の制限について――『人名用漢字追加表』設定の経緯」『言語生活』（通号 302）pp.50-57　筑摩書房

金武伸弥（2006）　「新常用漢字表と固有名詞」『日本語学』25（11）pp.66-77　明治書院

唐牛誠（1986）　「名前考現学――現代高校生の名前を中心に」『言語生活』（通号420）pp.68-78,　筑摩書房
川嶋秀之（2003）　「当て字と熟字訓――その難しさと魅力」『月刊しにか』14（5）pp.34-39　明治書院
紀田順一郎（2003）　「当世名付け事情」『月刊しにか』14（7）pp.14-19　大修館書店
木股知史（2005）　「物語としての名前」『月刊言語』34（3）pp.44-45　大修館
月刊しにか編集部（2003）　「『人名と漢字に関するアンケート調査』結果発表!! 」『月刊しにか』14（7）pp.57-63　大修館書店
言語生活（1958）　「姓名の分類排列はむずかしい――電々公社と厚生省年金業務室を訪ねて」『言語生活』（通号 82）pp.48-51　筑摩書房
坂井田ひとみ（1996）　「中国人の姓氏名字考」『社会科学研究』16（2）pp.93-108　中京大学社会科学研究所
笹原宏之（2006）　「地名を表す漢字」『月刊言語』35（8）pp.42-50　大修館
佐竹秀雄（1976）　「小説にあらわれた人名」『言語生活』（通号 302）pp.30-37　筑摩書房
佐藤喜代治（1976）　「日本の人名の歴史」『言語生活』（通号 302）pp.18-29　筑摩書房
佐藤若菜（2001）　「日本人の名前――現代にみられる特徴」『日本文学ノ-ト』（通号 36）pp.74-58　宮城学院女子大学日本文学会
修徳健（2001）　「人名と漢字について：日中の比較を通じて」『同志社国文学』（通号 54）pp.42-49　同志社大学国文学会
寿岳章子（1958）　「女のなまえ――ある村でのはなし」『言語生活』（通号 76）pp.39-45　筑摩書房
杉本嘉八・仲見秀雄・筑紫申眞（1956）　「庶民の苗字と裃」『日本歴史』（通号 99）pp.43-46　吉川弘文館
鈴木聡（2005）　「『熊谷氏』と『とるキーン』」『月刊言語』34（1）pp.82-87　大修館
髙本條治（2003）　「名前の読み方今昔物語――『名乗り』について」『月刊しにか』14（7）pp.28-33　大修館書店

田籠博（2005a）　「人名の語頭音と語末音」『島大言語文化』（通号 18）pp.1-26　島根大学法文学部

田籠博（2005b）　「人名の語構造」『語文研究』（通号 99）pp.1-10　九州大学国語国文学会

田中康仁（1982）　「戦後生まれのなまえ」『言語生活』（通号 361）pp.32-38　筑摩書房

土田尚純・大山実・篠岡信（1984）　「日本人の名前アクセント型付与規則(技術談話室)」『電子通信学会論文誌 D 』67（5）pp.625-626　電子通信学会

東道鉄二（1981）　「人名と文字についての意識と知識――大学生の調査から」『言語生活』(通号 357)pp.80-85　筑間書房

丹羽基二（2001）　「人名・地名おもしろ漢字学」『月刊しにか』12（6）pp.28-31　大修館

丹羽基二（2003）　「珍難姓のはなし――辞書にも載らない漢字いろいろ」『月刊しにか』14（7）pp.52-56　大修館書店

野元菊雄（1996）　「近過去の女性名（その１）」『文林』（通号 30）pp.37-57　神戸松蔭女子学院大学

野元菊雄（1998）　「近過去の女性名（その 3)」『文林』（通号 32）pp.17-35　神戸松蔭女子学院大学

林史典（2003）　「湯桶読みと重箱読み――和語と漢語の混種語――その表記と読み方」『月刊誌にか』14（5）pp.30-33　明治書院

飛田良文（2003）　「漢字の読みはなぜ難しいか」『月刊しにか』14（5）pp.14-19　明治書院

平川南（1996）　「古代における人名の表記――最新の木簡から発して」『国史学』（通号 161）pp.1-30　国史学会

福地重孝（1951）　「幕末期に於ける苗字帯刀御免者の性格――豊津藩の場合」『日本歴史』（通号 38）pp.22-24　吉川弘文館

彭国躍（2005）　「中国の言語政策とイデオロギー――『文字革命』の発生と挫折」『月刊言語』34（3）pp.76-85　大修館

洞富雄（1952）　「江戸時代の一般庶民は果して苗字を持たなかつたか」『日本歴史』（通号 50）pp.2-7　吉川弘文館

牧野恭仁雄（2003）　「人名用漢字・歴史と事件――制限と規制緩和」『月刊しにか』14（7）pp.22-27　大修館書店

町田健（2005）　「名前とは何か」『月刊言語』34（3）pp.22-29　大修館

松枝到（2005）　「消えゆくアジアの名づけ」『月刊言語』34（3）pp.72-73　大修館

松原秀一（1982）　「フランス人の名前」『言語生活』（通号 361）pp.48-51　筑摩書房

間淵洋子（2006）　「名前にまつわる勘違い」『日本語学』25（4）pp.38-50　明治書院

六川雅彦（2011）　「日本語母語話者の名前の性別判断能力について――実在する名前を使ったアンケート調査」『南山大学日本文化学科論集』（11）pp.25-32　南山大学日本文化学科

六川雅彦（2012）　「日本語非母語話者の日本人の名前の性別判断能力について：実在する名前を使ったアンケート調査」『南山大学日本文化学科論集』（12）pp.33-41　南山大学日本文化学科

森岡浩（2003）　「珍しい読み方をする名字」『月刊しにか』14（7）pp.46-49　大修館書店

山田孝雄（1952）　「難読なんくんの種々相」『国文学解釈と鑑賞』17（6）pp.10-13　至文堂

湯沢質幸（2003）　「訓読みとは何か」『月刊しにか』14（5）pp.25-29　明治書院

吉岡英二（1998）　「女子の名前における"姓・名"の拍数 ：2 拍の姓でのバイアス」『神戸山手女子短期大学環境文化研究所紀要』（通号 2）pp.11-18　神戸山手女子短期大学環境文化研究所運営委員会

吉田澄夫（1952）　「むずかしい人名の正しい読み方」『国文学解釈と鑑賞』17（6）pp.4-7　至文堂

Ⅱ　論文集論文

阿部武彦（1962）　「伴造・伴部考」坂本太郎博士還暦記念会『日本古代史論集　上巻』pp.105-132　吉川弘文館

植村悠太朗（1996）　「人名呼称の変容形は語彙体系の何を反映するか――語彙記述の試行過程から」平山輝夫博士米寿記念会　編『日本語研究諸領域の視点上巻』pp.266-283　明治書院

宇根俊範（1986）「平安時代の氏族」雄山閣　編『古代史研究の最前線　第二巻　〔政治・経済編〕　下』pp.32-41　雄山閣出版

加藤晃（1972）　「我が国における姓の成立について」坂本太郎博士古稀記念会『続日本古代史論集　上巻』pp.385-435　吉川弘文館

北村文治（1972）　「カバネの思想と姓の制度」坂本太郎博士古稀記念会『続日本古代史論集　上巻』pp.365-384　吉川弘文館

熊谷公男（1986）「古代国家と氏族」雄山閣　編『古代史研究の最前線　第一巻　〔政治・経済編〕　上』pp.125-140　雄山閣出版

寿岳章子（1976）　「人名について」鈴木孝夫　編『日本語の語彙と表現』pp.283-292　大修館書店

関和彦（1996）　「古代人名考」林睦朗・鈴木靖民　編『日本古代の国家と祭儀』pp.664-660　雄山閣出版

田原広史（2008）　「人名」宮地裕・甲斐睦朗　編『「日本語学」特集テーマ別ファイル意味 2（命名/言語感覚）』　明治書院

長瀬治（1996）　「弓具名と命名との関連――擬音語の弓具名を，氏・名に託した人々の心情」平山輝夫博士米寿記念会　編『日本語研究諸領域の視点上巻』pp.284-303　明治書院

永野賢（1993）「子どもの名づけの心理」金田一春彦　編『日本の名随筆　別巻　26』pp.126-145　作品社

野元菊雄（1996）　「近過去の女性名（その 2）」平山輝夫博士米寿記念会　編『日本語研究所領域の視点上巻』pp.237-256　明治書院

平野邦雄（1962）　「古代氏姓・人名に現れた階級関係――特に帰化系氏族を通じて」坂本太郎博士還暦記念会『日本古代史論集　上巻』pp.1-48　吉川弘文館

前之園亮一（1986）　「大和政権の起源と初期の天皇」雄山閣　編『古代史研究の最前線　第一巻　〔政治・経済編〕　上』pp.37-54　雄山閣出版

溝口睦子（1994）　「神名・人名」古橋信孝・三浦佑之・森朝男　編集『古代文学講座 7 ことばの神語学』pp.213-233　勉誠社

村山修一（1959）　「古代人名についての覚え書」魚澄先生古希記念会　編輯『魚澄先生古希記念国史学論叢』pp.692-702　魚澄先生古希記念会
森公章（1986）　「天皇号の成立とその意義」雄山閣　編『古代史研究の最前線　第一巻　〔政治・経済編〕　上』pp.111-124　雄山閣出版

Ⅲ　単行本

21 世紀研究会　編（2001）　『人名の世界地図』（文春新書 154）　文藝春秋
Elsdon C. Smith・東浦義雄・曽根田憲三（1984）　『西欧人名知識事典』　荒竹出版株式会社
阿部武彦（1960）　『氏姓』　至文堂
阿部武彦（1984）　『日本古代の氏族と祭祀』　吉川弘文館
井戸田博史（1986）　『「家」に探る苗字となまえ』　雄山閣
上野和男・森謙二　編（1999）　『名前と社会 ： 名づけの家族史』　早稲田大学出版部
梅田修（1999）　『世界人名ものがたり:名前でみるヨーロッパ文化』（現代新書）　講談社
梅田修（2000）　『ヨーロッパ人名語源事典』　大修館書店
円満寺二郎（2005）　『人名用漢字の戦後史』（岩波新書 957）　岩波書店
大藤修（2012）　『日本人の姓・苗字・名前』　吉川弘文館
岡森福彦（2009）　『八色の姓と古代氏族』　岡森福彦君遺稿集刊行委員会
奥富敬之（2004）　『名字の歴史学』　角川書店
奥富敬之（2007）　『苗字と名前を知る事典』　東京堂出版
角田文衛（1980）　『日本の女性名　上』　教育社
木村正史（1997）　『続英米人の姓名：由来と史的背景』　鷹書房弓プレス
金田一春彦　編（1993）　『日本の名随筆　別巻 26　名前』　作品社
国松俊英（2002）　『人名のひみつパート 2』　岩崎書店
黒川伊保子（2009）　『名前力：名前の語感を科学する』　イーステージ
黒木三郎［ほか］（1988）　『家の名・族の名・人の名：氏』　三省堂
小林康正（2009）　『名づけの世相史』　風響社
佐伯有清（1985）　『日本古代氏族の研究』　吉川弘文館

佐伯有清（1986）　『日本の古代国家と東アジア』　雄山閣出版
佐伯有清（1988）　『雄略天皇とその時代 ： 古代を考える』　吉川弘文館
坂田聡（2006）　『苗字と名前の歴史』　吉川弘文館
佐久間英（1964）　『お名前拝見』　早川書房
佐久間英（1972）　『日本人の姓』　六藝書房
佐久間英（1973）　『名前・なまえ』（第 7 刷）　ポプラ社
佐藤稔（2007）　『読みにくい名前はなぜ増えたか』　吉川弘文館
志田諄一（1972）　『古代氏族の性格の伝承』　雄山閣
篠川賢（2009）　『物部氏の研究』　雄山閣
島村修治（1971）　『外国人の姓名』　帝国地方行政学会
島村修治（1977）　『世界の姓名』　講談社
清水義範（1999）　『名前がいっぱい』　新潮社
寿岳章子（1979）　『日本人の名前』　大修館書店
新藤正則（2001）　『苗字辞典』　湘南社
第一生命広報部　編（1987）　『日本全国苗字と名前おもしろ BOOK』　恒友出版株式会社
高梨公之（1981）　『名前のはなし』　東京書籍
高橋良典（1990）　『謎の新撰姓氏録』　徳間書店
武智方寛（2011）　『沖縄名字のヒミツ』　バーダーインク
武光誠（1998）　『名前と日本人』　文藝春秋
築島裕（1969）　『国語学』　東京大学出版会（初版 1964）
築島裕（1997）　『国語の歴史』　東京大学出版会（初版 1977）
鶴岡静夫　編（1988）　『古代王権と氏族』　名著出版
出口顯（1995）　『名前のアルケオロジー』　紀伊国屋書店
田中克彦（1996）　『名前と人間』　岩波書店
豊田国夫（1988）　『名前の禁忌習俗』（1992 第 3 刷）（講談社学術文庫）　講談社
直木孝次郎（1964）　『日本古代の氏族と天皇』　塙書房
直木孝次郎（2005）　『古代河内政権の研究』　塙書房
直木孝次郎（2005）　『日本古代の氏族と国家』　吉川弘文館

中澤忠雄（1994）　『日本の苗字とその流れ』（非売品）　中澤忠雄（山梨市）
南部舅（1992）　『日本古代戸籍の研究』　吉川弘文館
日本加除出版株式会社（1990）　『「人名用漢字表及び戸籍記載例等の改正」資料』（非売品）　日本加除出版株式会社
日本加除出版株式会社（2011）　『人名用漢字と誤字俗字関係通達の解説』（新訂）　日本加除出版株式会社
丹羽基二（1981）　『姓氏の語源』　角川書店
丹羽基二（1998）　『漢字の民俗誌』　大修館書店
丹羽基二（1998）　『知ってなるほど苗字の謎』　小学館
丹羽基二（2001）　『姓氏・家系・家紋の調べ方』　新人物往来社
丹羽基二（2002）　『地名苗字読み解き事典』　柏書房
丹羽基二（2003）　『日本の苗字おもしろ百科事典』　芙蓉書房出版
野口卓（2005）　『名前のおもしろ事典』　文藝春秋
日置晶一（1990）　『日本系譜綜覧』（1993 第 7 刷）（講談社学術文庫）　講談社
星田晋五（2002）　『名前の研究』　近代文芸社
前田晴人（2011）　『蘇我氏とは何か』　同成社
牧野恭仁雄（2012）　『子供の名前が危ない』　KK ベストセラーズ
増本敏子［ほか］（1999）　『氏と家族』　大蔵省印刷局
松本脩作・大岩川嫩（1994）　『第三世界の姓名：人の名前と文化』　明石書店
みうらじゅんこ&勝手に名前研究会（2011）　『いまどき日本人の名前』　スコラマガジン
溝口睦子（1987）　『古代氏族の系譜』　吉川弘文館
宮内則雄（2011）　『新説　日本人の苗字とその起源』　批評社
森岡浩（2009）　『名字のヒミツ：決定版!』　朝日新聞出版
森岡浩（2012）　『ルーツがわかる名字の事典』　大月書店
森公章（2013）　『古代豪族と武士の誕生』　吉川弘文館
安岡孝一（2011）　『新しい常用漢字と人名用漢字』　三省堂
柳田国男（1998）　『柳田國男全集　第七巻』　筑摩書房
義江明子（2011）　『古代王権論：神話・歴史感覚・ジェンダー』　岩波書店
吉村武彦　編（2005）　『古代史の基礎知識』　角川書店

レズリー・アラン・ダンクリング　著、中村匡克　訳（1987）　『データで読む英米人名大百科：名前の栄枯盛衰』　南雲堂
渡辺三男（1976）　『姓氏百話』　新人物往来社
渡辺三男（1976）　『日本の人名』　毎日新聞社
渡辺三男（1976）　『日本の苗字』　毎日新聞社
渡辺三男（1979）　『姓氏百話　続』　新人物往来社
渡辺三男（1994）　『名字名前家紋の基礎知識』　新人物往来社

謝辞

本研究を進めるにあたり終始あたたかいご指導と激励を賜った広島市立大学国際学部　欒竹民先生に心より感謝の意を申し上げたい。広島市立大学国際学部　岩井　千秋先生、横山　知幸先生、飯島　典子先生には入学当初から何度も貴重な助言を頂いたことも深謝する。

修士課程において、北海道大学文学部　池田　証寿先生と北海道大学文学部小野　芳彦先生から研究の基本姿勢並びに研究論文の書き方など、多大なるご指導を頂き本研究の礎となった。併せて心から感謝の意を述べたい。

他に研究活動にあたり各図書館の館員様から資料の調べなどご協力とご支援を頂いたことも記して、深く感謝の意を表したい。

最後に、筆者の留学生活を全力で支えてくれた母　張玉蘭、姨母　呉子蘭及び励ましてくれた他の家族と親友にも感謝は尽きない。